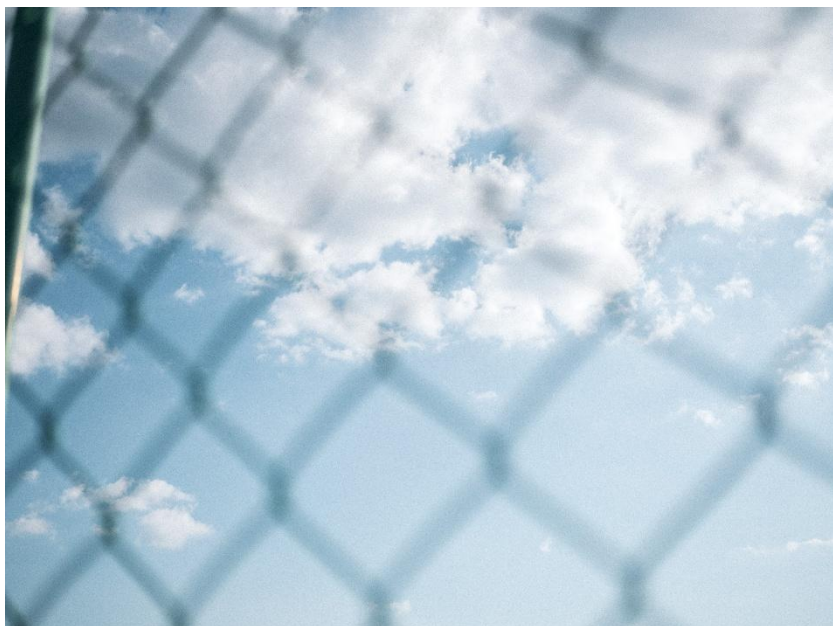




清教学園中学校 75 期 2 年「魅力的な人に取材する」作品集

語りが生まれるとき

清教学園中学校 75 期 2 年「魅力的な人に取材する」作品集

語りが生まれるとき

公開に際し、本校生徒と取材相手の氏名・所属は、生徒が希望した架空のものに置き換えました。
本文中の表現は、指導方針及び著者である生徒の意思を尊重し、原稿提出時のままにしています。

課題

- ① あなたが「魅力的だ」と感じる人に取材すること
- ② なぜその人に魅力を感じるのかをよく考えること
- ③ どんな取材で相手の魅力を引き出すか考えること

これらを踏まえて、あなたにしか書けないレポートを書くこと

語りが生まれるとき 目次

正反対の兄	世界中を旅する伯父さんの話	基礎の積み重ねから学ぶもの	愛せる仕事につくということ	先生と私の「魅力」	80年間の秘話	引き込まれる話し方	好きなことを夢へ	ギャップ萌えの母	会話の駄菓子屋	父のことを何も知らない私	スポットライト	何事にも真剣に	米Tの魅力	全てに憧れて
-------	---------------	---------------	---------------	-----------	---------	-----------	----------	----------	---------	--------------	---------	---------	-------	--------

聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手	聞き手
西園寺ひな	寺本大輔	辻山あい	所あおい	高島翔太	杉山貴俊	野原一瑛	清原志歩	横山さな	岩崎勇大	山本翔	川石結	浅田優菜	小林耕介	新山葵
182	164	152	138	130	122	112	98	86	76	66	54	46	24	8

気遣いができるとは

憧れの先輩を目指して

憧れのお父さん

おじいちゃんの過去

久しぶりの再会

先輩の日常に迫る…?

これからの私に必要なこと

My Mother

自分の意思を持てるかっこよさ

憧れの存在

憧れの先生に近づくために

My teacher

変わった魅力を持っている人

あとがき 語りが生まれるとき

あとがき はみだす・はみだされる経験

聞き手 〓 一ノ瀬くるみ

聞き手 〓 柴崎さな

聞き手 〓 鈴木千春

聞き手 〓 村上悠岐

聞き手 〓 向日葵愛

聞き手 〓 葛井康志

聞き手 〓 鈴崎心

聞き手 〓 山本優心

聞き手 〓 山下ここ

聞き手 〓 田中一二三

聞き手 〓 桐山結月

聞き手 〓 渡川歌麿

聞き手 〓 松田杏

授業担当 山崎勇氣

授業担当 南百合絵

198 210 232 240 250 264 280 290 306 320 328 342 350 362 367

正反対の兄

聞き手 新山葵

取材の動機

今回私が取材する相手、つまり魅力的に思う相手は、二歳年が離れている私の兄の隆志さんだ。兄を選んだのは「すぐに取材できるから」とか、「周りから評価が高いから」ということでもない。正直に言えば、兄のことは嫌いである。私への嫌がらせが多いからだ。しかし、いざというときには息が合い、頼りになる不思議な存在だ。兄を不思議に思う点は私と正反対の思考を持っている点である。

息が合うといえ、普段はよくしよもないことで喧嘩をするが、遊ぶ時は違う。ある遊園地で『フライングスインガー』というブランコをこぐようなアトラクションで遊ぶのだが、その時だけ息が合い、何回転もして互いに笑いあって、「もう一回乗ろう!」と、声まであってしまうほど遊ぶ時だけは息が合うのだ。

兄のポジティブさは普段からあらわれているようなものだ。兄の話聞いた中でも、特に「寝過ぎた」話が心に残っている。

兄の学校は大阪市内にあるため、途中の駅で降り、乗り換えをしなければならない。しかし、ときどき寝過ごして終点まで行ってしまうことがあるそうだ。焦ってしまいそうに思うが、私の兄は違う。寝過ごしてしまっても、焦るどころか、寝過ごしてしまった状況を楽しんでいるようで、兄によると「寝過ごしても、寝過ごして降りた駅で珍しい電車が止まっていたら最高やん!」とのことである。一部は鉄オタが芽生えてしまっているようだが、「何とかなるやろ!」という感じなところがまた魅力的なのだ。

ポジティブ思考以外にも兄に聞きたいことはたくさんある。なぜわざわざ家から遠い学校を選んだのか、なぜそこまで冷静でいられるのか、などなどいろいろ聞きたいことはある。だが、完璧さを求めるのではなくポジティブ、緩やかに考えられる兄の性格を今すぐにでも手に入れたい、同じようになりたいと思うから取材をしようと思った。

決まる日程

兄とは家で当たり前のように会うものの、よく話す日、話さない日がある。さらに、夏休みに入っているのにもかかわらず、兄の夏休みはほとんどが学校の予定で埋まっており、家に帰ってきて「今日は疲れているから取材はまた今度にして」と言われてしまい、なかなか取材をする機会がとれなかった。そこで、私は兄の学校のある日を確認した。また「今度にして」と言われてもらちが明か

ないので、学校がない日に取材できるか依頼した。

私「9日、取材しても大丈夫そう？」

隆志さん「うん、ええで。でも、俺なんかに取材することってなんかある？」

ここで私の親も入る。

母「そうやで、隆志で本当にええの？」

簡単に取材のことを許可してくれたが、「取材することある？」なんて。兄にしては意外なことを返してきた。いつもと反応が違ったのだ。親からも同じようなことを聞かれて心配されたが、私にとっての魅力的な相手は兄なので、「大丈夫」という言葉だけを返して取材の準備をすることにした。しかし、いざ取材をしようと思うと少し恥ずかしく感じた。

取材概要

日時…2024年8月9日 4時30分～5時00分

場所…リビング

取材した方…F学院高校 新山隆志さん

自分との関係…私の兄

止まらない緊張

取材前、兄が用事で出かけているので、帰ってくるまでに取材をするための準備をした。兄が帰ってくるまでまだまだ時間はあったが、緊張のあまりじっとしていられなかった。また、その日は猛烈に暑かったからか、温度計は30度を超えていた。流石に暑いと思い、エアコンをつけて涼むことにした。

まだかまだかと取材の時間まで待っていると、エアコンをつけているのにも関わらず、緊張からなのか、手汗が止まらない。落ち着くことができなかったため、どのように取材しようかなということを考えながら、総合学習用のノート、シャーペンと消しゴム、スマホの録音アプリ、iPadのWordを立ち上げて、本番に備えることにした。

いつもと変わらない

約束のインタビューの時間に近づいた頃、兄がやってきた。いつも見慣れている、上のTシャツと膝ぐらいまであるズボンを着ていた。キタキタと心を踊らせていたが、なんと、兄の手には本が抱えられていた！それも自分も好きな小説。取材にこたえてくれるのかなと心配になっていたが、その

必要は無くなった。兄は「こたえるから、はやくしてな」と言ったのだ。いつもと変わらない姿と対応を見て、いつの間にか緊張が笑いに変わっていた。

兄に今回の課題のことをもう一度説明し、「先生からの添え状」を渡した。「魅力を感じる人に取材するように」と授業の主旨が書かれてある。兄は嫌そうな顔をしていたが、それでも取材することは受け入れてくれた。録音の許可をもらうときも嫌そうな顔をしたが、それさえも受け入れてくれた。でも、添え状や録音のことを事前に伝えておくべきだったなと少し準備不足のように感じた。

難関学校に入学した理由

早速、インタビューを始めた。私は最初に、家から遠い難関学校に入学しようとした理由を尋ねることにした。家の周りにも私立学校はあるのに、わざわざ遠い難関学校を選んだ心と行動に憧れていたからである。

私「隆志さんはなぜ、F学院に入学しようとしたので…」

隆志さん「電車に乗りたかったから！」

質問を言い終わるまでに言われてしまった。それほどまでに兄にとっては重要な理由なのだろう。

隆志さん「個人的に、SFに行ったとき、スクールフェスティバルね。生徒の態度及び校風が良かったからやで」

私「難関学校ってやっぱり難しいことをするイメージがあるんですけど、入学するとき、緊張とかしましたか？」

隆志さん「いや、特に何も考えてなかったで。だから今の俺があんねん。あの学校行つて7時間授業は週に2回あるとか、提出物がやけに多いことに気づいたくらい」

やはり兄は昔から変わらない。取材は嫌々と言っていたわりには応えてくれている。もう緊張という文字は私の中になかった。兄が私立に行く理由は前から聞いていたが、F学院を選んだ理由は知らなかったで、兄の話が新鮮に感じた。兄ならもっと最初に「真面目」な回答をするのかなと思っていたけど、「電車に乗りたかった!」という「真面目」とは少し違う、いわゆる、「鉄オタ」の答えは実に兄らしいと思った。

なんとかなる精神

兄は私の前でそれほど慌てている姿を見ない。いつも焦っている私と違って、どんなときも冷静に見える。まあ、ときどきすぐく焦っているときもあるけど。それは置いておいて、そんな兄だからこそ、兄にトラブルが起きた時、どのような対応をしているのか気になった。

私「学校で予想外のトラブルにあった出来事があれば教えてください」

隆志さん「予想外の出来事？ 思ったよりはない、英語が思ったより難しかったくらい」

私「では、学校で提出物の出し忘れとかありましたか？」

隆志さん「ありますよ、そりゃ。焦ったりもするけども、その時はまあ、なんとかなる精神で。でも、1番怖いのは提出物を持って来るのを忘れることやんな。やるのを忘れるなんて滅多に無いから」

私「では、その提出物を忘れた時、どのような対応をしていますか？ 先生に怒られたりしましたか？」

隆志さん「提出物忘れたり？ …滅多に忘れることがないので怒られることはそんなにない。というか怒られたことないかも、提出物関係で。その忘れた時俺が思いっきり謝罪して、俺から謝罪してあの『明日絶対持ってくるんで』って言って、それで破ったことが一回もないから、先生が『まあそれやったらいいでしょう』って。正直言っいい？ 当日集めるときに忘れたことを言うんじゃないくて、集める瞬間になる前に『すみません、今日忘れてしまいました』って謝罪して、『持ってくるの忘れてしまったので、明日朝一番に持ってきます』って言うねん。ここ強調な!! 朝一番で持ってきますって。朝一で持って行きますって言うたら、先生が『朝一で持ってくるんやったら、それやったら許したるわ』みたいな感じで。『ただ、今度からは気をつけろよ』って注意ですまされる。怒られないねん。かつ、連続で忘れんかったら怒らんから、先生も。だって人は忘れるもんや!」

思ったよりも真面目に答えてくれたので、正直とても驚いた。会話の内容はメモをしておかないと忘れてしまうと思っていたのに、つい兄の言葉に夢中になってしまった。特に兄の長い言葉の中で最後の言葉が私の心に刺さった。いつも心の中では、「提出物を忘れたらしばかれてしまう」と思っていたので、兄の話を聞き、少しほぐれたような気がした。

ポジティブの幸せ

兄の「魅力」に迫るため、「ポジティブさ」について深く掘り下げることにした。よくよく考えると、兄のポジティブ思考は異常だ。いや、単に私がネガティブすぎるからそう感じているだけで、兄の方が正常なのかもしれない。しかし、私から見ると、やはり兄はとてもポジティブなのだ。そんな兄のポジティブになる理由に興味を持った。

私「先ほど、提出物を忘れた時、『なんとかなる精神で』とおっしゃっていましたが、その『ポジティブ思考』はどこからきていますか？」

隆志さん「だって考えてや。ネガティブに考えて、なんかいいことあるか？ ないやん？ ほんじゃポジティブでいた方がええやん。ある程度はあの、緊張感を持つといた方がええけど、普段は樂觀的じゃないと。お前みたいに普段から『どうしよう』なんて言ってみ？ 幸せじゃないやん！ 人間って幸せを感じるもんやん。幸せを得るためには『ポジティブ』であるべきや。『ネガティブ』でいた

ら幸せがどっかいく。そういうことや」

確かに、私は今までにもたくさんの幸せを手に入れることができる機会を逃してしまっていたのかもしれない。反対に兄はたくさんの幸せを手に入れてきたのだろう。やはり、ポジティブはネガティブとは正反対なのだと、改めて感じてしまった。

兄の過去

ふと頭をよぎったのは、兄は生まれた時からポジティブだったのかということ。そんなことはないだろうと思いつつも、少し気になった。

私「今はだいたいポジティブですけど、昔『自分ネガティブやったな』と思ったこととかありますか？」

この話をしたとき、兄はしばらくの間、手に持っている小説のほうに目をやった。昔の記憶からネガティブだった頃のことを探しているのだろうか。沈黙が続いていた。

隆志さん「…隕石が降ってくると思って怖いってなったことがあるけど、それ以外はないかな。

『隕石が降ってくるかもしれない！ぎゃー！』ってなった時期はある」

聞いたときは意外すぎて、驚くことしかできなかった。

私「え？それって…何歳くらいの時ですか？」

隆志さん「…えええ…小1？…小1やな。うん、小1くらい。これぐらいかな。記憶の中でネガティブに考えたのはほんとにそんなぐらい。だってネガティブになる必要がないもん。ネガティブやったら病むで。うつ病なるで？お前も一時期うつ病になりかけてたしな！」

私の昔の話をされて、ちよつとイラつとしたが、ここでキレてしまうと取材が成り立たないので、ぐつとこらえることにした。

私「では反対に、昔よりポジティブになったなって思ったことありますか？」

隆志さん「ない、ずっと同じ。逆にこれ以上ポジティブになったらあかんくなる。ポジティブにも限度はあるねんで。言ったやろ？樂觀的すぎたらあかんでって。ある程度緊張感を持たないと。…俺の場合は緊張感を持つてんのはテスト前だけな気がするけどそれは考えないでおこうな」

兄にしては真面目な答えを出してきた。日常的にこのようなことを聞いても、特に何も返事をしてくれなかったのに、今回の兄の「ポジティブにも限度はある」という言葉がずっと心に残っている。

ネガティブからポジティブへ

ネガティブからポジティブへ。これは私が幼い時から目標にしてきたことだ。でも未だその目標は達成されない。一見簡単そうに思えても、一度ネガティブになってしまうとポジティブにはなかなか戻ることができないのだ。

私「ポジティブから見て、ネガティブ思考をなくすにはどうしたらいいですか？」

隆志さん「ネガティブが無駄ってことに気づいたらポジティブになれる。無駄やん？ ネガティブの時なんかいい思い出があったか考えてみ？ ないです。ポジティブな時は？ いいです！ 以上！ いい記憶しかないのがポジティブや。ネガティブな、嫌なことは全部忘れてしまえ。それでいい。」

私「なるほど…」

隆志さん「あつ、でも、テストの結果は忘れてはいけません。」

私「…さっすがにテストの結果は覚えてますよ！」

隆志さん「当たり前や。悪いテストの結果は覚えておかなあかんくない？ それでネガティブになるのは話別やけど、良いテストの結果も悪いテストの結果も覚えておけよ。テストの結果は絶対に忘

れんなよ！ 忘れたら酷いことになるで」

私「その時の気持ちの切り替えはどのようにしていますか？」

隆志さん「テスト悪くても次リベンジしようってなるねん。終わったことは終わったこと、次に繋がればええねん。ほんじゃ、ずっと落ちた英検の記憶をずっとひっぱるんですか？ 嫌でしょ！ そんなことないでしょ！ 次頑張ろうってなるでしょ！ 例えば、中学受験で落ちてしまいました。それがずっとひびいています。意味ありますか？ ないです！ 以上！ 屁理屈かつ、正論です。あつ、でも全部自論なんで、全部真似しようとするって倒れるで」

兄は中学受験は失敗してないと思ったのは置いておいて、やはりどんなことでも兄から言われるとしても心に留まるのだ。改めて取材相手として、兄を選んでよかったなと感じさせられた。

取材を終えて

今回の取材は周りから見るとただの取材にすぎない。でも、私にとってはまるで兄の授業を受けているような、心の整理の仕方を学べた良い機会となった。

ずばり言えば、兄の「魅力」は、「適度なポジティブさ」だと思う。取材相手として選んだ時は、ポジティブでいつも冷静で、「今すぐポジティブさを手に入れたから魅力的」ということしかなか

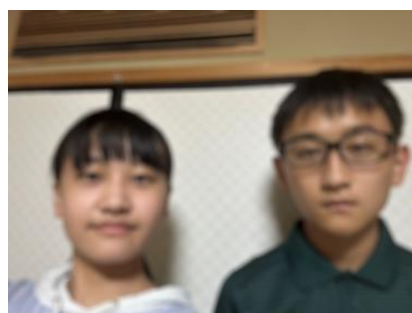
った。ずっとポジティブでいた方が心が楽になるに決まっていると考えていた。しかし、ポジティブすぎてもいけないことも知った。ここぞという時には緊張感を持つべき。兄に言われるまで、ポジティブには「メリット」しかないと思っていたが、今回の取材で改めて、「ポジティブの限度」に気づくことができた。

正直に言えばこの取材を終えたあとも、兄の生息は不明。よくわからないのである。取材なのに本を抱えてきたときは、本当にどうかしてと思った。しかし、わかっている点でいえば、昔から、兄は私から見ると完璧人間に一番近い存在とも言える。たまにやらかすらしいが、私の頭の中では兄の印象が「めっちゃ頼りになる人」となっていて、「ポジティブな人」となっている。でも、そんな兄でも失敗することはある。人間なのだから。しかし、兄はそこで崩れるのではなく、仕方ないと割りきるのだ。そんな兄を見ているからこそ、『人は忘れるものや』という言葉が今回の取材で一番心に残った。

インタビューを終えて、取材を受けて私のためになる話をしてくれた兄に感謝しつつ、私の中で少し心が「ポジティブ」になったような気がした。

「取材の最後に記念写真を撮ってもいいですか？」と聞いたたら、兄はとても嫌そうな顔をしたが、「ええよ」と答えてくれた。今までにも、記念撮影は何度もしたことがあったが、2人だけで撮ると

いうのはなかなかなかった。ポジティブな兄と未熟なポジティブの私が並んだ時、私の心のネガティブがだんだんと薄れてきているように感じた。





世界中を旅する伯父さんの話

聞き手 小林耕介

取材の動機

僕は、伯父さんに取材をしようと思う。なぜなら、僕は、ほかの国の自然や遺跡がどんなものか興味があり、伯父さんは、中国やカナダなどの約15か国にいったらしく（その時に中国語や英語を覚えた）、何を見、何を感じたか、気になったからだ。伯父さんは過去に中国に仕事にいったがコロナのせいで帰ってこれず1年ほど会えずじまいだったが、今は帰省しおばあちゃんの家にいる。

また、伯父さんは、生まれたすぐ後から会っていて、長いつきあいだし、優しいのでどんな質問にもしっかり答えてくれると思った。また、お盆休みはおばあちゃんの家に戻るののでそのついでに聞くことが出来るので、取材しやすいと思ったからだ。

そんなわけで今回は優しくて朗らかで、いろんな国にいったことがある、伯父さんに取材しようと思う。

取材の連絡を取るまで

僕は伯父さんのLINEアカウントを知らないなので、兄妹であるお母さんに許可を取ってもらった。そして、取材予定日の次の日に伯父さんが北海道に行くから、やり直しのないように質問を考えてお

いてと言われ、変な質問になってしまったらどうしようと不安になった。

取材概要

日時…2024年8月15日

場所…おばあちゃんの家

取材した方…村上重信さん

自分との関係…甥と伯父

インタビューが始まるまで

先程も述べたように、おばあちゃんの家で部屋から伯父さんが戻ってくるのをお茶を飲みながら待った。取材の時間が近づくにつれ緊張するものだと思っていたが、案外冷静にシミュレーションをすることができた。そして、伯父さんが部屋から戻ってきた。

伯父さんはいつもの私服姿に眼鏡をかけてあらわれた。

いつものようにやさしい雰囲気で、会ったとたんに沸き上がった緊張が一瞬でなくなった。簡単にお礼を言った後、すぐさまインタビューをしようとする僕をみてお母さんが録音忘れているよと教えてくれた。そのまましていたらと思うとぞつとする。

録音も開始し、いよいよインタビューが始まった。

● 中国編 ～世界に目を向ける～

僕「どのくらいの国にいったん？ まずはだいたいいいから。」

伯父「だいたい15か国くらいかな。」

僕「じゃあまずなんでそもそも行こうと思ったん？」

伯父「まず大学を選ぶ時に中国語を専攻した。それはカンフーが好きだったから。何も考えてなくてノリと勢いだけ。でも大学では全然喋れなくて。生活費を自分で稼ぐためにバイトに明け暮れてたから。」

僕「全然じゃあ、中国語学科である必要自体はそんなになかった？」

伯父「無かったね、無かったね。だからまあでも外国語やってたから卒業後にやっぱ中国行って中国語を勉強しようと思って。」

でまあ、あの中国の北京っていうところに来たんだけど。結局みたいな感じやったけど。その時ね、中国北京の。あの住むところが、学校の中に大学の中にある宿舍寮があつて。分かる寮って？ 学生寮そこで住むんだけど、ルームメイトにアメリカ人がいて、ネイトっていうんやけど。」

僕「中国語じゃない人と組むってこと？」

伯父「そうそうそう。留学生ばかりが入ってるから中国人がいなくて。で、そのアメリカ人と仲

良くなって友達とつながっていったら、いろんな国の人と友達になって、まあ、中国以外のほかの国にも興味を持つて。」

僕「で、宿舎でどんな勉強してた？」

伯父「中国語の勉強。そこで今、中国語話したりするのはそこで宿舎というか、まあ大学だね。大学はまああんまり勉強してなかったけど、喋れるようになった。さあ、向こう行って生活してた。遊びに行ったりしてたら、その喋りで。初めは大変だよ。全然通じひんし。まあ、中国人はね、はっきり言うからね、何言ってるかわからへんとか言われるからね。それで聞き返しても、同じ言葉を大きい声で何回も言うだけやから。」

カナダにも行くんだけど、カナダ人とかはこっちが分からないって言ったら違う言い方を考えてくれた。中国の人は厳しいから。こういうからこうなんやみたいな感じだから面白いよね？」

僕「わからないことはどうやって？」

伯父「電子辞書とか持つてって、あの辞書で調べたりもあるけど、あとはまあ漢字書けば日本人は分かる大体意味がある。でもやっぱり漢字でも伝わらないこととかあったけど、いろんなその言葉の単語だけじゃなくて、前後そのこととか会話の流れとか、その時一緒に見るものとか環境とか考えると、まあそういう想像力働かされる。ああ。っていうのは、まあ、外国語を話すときにコミュニケーションする時には大事だね。」

一度はあまり取り組めなかったことを、目を背けず向き合っているのがすごいと思った。

●カナダ編　〜海外に馴染むために〜

伯父「まだあるよね、途中大丈夫？　とりあえずじゃあ次のカナダ編。中国行って、そのアメリカ人のネイトがルームメイトやったから、さっきそのいろんな国の友達が出来たって言ったけど、英語なんや。中国でも英語がもう日常にこう耳に入ってくるような状態だったから、あーやつぱり英語もできないとダメだなと思って。

あと、もう一つは学費の問題があって、あの中国って学費安く済んだんよね。思ったより。その日本より全然安い安かった当時はね、今は高いと思う。うん。しかも大学は初め三か月だけ行って、あとはなんか予備校みたいな簡単な塾みたいなのところとか、あとなんか1対1で話すような、あの何て言うかな？家庭教師みたいなでやってたり。学生を捕まえてね大学生をやったりしてたからまあ、学校行くお金を抑える。だからその部分がまあまああるからだったら英語も勉強しようかなと思ってカナダへ。

なんでアメリカじゃなくてというよね、ビザの問題かな。あの当時、今わかんないけど、ビザってわかる？　当時なんかパスポートの他にその国によつてね。あの何だろう外国人の。てか、日本人はえっと、例えばアメリカだったら三ヶ月はいれるけど、三か月以上いるんだったら一回ええとほかの国行つてくださいますとかでカナダの場合はえっと六ヶ月のビザが出てきてね。で、一回延長できるんだ

よ。という事で一年間よね？ すぐく外人を受け入れる国で行きやすかったかなっていうのと、まあまあ、北米でうんあの。北米英語とイギリスの英語で違うから北米の英語勉強したかったから」

僕「ヨーロッパも行く？ そういう時とかつて北米の英語は通じる？」

伯父「旅行はね。北米の英語でまあまあいける。そんなに違わないんだけど、まあ、あのそっちの方が良いかなと思って。うん。」

僕「一年くらい行ってた？」

伯父「一年弱ねうん、十ヶ月ぐらい行ってた。二ヶ月残して帰ってきて。二ヶ月ぐらいなんやったわけ？ あれ？ 確か結婚式出るために帰って来たんだっけ？ I子（僕の母）の。その前に結婚前にカナダ行ってロッキーマウンテン行きたいとかなってカナダに来てんね。車でずっと運転して、山羊に囲まれたり。」

僕「へえ、おもしろそう。そんで？」

伯父「そうそうレンタカーで。そういうのが好きやね。まあ、湖とか良かった。なんかどつかのなんやろ。お城みたいなホテルでなんかビュッフェで食べへんかったわけ？ なんか覚えてんねんけど、ランチで安くて。なんか食べたいからその間で北から南に下って行った。面白かったけどね。」

僕「なんかじゃあもうちょっとなんかカナダのさあ、その滞在で勉強してる間ってなんかなかなかちょっと印象深かったことは？」

伯父「ああ、二つ街に行ったよね。カナダでは一つ目がはじめに行ったのがビクトリアという町

で、でその後バンクーバーってオリンピックもやったことあるから聞いたことあるかもしれないけど大きな街やね。

その教える学校がもう百以上あつてめちゃくちゃあつて、俺は金が無かつたからえつとなんだろ。一回目って、その各学校トライアルレッスンってただで受けれるねん。であちこちのただで受けれるところを毎日毎日あちこち行つて、それでちよつとお金を浮かせようとしたっていうのはしたかな。でもそうなつてくると、毎回毎回自己紹介しないといけない。」

僕「恥ずかしい？」

伯父「恥ずかしくはないけど、あのだんだん自己紹介が上手くなった。何十回もやつてるから、名前ゆつて。前に中国に行つてたよとかであのなんでカナダに来たのはそうさつき言つたような。その友達が英語で喋つてたからだよとかつていう話をしててそう。」

僕「ええ、塾みたいなの？」

伯父「うん、そうだね。みんな他はこう知り合い同士の人の中に新しい人が入っていくからまず簡単紹介は自己紹介しないといけない。それだけは上手くなった。でも、もうさすがになん十回もやつたら飽きてきて。」

僕「確かに。でも一日だったらさ、毎回いっちゃん最初のものしか受けられへんじゃない？」

伯父「まあ、例えばなんか一回やつたら、次の日は違う学校に行く。」

僕「また同じことをあの受けるだけとまらないん？」

伯父「内容はだつて学校によつて違うから。」

僕「もう全く被らずにいけたん？そこは」

伯父「授業の内容は、いろんな学校が先生によつて違う内容をずっとやっているとところに途中から入るから。」

僕「そつか。ちよつとだけずれてるみたいな感じで、どんどんいろんなことを？」

伯父「そうそう。要は、英会話ってなんだろうなあ学校の勉強と違ってさ、学校の勉強って、例えば算数とかやったら足し算わかんなくて引き算とかもわかんないと次いけないとか。そんなんじゃないから英語は、あの言葉やからさ。」

やっぱり中国語先にやってたから、だいたいもうあの頭で考えなくて、もう聞いて耳と、聞いて口で反応するっていうスポーツみたいに考えてたからさ。」

僕「中国語をその感覚でやってたから、英語もその感じで？」

伯父「そうそう。もう学校でやる内容を一から十まで全部覚えるっていうのは、言葉に関しては全然必要ないと思つてて。外国語に関してはもうあのいかにも、例えばこうやっていろんな話ができるかどうか。コミュニケーションするための道具。まあそうぐらいしくないから、この単元をしつかり覚えることにはあまり。ああ、自分の気持ちを伝えて、向こうの気持ちを理解してっていうことができればいいからね。言葉って」

伯父さんがそうやって、少しずつ頑張って節約をしているのを想像して、面白かった。

●放浪編　様々な国を見て

僕「じゃあ、次に放浪編聞かせてほしいんやけど、だいたいほかはこの国に行った？」

伯父「そうだね。旅行、まあ中国とカナダはもちろん、さっき言ったけど行って。中国って広い。カナダも広いけど、いろんなところがあって、まず中国国内で言うとなんとね、チベット。聞いたことある？　チベット。新疆ウイグル自治区っていうところがあったりとか。砂漠地帯。砂漠の所があったりとか、雲南省というところとか。」

僕「万里の長城とかは？」

伯父「万里の長城は北京の近くで見えるよ。もう結構ね、中国人の人にびっくりされるぐらい半分ぐらいのはいったかな？　中国。」

僕「すげー。普通に現地の人でもそんなに行かない？」

伯父「行かないと思う。だから話したらびっくりするよ。多分十何えつとね。全部で30省。省っていう字を使うんだよね。中国少ない。ああ、省略のしょうね、その半分ぐらい行っただと思う。確か。」

僕「30省の半分ってことは15くらいってこと？」

伯父「30ぐらいだと思っただけだね。ちょっと調べようか？　前数えたことあるけど忘れた。ち

よっと待ってな。中国は、 $22+5+4+2$ 。31、33」

僕「じゃあ16ぐらい？」

伯父「そうだね。その半分ぐらい行ってると思う。ちゃんといっこ数えることないけど。

で、その中国留学の時にまああちこち旅行行ったりとかして、まあまあそれが楽しかったっていうのと。あとはそうだね。とりあえず行った国全部言おうか。韓国でしょ。えっとシンガポール。韓国、シンガポール。」

僕「アジア？」

伯父「アジア編やでこの辺。旅行アジアが多いから」

僕「なるほど」

伯父「ヨーロッパとかもあるけど、あとで言うわ。シンガポール。うん、えっと。インドネシア。ベトナム。タイ。カンボジア、えっととネパール。んで。えっとあとなんか台湾、香港も行ってるけどね。まあ、香港は中国の一部になっちゃったから。」

僕「アジアだけでも10行ってる？」

伯父「ヨーロッパ4つぐらいしかないよ。ヨーロッパがねえ、チェコ、オーストリア、でどこだええとハンガリー。」

僕「ハンガリーってどこらへんやろ。ヨーロッパの。」

伯父「ヨーロッパの東のほうわりと。ルーマニア。」

僕「ええ、なんかフランスとか行ってると思ってた。」

伯父「それは歳いってから行きやすいから。」

僕「行ったところは歳とると行きづらい？」

伯父「多分、チェコとかオーストリアはいけるかもしれないけど、ハンガリーとかルーマニアとかはちよつと歳いってからは行きづらいからな。

移動手段とか観光用のそのなんだろう？ 環境が整ってない。うん、やっぱりフランスとか旅行客多いからさ、結構。人気あるね、あそこなんかいろんな人いけるかなっていう理由。だからアジアも多いねアジアもやっぱり若い時に行きやすい。汚いところ多いし。あとアメリカ。」

僕「アメリカの方が密度さ、人口密度多分多いやろ人口密度、アメリカと中国のどっちか？」

伯父「中国じゃない？ だって中国14億人いるからね。アメリカって何億だっけ？ 3億、3億5000万ぐらいだっけ？」

僕「じゃあ人って中国の方が多かった？」

伯父「多いよそりゃあ」

僕「そのアメリカってなんかめっちゃ多いイメージ。ニューヨークとかのなんかさあ、どこ行っても人がおるみたいなんかな。そのぐらい多いと思ってたけど、そういうのは一部だけか。」

伯父「ニューヨークとかロサンゼルスは確か多いかもしれないけど、まあ全体で見るとそんな多いって感じじゃないかな。日本の方が全然多いんじゃない？」

僕「確かに確かになんか映画とかたまにちよくちよくいなかみたいなんあるけど、全然人いないもんな。」

伯父「うん。あとはそうだね。そう、俺がね、そうやっていろんな貧乏旅行をするようになったきっかけっていうのが、大学生の時にドラマやってたんよな、テレビ。あのそれが小説を元にした。あの限定のドラマで深夜特急っていう。」

僕「深夜特急聞いたことある気がする」

伯父「1970年代が舞台のそういうなんて言うのかな？あの貧乏旅行した人のまあ小説じゃないかな？あの実際にあった話をベース、ちよつと脚色もあると思うけど」

僕「『グリーンブック』みたいなの？」

伯父「それを見て、ああ、こういうことやってみたいなって思ったのは、何となくあったかな？大学生。」

僕「ええ、それは実際じゃあかなって良かったよね。」

伯父「そうねうん。まあ小さい頃からさあ、『男はつらいよ』が好きやったから。」

僕「見たことない。それってそういう旅行とかするの？」

伯父「そう。日本だけどね、国内だけどね」

伯父さんが旅好きなのは、ドラマなどささいなことから始まるのが意外だった。

●文化について（日本との感覚の違い）

僕「じゃあ、いろんな国に行ったりして、その文化と違って独特の文化と違って調べたりしたことがある？」

伯父「それはまあね、住んでたら、さっきのさあ、ちよつとした中国の、なんか中国人はつきりした人多いとか。じゃあ最後は普通に道聞かれて、あの答えてもあの全然あの外国人と思われずに普通に聞かれて答えたんだけども。」

僕「中国人に？ 中国で？」

伯父「そうそう。最後はね。でも初めの方はもうヘタクソと言われたり。文化っていうとぱつと思ひ浮かばんけどな。うん。ああ、今日散髪屋で出て思ひ出した話なんやけど、ネパール行つた時に農村部のところに行くっていうまあなんだろう？ 行つたんだけど、でえつとどつかの民家に泊まつて、そこであのご飯食べてっていうようなことをしたんだよね。」

僕「そういうのってどうやるの？ 泊まらせてくださいってピンポン？」

伯父「そうじゃない、えつとね、一応なんだろう。そのネパールのある街トカラという街なんだけど、このあの旅行会社の子会社があつて、その人の地元に来ていかれた。結局、あとから分かつてんけど。トレッキングって言つてその何時間か山を歩いて、あのいろんな景色を見えるみたいなのコース。そういうコースがあつて、それで連れて行ってもらつたらその人の地元やつたっていう。」

そうそうそうでもまあ良くて、すごい未だよく覚えてるんだけど、あの。なんだろうその民家で友

達にもらって、民家であの、バターチキンカレー。要は、あの鶏肉の入ったカレー。ごちそうになった。美味しかったんだよ。でもそうそのチキンの問題で、えっと民家に着いたらさ、あのなんかわーと子供とか走って遊んでるの、鶏追いかけて回してね。で、あの、夕方になったらそれをおじいちゃんがかつとつかんで首をバーって切ってひっくり返して血を抜いて羽むしって。それが出てきた。でも遊んでた子供もすげえおいしそうに食べたから、もうそういうのが日常なんだよね。」

僕「ちよつとどういう気持ちになった？」

伯父「おお、と思ったけど。まあ感動したよね。そこまでしてくれるんやと。そうやって突然行つた者に対して、最大限のおもてなしやから。それはカルチャーショックとかね。やっぱりあのなかなか日本では絶対経験できへん」

僕「それって？ ええ？ グロかったやっぱ？」

伯父「そんなこともなかった。なんか当たり前にしてるから大げさになんかこうやってるわけじゃなくて、手慣れてたからね、うん。」

文化ねえ。文化って違うもんやからねえ。違うもんだからね。そうだね中国で、あ、でもね、そう、中国ってさっき言ったように、みんなこう思ったことをストレートにバンと言うというから最初はこうやっぱりさ、びっくりするやん。そんなきついこと言うなとかって思うやん。」

僕「それは遠慮がないとか、そのデリカシーがないとか悪気があるというわけではないんやんね？」

伯父「悪気はないよ。傷つくって思っていないから。もうそれが当たり前やからそう。あのなんだろう？ あのそうその話を今しようと思ってる。中国ではじめはそうやってストレートに物をゆってるから、それになんだろういらつとしたりとか、びっくりしたりとかっていうのはあったけど、慣れてくるとこっちもそのまま思ったこと言えればいいだけだからすごい楽。」

僕「どんなこと言うん？ いてこまずぞとか？」

伯父「そんなシーンにはなかなかならんけど。俺はあのやりたくない、いやのノー、嫌だとか言いやすい。それに対してなんだろう、あの根に持ってとかはない。周りがどう相手はどう思うか？ がベースじゃなくて、自分がどうしたいかそっちの方が絶対そう。その方がね、最終的には効率がいい。あの効率がいい。」

だって、相手のことが永遠わからない相手のことばかり考えても効率が悪い。っていうこと。多分何パーセントかわかるんだけど、良かれと思ってやっても、いや、そんなこととして欲しくないのにつてなるやん。でも自分がやりたいことは自分のことでやから分かるやん、だからあの自分が満足することをみんなでやれば効率がいいはずなんよ。

それだけじゃないけどね。それはあの日本の良さはあるんやけど、合う合わないがあると思うよ。だからそういう考え方もあるぐらいかな。あのそんなになんだろう？ そっちのがいいとも思わないし、攻撃的なのがいいともかぎらないから。」

●今後行きたい国について（目標に向かって）

僕「ええっとじゃあ次あの今後どこか行く予定とかあるかな？」

伯父「予定ね、予定は今円安だからなかなか行けないけど。だから今海外からいっぱい人が来るんだよ。で円高になったら、そうね、もうちょっと。行きやすくなるから行きたいとこいっぱいあるけど。まずは。そうなんかね。まずベトナム行ったことあるんやけど、街しか行ってないんやけど、洞窟とかあるんだよ。洞窟っていうてもなんか綺麗で写真で見たらびっくりする。洞窟。なんて名前だったかな？ソンドン。」

僕「すげえ。なんかあれやなジブリのみたい」

伯父「映画みたいでしょ？これが何キロも続いている100時間かけて4泊5日とかで、中で泊まりながら行くっていう。」

僕「めっちゃ面白そう。すごい全然違うとこでキレイや、この道って自然生成された？」

伯父「そうそう、ここは行ってみたい。来年ぐらいまで多分予約埋まって。」

僕「凄いな凄い。綺麗綺麗。でもソンドンで水とかがどうやってするんだろう？」

伯父「長靴履いてなんかずっと。泳ぐまで行かないと思うけどね。すごいよ。行ってみたいなあ。あとアフリカのえっとね。セレンゲティ国立公園。これはね、タンザニアにあるのかなサバンナの。もういろんな動物がいる所」

僕「でも結構危険なんじゃない？」

伯父「なんかね、泊まるところがあつて、そのそばにライオン出たりとか象が荒らしたりとかつてあるらしいよ。」

僕「でも、そのヒョウとかチーターとかきたらどうするの？」

伯父「まあ、なんとかなるんじゃない？ これもうね、本当野生動物がいっぱいいて、でつかい自然があつてつていうのをみたいになつて思つて」

僕「こういうのつて目だけでなく、いろいろそこでなんか狩るまではいかずとも、触れたりとかできるの？」

伯父「触れたりはないはず。それができないと思う。でもハンティングとか向こうでやつてる人は普通に居ると思うから、趣味で。あのね『沈まぬ太陽』つていう小説があるけど。その中でも出てくる出てくる。はじめケニアだろうか？ そういう描写がある。

で、あと三つとりあえずね。もつとあるんやけど。まずアイルランド。ウイスキー。そうだね、蒸留所も行つてみたいけど、バーだね。本場なんだよねウイスキーの。」

僕「ウイスキーが一番好き？」

伯父「うん、バーもね。日本のね、山崎つていう場所があるんだよね。大阪の京都との間のところ。そこにあの山崎蒸溜所とか、あと北海道の余市つていうところがあつて、台湾にもあつて、そこも行った事があつて、結構ね、あちこち行つてんだよね。」

僕「やっぱりのしい？」

伯父「そういうところはやっぱり楽しい。まあ面白い。あと、インドのね名前忘れたちよつと待ってや。ラダック洞窟、あのチベット民族が住んでるところ。インドっぽくないよね。だから写真なんか見ても。要塞みたいな。自然も綺麗だしね。」

チベットの建物こんな感じやからね、そうここも行ってみたい。あの前チベット行ったことあるんだけど、今もうチベットで外国人いけないか行きづらいんだよね。うん、行くとしたらこういうの方が行きやすいかな。そののやっぱチベットの何だろう？ こういう建物とか景色とか。独特の雰囲気があるから好きでまた行ってみたいなと思って。」

チベットに前に行ったときにすごい印象に残ったことがあってさ。文化とかちよつと違うんだけど、自然だけど、あの、夜にトイレ行きたくて起きたんだよね。トイレがちよつと離れた屋外のちよつと離れたところにあって、そこまで歩いていくんだけど。全然光ないから懐中電灯つけて。そうなんかね。そうそう、消した時にね、なんか明るい。ぼんやりとね、なんかと思って見たらすごい星がすごくて。やっぱり標高4千5千メートルのとこやったからやっぱり空氣の層が薄いわけやん。すごかったよ。天の川って言葉も知ってるよね？ でも普通に見ても川ってわからんやん。でも帯みたいになって、また見たいと思って。」

僕「俺もいつてみようかな」

伯父「うん、行ったらいい。それで最後、南極。」

僕「北極よりも暖かい？」

伯父「いや、寒いよ。標高が高くなるから。大地の上に雪が積もっていくやん。平均で2、3メートル積もってる。だから、標高高くなってる気温が低くなる。北極は海の上に氷がはってるだけやら高くはなんない。すぐ溶けていくから。」

僕「南極でなにがしたい？」

伯父「南極はね、まずはそのとりあえず、南極の氷の色が好きなんだよね。氷山の色。グレイシャーブルーっていうんやけど。グレイシャーっていうのは氷河っていうのは意味ね。すごい好きなんだよね。こういう青。」

僕「へえ、めっちゃ綺麗。透き通るような。」

伯父「この色が好きで、それをちよつと写真に収めたいし、実際の目で見てみたいなど。」

僕「なるほど。それでは取材ありがとうございます。」

伯父「これでいいの？ これで大丈夫？」

僕「あの先生に言われたけど、大体20分から30分ぐらいで充分だよって言われて、50分位したから。ありがとうございます。」

インタビューを終えて、改めて分かる伯父さんの凄さ。

僕は伯父さんの話を聞いて、いつものんびりしているイメージの伯父さんがやりたいと思ったことを実際に行動して実現させる、カッコいい大人な気がした。

中国では何気ない会話の中でも中国語を習得しようとしたり、辞書を引いて言葉を調べたりと意欲的に吸収しようとする様がすごいと思った。

そしてそういった生活の中で他の国についても興味を持ち、そのためにカナダへ行って少しずつでも英語を習得しようとする、その行動力と熱心が伯父さんの良い所だと思った。また適応力もすごい。中国の人がはつきりと言うので初めは戸惑っていたが、その方が時間も取られず楽だという風に受け取ったり、いろんな国の人がいる寮のなかでも上手くみんなと仲良くなっていけるのは適応力が高いからだと思った。

特にネパールで鶏をさばいて提供してくれた時に「えええ」とかいう風に引いたりするだけではなく、「こんなことまでしてくれるんだ」と感動し、「これがここでは普通なんだな」と納得するのは伯父さんが多様性を受け入れられる性格だからこそだと感じた。

また、僕は伯父さんから話を聞いているうちにだんだん目の前に風景が広がってくるように感じていた。

伯父さんから様々な国のことを聞く内に、将来自分も様々な国にいつてそこでしか味わえない文化を知り、美しい景色を見たいと感じ、それと同時に伯父さんがなぜ海外旅行を好むのか分かった。

自分のやりたいことを成し遂げ、それを一つの生きがいと感じている伯父さんのように僕も夢中になれるものを見つきたい。





基礎の積み重ねから学ぶもの

聞き手 浅田優菜

取材の動機

私にはもうすぐ86歳になる祖父がいる。少し怖そうな雰囲気で、「これはなんで」という風に何でも質問で返してくる。その上頑固な性格だ。だけど雰囲気は怖そうだけで、普通の優しいおじいちゃんだ。

そんな祖父は昔、S製薬株式会社というところで働いていて、とある薬を開発したグループに所属していたらしい。私知知っている若いころの祖父のことはこれしかないが本当かもわからない。その薬についても私は何も知らないし、他にも台湾で生まれた、出雲大社で働いていたなど本当かわからないが聞いた記憶があるだけで祖父のことは本当に何も知らない。

私が小学6年生だった時、ある日突然祖父が「目に見えない仕事っていいな」という言葉を発していた。そのときは何も思わなかったが、後から考えてみるとなぜそんな言葉を発したのかすごく気になった。なので、なぜそんな発言をしたのか、祖父にとって「目に見えない仕事」というのはどんな仕事のことなのかというところをはじめ、祖父の過去のことや、開発していたという薬について聞いてみたいと思い、インタビューすることにした。

取材概要

日時 2024年 8月11日 17時30分～18時00分

場所 祖父の家

取材した方 浅田勉さん

自分との関係 祖父

祖父の将来の夢

インタビューを始めた。まずは祖父の過去のことや、S製薬に入ろうと思ったきっかけを尋ねるところにした。

私「子どものころの夢はなんでしたか。」

「取材」だからということもあったのか、母や祖母も静かにこっちの話を聞いていたからなのか、緊張してしまっただけは使わない敬語で聞いてみた。

祖父「夢、そうねえ人の役に立つ仕事があった。」

祖父の仕事について

私「次に、人の役に立つ仕事がしなかったといっていました、どうしてS製薬株式会社というところで働こうと思ったのですか。」

祖父「いやもうそれはね、たまたま学校卒業した時に先生の推薦でそこへ入社したんです。それで昼は働きながら夜にK大学の理工学部で勉強してました。卒業後も同じくS製薬で働いていました。」

私「では、S製薬でどんな仕事をしていましたか。そのしごととはしんどかったですか。」

祖父「仕事は研究所で新しい薬の開発研究をやっていました。あとは、なんでも仕事はね苦しいし、大変なわけよ。普通に仕事して行こうと思ったらみんな苦しい大変なことだよ。これから優菜ちゃんが大きくなってどっかで仕事して、人の役に立とうと思ったら、それは苦しいことばかりの連続だと思うけれどもそれに負けたらダメなんだと思うね。」

私「今、仕事(研究)はしんどかったと聞いたんですけどその仕事を続けられた理由はどう考えていますか」

祖父「研究のはね、やっぱり1000回も2000回も失敗実験を繰り返してその中に一つぐらいしか成功することないわけ。だけど、その成功した時の喜びいうのはものすごく大きいものがあって、それがあの研究を続けるいわゆる力になってくるんだ。だからそれぞれ研究者みんながそれを目的に、それを楽しみにして研究しているわけで、それが私の時、結果的に成功したというのはいす

ごくラッキーだったかもしれません。」

私「ではS製薬での研究の中で新しい薬を開発したグループに所属していたというのは本当ですか。また、開発していたはどういう薬ですか」

祖父「本当です。開発したのは抗生物質という分類にされる薬で、感染症に効く薬です。」

私「どれぐらいのその、どれぐらいの期間をかけてその薬を作りましたか。」

祖父「それはね、長い間ずっと研究所生活の中でいろんな薬を作ろうと開発研究に携わってきたけれども、まああの今話している薬の開発に携わったのはそうねえ15年ぐらいかな。本来、薬の開発はひとりでできるもんじゃなくて、私がやってたのは一番初めの新しい薬を発見してそれをどう作るかという基礎研究であってね、その後それを大量に合成して、それを製剤してそれを販売するという長い行程がある。だから一つの薬の開発には何十年もかかるし、しかも予算も何100億円の投資をしなければならなかったから今みたいに短期間ですぐ出来ますというようなものではなかったよ。」

私「じゃあその薬を開発できた時はどういう気持ちでしたか。」

祖父「嬉しかったね。嬉しかったけどもそれはあくまでもおじいちゃんがやってたのは基礎研究だから、これからそれが製品になるかどうかっていうのは分からないわけで、何年間もかかってまあ開発やからやっこさ、あの販売して前からお金儲けになるんだよね会社としては。だから嬉しかったけどって感じだったね。」

私「では薬を作るのがおじいちゃんが好きだったんですか。」

祖父「おじいちゃんが作った薬でそれはまあ世界中に売り出したんやから、何百万人か何千万人の人に使われて命を助けたわけで結果的にはそういうものを開発したということはね。非常に意義のあることだと思ってる。」

祖父にとって目に見えない仕事とは

今回の取材で一番聞きたかった、私が聞いたあの言葉の意味。やっと聞けると思い、つい早口で質問をしてしまった。

私「じゃ最後に、目に見えない仕事というのはどういう仕事なのか、なぜいいなと思ったかその理由を教えてください。」

祖父「いや別に目に見えないからいいんじゃないに、目に見えないことでも非常に大事な仕事がいっぱい世の中にあるってこと。例えばオリンピックで優勝する、まあ仕事じゃないんだけどね笑。オリンピックで優勝した、金メダルもらった、って言ったらみんな注目するじゃない。それもまあ一つの成果だけでも。例えばネジを一つ作るにもネジが一つがないがために宇宙ロケットが飛ばないこともあるし、変なネジを作ったがためにその宇宙ロケットのが失敗して爆発してしまうかも知れない。だからそのネジ一つ正確な部品を一つ作るのは非常に大事だってこと。それはね、部品とかネ

ジというのは表が全然見えないけれども本当はそういうことを地道にやってる仕事というのが一番大事なわけで、その積み重ねでいろんなものができてくるわけ。

例えばテレビを作るんだって半導体一つ作るのは大変な仕事なんだけどこれを作ることは、まあ目に見えない。テレビでは画面に映る事しか見えないけど、この中にはたくさん半導体がある。そして、半導体一つ一つに、多くの研究者の頭脳の集積からひとつの半導体ができるわけ。そのたくさん過程を経て結果としてキレイな画面が見えるわけだけど、本当に大事なものはその半導体を作る一番元を研究してそれを作り出すというのが非常に大事なこと。そういう意味では目に見えない仕事の方がずっと重要な仕事がたくさんあることを今の子ども達はテレビなどで見た形だけを真似してやることが多いと思うけどそれはダメで、本質的な……えー、例えば、オリンピックの選手がテレビのダンスをみて『あーいいなあ』ってダンスだけ見てやっててもダメでダンスを踊るためにはまず食べ物、毎日の訓練そういうことを積み重ねてやっとながらオリンピックなどに繋がってるんで、結果だけ見て、それにつられてはだめで、そういうところは非常に大事だから将来にわたってそういうことはね常に考えていくことで、カッコだけ、表に出てくる結果だけ見ちゃダメ。

それからね、基礎が大切ということ。目に見えない努力が、結果的には表に出てくる結果につながるかもしれない、いやだからっていくら努力したってそれが報われるかどうかはわからない。報われないかもしれないけども報われないからって何もしなきゃ絶対に報われることはないんだから、報われないかもしれないけどもそれでも努力することは人間の価値を決めると私は思います。」

取材を終えて

私の祖父の魅力、この取材で祖父がちゃんと製品になるかどうか分からない薬を1000回、2000回も諦めずに実験をしていたこと、その努力があつたらからこそ今その薬でたくさんの人々を救っているということを知ることができた。そして、表の結果だけ見てもダメ。表に出てくる結果は裏の努力があつてからこそで、だからその裏の努力（基礎）を怠らないことが大切だということも分かった。そして今回の取材を通して祖父のような裏の努力ができる人になりたいと思った。



愛せる仕事につくということ

聞き手 川石結

ブドウ屋のおばさん

私が魅力を感じて取材候補に挙げた人は、地元のブドウ屋のおばさん、「下木ゆうこ」さんだ。

ブドウ屋のおばさんこと下木さんとは長いつきあいで、私が行くとたくさんサービスしてくれる。シールやぬいぐるみをくれた時もあり、毎年「おおきくなっただね」と自分の成長に喜んでくれるから、まるで親戚のような関係だ。毎年の夏から秋にかけて、早朝にブドウの世話や店に置くブドウの選別をしてくれていて、私たちが取れたてのおいしいブドウを安心して食べられるようにつくっている。私の住む地域の山はブドウ畑でいっぱい。この地域に住めて、このブドウ屋のおばさんに出会えて、大好物のブドウも新鮮なまま食べられて、最高だ。

また、個人として下木さんに魅力を感じるのは、いつもほかのおばさんやおじさんよりもおしゃべりで面白い話をしてくれることや、おもちゃをくれたりぶどうをサービスしてくれたりすることだ。私のうるさい弟もお世話になっているが、いやな顔一つせずにむしろ「明るくて元気になるわ」と言っていたかき見守ってくれている。小5の夏のある日、わたしが塾に向かっているときにたまたまブドウ屋さんが開いていて、下木さんが「気をつけていつてらっしゃい！」と声をかけてくれた。親は働いていて家には私しかいず、声をかけてくれたことで嬉しくなり、中学受験勉強を頑張ろうと思

えた。

わたしは、大学生や大人になったら農業のことを学びたいと思っている。だから、あとを継いで地域のために頑張りたい。

この取材では、お世話になっているブドウ屋の下木さんに日頃の感謝を伝えつつ、普段は聞けない生活の面やブドウを作る上で気を付けていることなどを聞きたいと思っている。

取材するまでの流れ

下木さんのブドウ屋さんは毎年7月下旬に始まる。夏休みのはじめごろにお母さんが「ブドウ屋さん開いてたで、いける日に朝早く行きや。じゃないと、お客さんいっぱい来たら仕事のじゃまになるから、できるだけはよ行き。」と教えてくれた。私は1人じゃ恥ずかしいので弟についで来てもらうことになった。不安だったが、気持ちがちよつと落ち着いた。

日時…2024年 7月24日 午前8時半～午前9時15分

場所…大阪府 K市 S農園の店頭

取材した方…S農園 下木ゆうこさん

自分との関係…自分が通うブドウ屋さんのお店の人

その日の朝、お母さんが私に「今日とか行ったら」と声をかけてくれた。私は聞くことを決めていず、不安を紛らわせるためにiPadでYoutubeをみていた。弟は最初いっしょに行くことを反対していた。塾があつて時間が重なるかもしれないからだ。でも、私が1人だと恥ずかしいと思っていることを伝えると、しょうがないな、といっしょに来てくれた。私が妹みたいだ。弟は途中で抜けるから、最後までできるかとまた不安になってきた。iPadを持ってwordの容量を確認して、下木さんに取材しようと思った動機を書いたレポートの原稿を持って。行き道では弟に一方的に話しかけるばかり。弟は呆れていた(申し訳ない)。

今日もあかるい下木さん

炎天下の店に着いて、いつものように挨拶すると、「結ちゃん、Wくん(弟)!!」と真っ先に話しかけてくれたのが今回の取材相手、下木ゆうこさんだった。優しい。

まずはお母さんに頼まれたブドウを買った。(もう一房サービスしてくれた!!! 私も弟も幼い頃からお世話になっているので、立派な常連客だからか?)そしてブドウ屋のおじちゃんに夏休みの旅行の予定について話した。

やがて取材の時はやってきた。弟の顔を何度も見た。勇気を出してはなしかけ、動機レポートの原稿と、学校の先生からの添え状を渡した。下木さんともう1人のおばちゃんがじっくり読んでくれた。下木さんは動機レポートから自分の名前をみつけると、『下木ゆうこさん』やって〜! 私や

「！！」と、嬉しそうに言っていた。「清教学園ってこんな宿題あるんか。」と、となりのおばちゃんも言った。自分の書いた文が読まれるのはとても恥ずかしかったが、弟が優しく見守ってくれたから固まって何も言えない、みたいなことは全くなかった。

取材の始まり

聞くことを決め忘れたが、何となく気になっていたことを言うことにした。下木さんは「答えることと書いてくる方がいいかな」と言ってくれたが、お客さんがいない、こんな絶好のチャンスはないと思いい、「何でも、しっかりした文じゃなくていいので、答えてくれたらいいので、あとで編集します。」とぎこちなく言うのと、下木さんは「わかった」と言ってくれた。気遣いができる人だなと感じた。そうして早速インタビューを始めた。ドキドキに包まれていた私の心は、取材を進めるにつれてだんだん落ち着いてきた。

下木さんの仕事

私「本日はお忙しい中ありがとうございます。川石結です、よろしくお願いします。早速ですが、なぜ下木さんはブドウ屋さんになったのですか」

下木さん「ブドウ屋さんはおばちゃんが子供の頃からしていたからです。ここが実家で、それで結婚して下木になってますけど、元々の姓はYと申します。うん。そして、あの、農業って結構人手が

いるので おばちゃんはお手伝いに来ています。ずっとブドウを作っています。だからお店が出ていない春もずっと畑の方で作業します。でもおばちゃんは元々お米屋さんなんでお米も作っています。私は農業が大好きです。」

お米も作っていることは初耳かもしれない。

私「へえ！！初めて知りました。そんな下木さんが大好きな農業で、大変なことはありませんか」

下木さん「ありますあります。やっぱりあの、疲れます。お外の仕事だからすごく疲れます。うんもう真つ黒けでこんだけ（腕を見せていただきました。ベテランの腕でした。つよそう）。でも農業が好きやからそれやってるんです。自分で食べるものは自分でつくったほうが愛着がつくでしょ。あと皆さんがお米すごく美味しいからあの人からまた買いたいわって言われたら嬉しいからね。お手伝いしてるんです。」

私「自分も将来に農業をしたいなと思っています。」

下木さん「自分で食べるものをね、自分で作ったら愛着もあるしね。ちっちゃなでもいいからね。例えばミニトマトとか、種1個埋めといたらね、ご飯の時も食べれるから。」

たしかに、私は、夢のまた夢のような自給自足する将来の自分を思い描いた事があった。全ての食べ物で自分で一から作ることはできないと思うが、少しでも食事に自分の作ったものが入ると嬉しく

なるだろうなと思った。

ブドウづくりについて聞いてみる。

私「ブドウを作ることにかけてることはありますか。」

下木さん「やっぱりね、あの、ぶどうが病気になるようにすることね。あのおじちゃんたち（下木さんのお兄さんたち）が守ってくれたり予防したりしてるからね、おじちゃんたちが雨の日も風の日も畑守ってくれてるから今も続いでるでしょ。あのすごい人たちなんですよ。1番上 2番目 3番目でお嫁さんたちもみんな協力してやってくれるからね。だからこうして運営してるんです。おばちゃんのおじいさんがこの店始めたんです。めっちゃもう50年以上もなる。ママ40代でしょ笑、うん、ね。だからねおばちゃんとは他の仕事よりも畑に行って草引いたりそういうのが好きなんです。おばちゃんとこの田んぼに今ジャンボタニシというのが湧いてきて、こんな大きなタニシです。知らないでしょ。見せてあげようか、（スマホから写真を見せていただきました）今、こいつがね。卵これね。お米の稲にね、うん、そこにね今頃ねこんなどん産んでるの卵。これいっぱいになるね。これ卵やね。これの産んでるやろここに、上がってきてるやろ、こんなねえ。今年もいつも泳いでんのよ。それを取るためにみんなで網ですくって出してるんよ。危ないものついていやでも出てくるからおばちゃんはどうごめんです。こんななつてね茶色いところ、うん、虫がね食べちゃった

のよ。虫がね、お米食べちゃったの。茶色いところ。あ、でもな、こんななんつても保険入ってるからいけるけどね(笑)。」

ブドウ屋さんが昔からあるのは知っていたけれど、そんなに長かったのは初めて聞いた。農業は人手がいる仕事だと知った。

ここで弟退出(ほんままじでついてきてくれてありがとう！)。

私「えっと、ブドウを売る時に気をつけることはありますか。」

下木さん「売る時に気をつけること。やっぱり美味しいブドウですぬってここで買ってもらえるようにすることで、お客さんが増えるようにずっと来てくださる方からもどんどん電話が入ってるし来てくれるわけね。今電話くれはった人も昔から遠いところから来てくださる人なんよ。結ちゃん、5月の1日からブドウ作り体験やって、それ毎年、あの神社のあの辺にね、あの上がってきもらって。うん、種はほんまはあるんやけど薬つけて、全部(種が)なくなるのはなくなるけどね時期があるからね、あんまりはやく出荷したらあかんのよ」

私「なんか水みたいな薬こんなしてつけるやつ？」

下木さん「そうそうようわかってるやん！ジベレリン(ブドウを種無しにする薬の名前)だね。いっぱいいたね抜き作業するのねで2週間開けて今度はそのブドウを大きくするのにまたね。昔はね、今

は負けてるけど、昔は日本一やったよ、K市のブドウ。あの駅前からも、もう全部こんなところもみんな全部ぶどう畑だったから。でも今はもう建物が建ったりして山の方にはまだいっぱいあるけど、お金みんなそっちの方が入るからね。」

自分の住む地域のブドウが日本一だったなんて！ちらつと聞いたことはあったが本気では信じていなかった。でも、いまはブドウ畑は少なく、平地はほとんどマンションや住宅、スーパー、学校などで埋め尽くされている。実際、私が住む家の場所もともとブドウ畑だったらしい。ブドウを売るより建物を建てたほうが市の売り上げは増えるから、ブドウ畑が減ってしまうのも受け入れざるを得ない。話を聞いて、農業の大変さがここにもあることを知ることができた。

下木さんの人間性

私が一番聞きたかったことがこちら。下木さんについて私が農業などの仕事の面以外で考えた魅力を探っていく。

私「私たちが来た時になぜシールとかをサービスしてくれるのですか。」

下木さん「結ちゃんたち（弟と私）がもう毎日、いつも話しかけてくれるし挨拶してくれるし、いいよねありがたいよねやつぱり。ありがとうございます（いやいやこちらこそ！）。ね、挨拶一番

大事やもんね。もうだって、家にピンポンピンポンってすんのどこからする？ うん、外の人が先に
いてる人がするんやけど、後から来た人がおはようございますこんには言わないよね、うん常識や
もんね。うんうん。先にいたのにそれを言わない人は人間的に、やっぱりマイナスやね。」

私がいっしょしている挨拶が、人を喜ばせていたのを実感した。

私「いつも、ありがとうございます。本日はお忙しい中急にすみませんがインタビューさせていた
だき本当にありがとうございます。」

下木さん「こちらこそありがとうございます。」

取材を終えて

取材が終わった。下木さんは「優しくて、農業を仕事にし、常に自然について考え、農業を心から
愛することのできる、私にとって一番身近なひと」である。私のおじいちゃんも畑をしていて下木さ
んに似ているが、農業を仕事にしているわけではない。また、常に自然について考えているわけでも
ない（おじいちゃんは他にも町作りの取り組みなど、ほかの仕事をしている）。やはり、私は下木さ
んと同じようなくらしをしたいと考えているから、魅力的に感じたのだと思う。また、取材の中で一
番驚いたのは、お母さんがやっているのを真似て私と弟がやってきた挨拶を、下木さんが嬉しく思っ

てシールやぬいぐるみをくれた理由だということで、やっぱり、小学校で厳しく教えられてきた「あいさつの大切さ」というものが今になってやっとわかった気がした。

もともと、私は人見知りであり普段関わっていない人にあいさつをしたりコミュニケーションをとったりするのが苦手で、人と会うときはいつも不安を抱えていたが、なぜかブドウ屋さんにいつて話すのは好きだった。今では不安にならずに人に挨拶をすることができが、そのきっかけとなったのは下木さんを含むブドウ屋さんのおかげなのかもしれない。いつまでも挨拶を笑顔で大きめの声で言うことを心がけようと思った。そして、下木さんの家庭がもと農家とはいえ、下木さんが仕事を大好きでいつまでも心を込めてできているのを改めて感じ、わたしも心から好きだといえて死ぬまで続けられるような仕事に就こうと思った。いまのところでは下木さんと同じ、農家につきたい！

最後に失敗！ すみませんでした（笑）。

そのまま取材が終わった達成感でさよならと言って帰路につき、歩いていた私は、最後に重要なことを忘れていたことに気づいた。ツーショットだ。走って店に戻り、「忘れてたんですけど、最後にいっしょに写真撮ってもいいですか。」と私が言った。お客さんが来始めていたため少し待ったが、下木さんは「ごめんごめん、マスクとった方がいい？ こっちは？（首に巻いていたタオル）」と聞き、私は「マスクは外してもらったら嬉しいですがタオルはいいですよ。」と返した。私が目を閉じてしまっていた写真もあり（申し訳ないです、すいません）、何枚か撮り直した。下木さんは撮影が

終わると、「結ちゃんありがとう、バイバイ」と言ってくれた。私も「ありがとうございました。」と手を振った。

少し歩いて、振り返ってみると、お店にはたくさんのお客さんがいた。下木さんもたくさんのお客さんに詰めたり、会計をしたりと、汗をかいて仕事をしていた。私は帰ってすぐにこの日繋いだ下木さんとのLINEにお礼のメッセージを打った。クーラーの電源をつけるのも忘れて。



先生と私の「魅力」

聞き手 山本翔

田所蒼志（38才）、S小学校の4年生の時の担任の先生だ。

最初は「なんでこんな先生が小学校の先生になれたのだろうか」と思っていたけれど、田所先生のすごいところは生徒の魅力的な所と改善しないといけない所をちゃんと理解し、生徒を魅力的な人に育てるところで、私も最初は何事もやるのが面倒くさくて毎日ダラダラとした生活を送っていたが、田所先生に1年間持つてもらおうと毎日が楽しみで、「明日はどんな事があるのかな？」とワクワクドキドキしながら眠るようになった。

そんな一年間の中で田所先生との一番印象深い出来事は、毎日練習をやっていた大縄跳びだ。最初田所先生が「小学生のころ大縄跳びをやっていてみんなもしてみいへんか」と言ったとき「何でこんなことしなあかんの?」「大縄するより家でゲームする方がよっぽど面白いわ」と思っていたけれど、やっていくにつれて「今日は上手くタイミングをつかめた」など毎日少しずつ成長していった。最終的にみんなの力を合わせて3分間で165回飛ぶことが出来た。この大縄跳びをするにあたってみんなで一緒に大きな目標を立ててその目標に向かって努力する楽しさを知ることが出来た。そして迎えた終業式、田所先生の転勤が決まった。みんながこのままS小学校にいて欲しいと思っている中で田所先生は「お前らは互いに助け合い何事にも全力で頑張る最高のクラスや!これから

も頑張れよ！」と言っていた。けれども、もし先生がこのクラスを持っていなかったらこんなにも最高のクラスには出来なかったと思う。だから田所先生にはとても感謝しているし、いつかもう一度会って話がしたいと思って、今回の取材したい人に選んだ。

考えた取材内容

- ・ 先生は生徒の魅力を引き出すときにどのようなことに気を使っているのか
- ・ 私は最初と最後でどのように変わったとかんじているのか
- ・ 大縄跳びをするとなぜ決めたのか、それをしてよかった事と悪かった事はどんな事か
- ・ 私の中の田所先生の魅力と田所先生の中の魅力はどの様に違うのか
- ・ もし自分（田所先生）がS小学校を持っていなかったらどうなっていたか
- ・ 先生は学校を転勤するとき何を思っていたのか
- ・ 先生は私と一年間授業をして自分はおおまかにどんな人だったのか
- ・ 先生が子供の時はどのような事に夢見てどのような人になりたいなと思っていたのか
- ・ 先生にとって「先生」とはどのような人でのような「先生」が魅力的なのか
- ・ 魅力を引き出すことのコツとはどんなことなのか

田所先生に取材するまで

田所先生と僕は卒業してからよくLINEでやり取りしていて、よく「昨日の阪神（阪神タイガース）の試合すごかったな!」というようによく野球の試合のことを話していて、日程はまだ決まっていないけれど甲子園球場で阪神の試合を見に行くことになっている。そんな仲のいい田所先生に今回の取材の件について話すと、

田所先生「別にええけど先生でええんか?」

私「もちろんです。むしろ先生が一番魅力的だと思っんですよ。」

田所先生「じゃあ7月23日やったらちようど出張先の北海道から戻ってくるし、その日の午前中に取材してそれからご飯でも食べに行こか」

私「分かりましたではその日はよろしくお願いします!」

久しぶりに会った僕の魅力的な人

田所先生は4年生のおわりに転勤をする事になってしまったので、今は地元の小学校とはまた別のN小学校で働いていると聞いたので、少し早めにインターホンを押すと田所先生が「おー! 翔か久しぶり! 外めっちゃ暑かったやろ? 先生も外に出たくないから教室でやろや」と言ったので、クーラーがきいた教室で取材を始めることにした。

大縄の「魅力」

僕は最初になぜ大縄をしたのかという質問から始めることにした。

私「ではなぜ先生は4の1で大縄をしようとおもったんですか？」

先生「もともと先生は学生の頃に大縄跳びをしてたんやけど、丁度4の1の時ってコロナやったやろ？」

私「そうですね。」

先生「接触するスポーツはダメやから、何やったら接触せずにみんなで一緒にスポーツができるんかって考えたときに大縄やったらできるんちゃうんかなとおもったから大縄跳びをしたんよね」

私「なるほど、それで実際に1年間やってみてどうでしたか？」

先生「まあ結果的に言うとかよかったかなと思うで。やっぱりみんなで一緒に何かのスポーツをしてみんなで一つの目標に向かっていくことはこれからの将来にもきつと活かせることができるやろうかな」

私「僕もやっていて初めはすごいめんどくさいなと思ってたけど、やっていくうちになんか心の中が熱く燃えるって感じで、みんなで一丸となってスポーツをするってこんなにも楽しいことなんだなとおもいました。」

田所先生「せやろ？俺もな学生の時にクラスメイトのみんなとやってたんやけど、やっぱり大縄

をしてたらみんなの仲が良くなるし、全体のクラスの空気感も良くなるねんなやっぱり。だからお前らの4の1も大縄跳びをやって、少しでも早くみんながクラスになじめるようにやってん。しかもクラスも良い空気感になったし、4の1での大縄跳びは先生にとっても宝物みたいなものやったかな」

田所先生が大縄跳びを4の1でやったきっかけが学生時代にやっていたことだったことも大縄跳びをするとこんなにもいいことがあったということも知らなかったので、今回取材できてよかったなと思った。

先生が小学校の先生になるまでの「魅力」的な道のり

私「ではなぜ田所先生が先生になろうとおもったのかを聞いてもいいですか？」

田所先生「そうやなく先生はなもとと野球選手になろうと思ってたんよ」

私「パンイチで野球してましたもんね 笑」

田所先生「そうそう 笑 でも高校生になったときかな、周りの友達が自分よりも上手いとかんじたんよな、その時に野球選手はあきらめたかな」

私「ではなぜ野球選手とは全然違う小学校の先生になろうとおもったんですか？」

田所先生「ちょうど野球選手をあきらめたときに、じゃあ何になろっかなって思ったときに先生はな、よくヤンキーと話してたんやけど、そいつらが勉強を教えてほしいって言ったんよ。先生もあんな

まりできへんけど平均点ぐらいは取れとったからヤンキーに教えることぐらいはできたんやけど、その時にだれかに教える楽しさに気付いたんよ、だから保育園の先生になろうと思ったんよな。」

私「そうだったんですね。」

先生「そうそう、でもさ保育園の先生ってやっぱり女性が多いってイメージやろ？」

私「確かにそうですね。」

先生「ほとんどが女性の中に1人だけ自分が混ざるのはちょっとおかしいかなと思ったから中学校の先生の教員免許と小学校の先生の教員免許の資格を取ったんよね。」

私「でもどうして中学の先生ではなく、小学校の先生になろうとおもったんですか？」

先生「その時にとった中学の先生の教員免許は社会の先生だけやったんやけど、社会の先生って倍率ที่สูงかったんよ」

私「そうだったんですね。」

先生「倍率が高いつてことはそのぶん社会の先生になるのは難しいつてことやねん。」

私「そうだったんですね。」

先生「だから小学校の先生になったんやけど、こうやってたくさんの子供と一緒に授業をやつて、休み時間に大縄をしたりした時間はかけがえないものやったから小学校の先生になってよかったなとおもつてるで。」

先生が僕の担任になるまでにこんなにも沢山のドラマがあったなんて思ってもいなかったのんびりしたし、こうして先生の人生の経緯を知ることができて、うれしく思った。

私「今でも大縄跳びは続けてるんですか？」

先生「実はな先生は今はクラスを持ってないねん。」

私「そうなんですか!？」

先生がクラスを持ってないなんてびっくりだったし、じゃあ今はこの学校で何をしているんですかと聞く前に先生が「実は今は、新しい先生に大雑把な仕事内容を説明するという職業についてるねん」と言ってくれた。

私「それって面白いんですか？」

先生「面白いから先生はやってるんやと思うで笑」

先生は面白い!!生きがいと思ってるらしい、僕もそんな大人に将来なりたいなおもった。

田所先生と私の「魅力」

私「田所先生から見て俺ってどんな風に見えていましたか？」

田所先生「そうやなくまずはやっぱり勉強ができるってことかな。それから翔を見ていくうちにこいつはおもしろいなって感じるようになったんやけど、それと同時に翔が芯が弱いってことに気づいたんよな」

私「そうだったんですね。」

先生「その時に同じクラスのK君がおったんよな。今はさK君となかよくしてる？」

私「昔からの親友やからちよくちよくLINEはとってますよ。」

先生「そうやろ？ それはたぶん先生が仲良くさせたんやと思うねんな」

私「どういことですか？」

先生「K君には悪いけどさ、あんまりよく勉強ができた感じではなかったやんか。」

私「たしかによくわからへん問題とかあると質問されたりしましたね。」

先生「Kは勉強ができへんねんけど芯が強いやつやったんよな、で翔は勉強ができるけど芯がよわい、そしてどっちも面白いていう共通点があるってことを踏まえてじゃあKと翔を足したらもつともろいクラスになるんちゃうんかなと思ったんよね。」

私「なるほどそんなことがあったんやな」

自分がなぜいまの環境にすぐになじめているのかがわかってやっぱり先生の「魅力」を引き出す力

はやっぱり凄いなと思った。

田所先生が「魅力」を引き出すコツ

私「最後にどうしたら色んな人の魅力を引き出せるのかコツがあったら教えてほしいです。」

先生「自分としては翔みたいな、将来この子がこのまま行ったら社会に出るときにちよつと苦勞するやろうなつて子にはやっぱりその子なりのアドバイスを言つてあげたり、その子なりの処置をしてあげたりする。それがやっぱり教師としての役目なんちゃうかなと俺はおもうで。」

私「わざわざありがとうございます。」

取材を終えて

先生「じゃあ約束通り昼飯行くか！」

私「行きましょう!!」

そして先生がおすすめだという中華屋さんに行くことにした。

先生はどでかいチャーハンを注文し、僕はひと回り小さいラーメンを注文する事にした。尊敬している先生と食べる醤油ラーメンはとても美味しかった。



80年間の秘話

聞き手 岩崎勇大

取材の動機

今回取材相手に選んだのは、私の祖母の岩崎美代子さんだ。二人いる祖母のうちの母方にあたる。この課題をすることになってから最初に取材相手を考えたときも、候補としてあげていた。しかし、現在、祖母は香川県に住んでいて、直接会って取材をするというのは困難だと思ったため、他の人で考えていた。そんな時、祖母が今年の8月16日でちょうど80歳になり、その記念として親戚の間でお盆休みに淡路島へと旅行に行こうという話になったので、そのついでに取材をしようと思った。

私の祖母は、孫たちにはとても優しい。祖母は家の敷地内に畑があり、そこで野菜を育てている。なので、よく、宅急便でうちに野菜などを届けてきてくれる。その野菜を、晩ご飯に出して食べている。その他にも、送ってもらった八朔のマーマレードを朝ごはんにパンに塗って食べたり、梅ジュースを炭酸水で割って飲んだりなど、気に入って使ってしまう。

また、祖母は昔、数学の教師をしていたので、今でも数学が得意で、教えてもらったこともある。家に泊めてもらった時には、朝に計算のドリルのようなものをしているところを見たことがある。祖母は80歳なのに、とても元気でおもしろい人だ。話しているのを見ると、孫たちからもとても愛さ

れているのが分かる。

取材依頼のLINEを送るまで

祖母とはLINEの友達登録はしてはいるが、普段から頻繁にやりとりすることはない。登録したのは、私が自分用のスマホを持つようになってからすぐのころで、最後に連絡をしたのは、何ヶ月も前のことだ。祖母も、最近になってからスマホを使い始め、メッセージは文字を打つのが難しいため、音声で文字を起こし、その後に添削して送っているのだという。取材依頼を兼ねた動機レポートの原稿や、総合学習の先生から渡された「添え状」の写真を撮り、その写真を送ってアポをとるときは、祖母なのに、なぜか少し緊張した。数分後、スマホを見ると、意外にも、もう既読がついていた。だが、返信は何もきていなかった。

取材概要

日時…2024年8月11日 17時30分

場所…香川県S市 祖母の家

取材した方…岩崎美代子さん

自分との関係…祖母と孫

合流するまで

目的地の淡路島へと家族（兄を除く）と車で移動し、到着すると、祖母だけではなく、いとこや叔父、叔母も集まっていた。これから淡路島の海でパラセーリングをする予定だった。パラセーリングの年齢制限は80歳以下だったらしく、祖母はその時79歳であったので、ギリギリおこなえるということで、予約していた。79歳なのにパラセーリングに挑戦しており、改めてとても元気だなあと思った。

その日の夕食で、80歳の誕生日のプレゼントとしてiPadをもらっていた。後日、iMovieでムービーのつくりかたを私の妹から教えてもらっていた。旅行から戻ってきたあとには、本人のつくったムービーがLINEで動画として送られてきていた。「記念になるかと思い、送ります。」どうやらプレゼントしてもらったiPadを気に入って、使いこなしているようだ。

取材場所に到着するまで

ホテルへと到着し、8月10日の夜に全員でひとつの部屋に集まった。私はそのときに初めて面と向かって、今回の取材の課題について説明した。一応送ったものすべてを読んで、内容は理解しているみたいだった。みんなの前で言ったので、少し恥ずかしかったが、「魅力的に思っている人」に取材するのだと率直に伝えた。向こうも照れてはいたが、取材は快く引き受けてくれ、明日にすることになった。次の日、祖母の家に私の家族だけ1泊するという予定になっていたので、いとこたちとは

別れ、淡路島から香川県まで移動した。

取材がはじまるまで

祖母の家に着いて、なんとなくテレビを見ていた。その間も、いつ取材をしようか、どんな風に取材をしようかなど、取材のことを気にして見ていた。夕方5時になり、そろそろ取材を始めようと思い、総合学習のファイルとiPad、スマホを持ち出した。キッチンにいた祖母にもうすぐで取材を始めると言い、しばらくしてから祖母を呼び出した。Wordで文字起こしをしようと思ったが、香川県だったのでWi-Fiが繋がらなく、取材の原稿がひらけなかったので、文字起こしの機能が使えなかった。仕方なく、iPadで録音をすることにした。普段とは違う、あらたまって会話するとなると、なんだか照れくさくなった。

数学の教師について

まずは、数学の教師をしていたことについて聞いてみた。

私「数学の教師は、どのくらいやっていたんですか。」

祖母「教師生活は一年だけ。」

知らなかった！数学の教師はずっとしていたのかと思っていた。

祖母「ほんで結婚して田舎の方へ行ったから、あとは家で塾をしてたわけ。で、人数は少なくて、子供が小さいときは一晩に1対2とか1対1でやったりしてて、ほんで子供がちょっと手を離れてから、1対4とか1対5で毎晩のように塾をしてた。ほんでそこでパソコンに興味を持って、それでプログラムをちよっとおもしろいゲームをくんで、1分間に何問掛け算とか足し算を解けるかっていうんでそのプログラムをつくって、で、子供にやらしてたこともあるの。ほんなら最初のころは20問ぐらいしかできない子が頑張ったら30問ぐらいいって、優秀な子は50問ぐらいいく、1分間に。そんなゲームして遊んでん。塾っていつてもね、今のような先生が教えて子供がそれを学んで試験で成績をあげるんじゃないかって、まあ、分からんところを教えて分かるようにして、んであと楽しく最後の10分とか15分とかにはゲームをして、鉛筆飛ばしをしたり、そういう風にして遊んだ。」

私「鉛筆飛ばしとはなんですか。」

祖母は机をたたいて言った。

祖母「鉛筆をここに置いてどこまで飛ばせるか。それでももちろん子供は勉強に来るんだけど、友達

と話したりそういうゲームをしたり遊んだりっていうのも結構してんよ。だからもうまあ結構来てたわな。それを何年やってたかな。まあ、40年近くやってたんじゃないか。」

私「何歳くらいまでですか。」

祖母「25歳から始めて：いつごろまでしてたんだろうか、まあ35年から40年近くしたと思うよ。だけど孫の世話とか親の介護とかでも休まざるを得なくなつてそれじゃあ生徒にも迷惑かけると思つてやめたの。だから60過ぎだと思ふけどね。」

私「数学の教師はいつからやってるんですか。」

祖母「ねえ、そんなに個人的なことばつか聞くの？ 数学の教師になりたかつたから大学にいったの。でも結果的に1年しか続けられなかつたから辞めたことは今でも後悔してるのよ本当のところは。だけどあの当時は女の人が働き続けるとなつたら、やっぱり親とか周りの人がいてくれるとかじやないと続けることは無理があつたの。ほんで諦めた。今では保育園の設備とか結構充実してきてるからほとんどの人がつとめられてるでしょ。だから何年前になる？ 60年ぐらい前？ 55年ぐらい前かな。だから今女性が活躍してるのをみてすごいなあつて、ほんとすごいなあつて思つてるよ。でも大変だろうなと思う。やっぱりね。」

母「あととはそうやつて育てられた子供たちがどうなるかなあという心配もあるけな。」

二人の取材のはずが、なぜか買い物から帰ってきたばかりの母も会話に入ってきた。

祖母「ここからっていうのは小さい頃から保育園に行かせてっていう意味？ まあだいぶ違うだろうね。だから私らの時は子供はある程度少なくとも3歳くらいまでは親がみてたわけ。だから保育園運動とかいって保育園をつくる運動とかもしたこともあるしだから3歳未満児でも保育してほしいっていう要望書をだして、んで、うちの子供が第一、一番最初のそれになった。」

家庭菜園をはじめたきっかけ

次に、祖母が今もなお続けている畑仕事について聞いてみることにした。

私「庭の畑はどうして始めたのですか。」

祖母「今畑してること？ 畑は最近初めてっていうかこっち帰ってきてきて畑が田んぼがあるからそれを草を生やすわけにはいかないうからすることにしたの。大変よ。ほんとに大変だったのがようわかった。14年かな、やり始めて。」

母「だからおじいちゃんが亡くなったのがこっちに来る…」

祖母「いつだっけな？ 2011年。調子が悪くなつてこっちから電話がかかってきて長々とケアマネジャーに話してやっぱこちきてくれって言って、でも1ヶ月間はいけない動けないっていつて、で、施設にお願いして電話で連絡取り合ってたからね。だけんおじいちゃんっていったらまあ父

親ってことになるんだけどね。亡くなってほんでその引き継いだ田を草ボーボーにするわけにはいかないから畑仕事を始めた。稲はつくれないから米はつくれないから畑に切り替えるにして家庭菜園をはじめたことにしたの。で、それを自分一人ではできないから妹（とその）夫婦といっしょに3人で作業するってことで3人でやることになった。」

母「ここって田んぼだったっけ？」

祖母「だけど米つくるのは大変なのよ。水がね、水の管理が。でも自分では水を堰き止めて水をこちにやるってのはできないから結果的に水道の水を使って家庭菜園して、どうしようもないときだけ水路から水を入れてる。」

聞きたかったこと

祖母は結婚後、鳥取県の山沿いの田舎の方へと移住し、私の母をうんだ。最後に、なぜそんな田舎へと移住したのか前からずっと気になっていたもので、聞いてみることにした。

私「どうして鳥取に移住したのですか。親戚がいたからとかですか。」

母「誰もおらん。」

私と祖母の会話のキャッチボールのつもりが、いつの間にか母と祖母の会話のキャッチボールにな

っていた。

祖母「誰もいないところに行ったから。あの、親類もない知り合いもないところ子供を人に預けて働くことはできなかったわけ。ほんで諦めた。」

私「じゃあどうして移住したのですか。」

祖母「それはお父さんが勤務先を選んだからだから。大阪から誰も知らないようなところの研究所に就職したから。」

時には、祖父がアメリカで勤務することになり、アリゾナ州に移住することになったこともあった。

私「鳥取にはいつまで住んでいたのですか。」

祖母「1970年？ほんで最初は3年くらいって言って行ったんだけどそれが30年以上？

（笑）」

取材を終えて

やっぱり祖母は80歳なのに80歳とは思えないくらい元気だ。さまざまな場でのチャレンジ精神こそが元気の源であり、若さの秘訣だと思う。私は最初祖母のただ魅力的に感じるところに関するこ

とだけを聞こうと思っていたが、実際に取材すると、身近にいた祖母からは聞いたこともない80年もの間秘密にしていた話を聞けてちよつと嬉しかったし、同時に自分自身も祖母のように元気に楽しく過ごそうと思えた。取材を終えて、おばあちゃんの良い意味でとてもおもしろい人だなと思った。

引き込まれる話し方

聞き手 横山さな

相手の印象は何で決まるだろうか。私はその多くを話し方が占めていると思う。

私が今回取材相手に選んだのは合唱部の先輩で同じアルト1（女性四部合唱のパートのこと）である倉本かな先輩だ。

私が初めてその先輩と話したときは部活の新入部員歓迎会の待ち時間だった。継続部員の先輩たちは新入部員の歓迎の準備をしていたが、かな先輩は中学二年生になって合唱部に入部した（以前はハンドベル部だったらしい）ので私たち中学一年生と一緒に教室で待っていた。その時にかな先輩と話したわけだが、初めて話したにもかかわらず「デイリーノートにうんちの落書きをしたら先生に怒られたから描かない方がいいよ」という事を話していて、とても衝撃的だった。普通、初めて会った先輩にこの話はしないだろうとも思った。もしかしたら部活についての話もしていたのかもしれないがこの話が印象的過ぎてそれ以外はあまり覚えていない。私は初め、先輩に【凄く不思議で変な人】というイメージを持ったということを感じている。

合唱部に入部してからしばらくたった頃、友達と一緒に電車に乗ることができず一人でしらかしの径を歩いているときがあった。するとかな先輩が「一人？もしよかったら一緒にいかない？」と話

しかけてくれた。その時内心、先輩と一緒に行くのは気まずいなど思ったし話を途切れさせないようにしないといけないなどと思った。部活の話とかをするのだろうなと思っていただけで実際話してみたら先輩が見た夢の話とか、全然部活に関係ない話をしてくれた。ほかの先輩だったらこんな話はないだろうし部活外と一緒に学校に行ったりはしないと思うからすぐうれしかった。そして、いつしか私は先輩に対して【明るくて話しやすい人】というイメージを持つようになった。

そんな、ほかの先輩よりも親近感がある、相手が引き込まれるような話し上手な先輩に感じたので今回取材しようと思った。

取材の日程が決まるまで

部活の休憩時間中に「取材をする日程はどうするか」という話になった。中3の倉本先輩は、卒業論文で大学の専門家との取材日程を調整をしなければならないので、休日は難しいが、部活終わりなどはいつでも空いているよと言ってくれた。私も先輩の都合がいい時にやりましょう、と言ってその日は終わった。

短縮授業の終わり頃、三者懇談期間中である26日に取材をしないかという話になった。三者懇談期間中は教室が使えないため合唱部は清教会館で活動を行っていた。そこなら取材をする部屋も確保できるし部活動自体は午後1時に終わるのでそのあと時間をとることができると思ったからである。二人共26日には懇談が入っていなかったなのでその日に取材を行うということはすぐに決定した。

取材概要

日時… 7月26日1時30分

場所… 清教会館

取材した方… 倉本かな先輩

自分との関係… 合唱部の先輩と後輩

インタビューが始まるまで

普段よく話す先輩であつてもやはり取材となるとまた違った空気になってくる。合唱部の同級生にはほかの先輩に取材する人も多く、この日は私の他、二人が先輩に取材をする日で、みんな緊張している様子だった。

質問したいことはある程度決めていたが、もし質問することがなくなってしまったり無言になってしまったらどうしようと心配になった。取材をする部屋は冷房が効いていて冷え切っており、私の心にひんやりとした風が吹き込んだ。その風はより一層私の気持ちを不安にさせた。私はとても緊張していたが先輩はいつもと同じ様子で取材前まで話しかけてくれた。

もしかしたら先輩も緊張していたのかもしれないが普段と変わらない素振りを見せていた。「じゃあ、そろそろ始めようか、あつ取材前の気持ちもレポートに書かなきゃダメだったよね。取材前の今の気持ち覚えた？ 覚えたね？」といい先輩は微笑んだ。

私はコンクールに出たかった

緊張の中、取材がスタートした。

私「じゃあ今日はよろしくお願いします。お忙しい中、お時間をいただきありがとうございます。」

先輩「いえいえ。去年は取材をする立場やったから取材される立場になったんだって感じ。」

私「レポートにも書いたんですけど私が魅力的だなと感じた理由の一つはやっぱり話し方で、初めて部活に入ったときは先輩たちと仲良くできるかなみたいな、心配もしていたんですけどそのときかな先輩が明るく話しかけてくれて嬉しかったなっていう記憶があるので取材させていただきたました。」

先輩「感動やな」

私「話し方とは話題が逸れるのですが、もともとハンドベル部に入っていたんですね。」

先輩「はい」

私「どうして二年生になってからハンドベル部をやめて合唱部に入ったのかなっていうのを聞かせていただきたいです。」

今まで先輩と話していた時にハンドベル部が話題に上がることは何度かあった。先輩はその話をし

ている時にハンドベル部の楽しかった思い出なども教えてくれた。なのにどうしてハンドベル部をやめて合唱部に入ったのかがとても気になった。

先輩「合唱部に入部した理由かな、うん、これは元々合唱部に仲いい子はいたんやけどそうだからではなくてコンクールに出てみたかったからです。ハンドベル部って部員がすぐ減っていて合唱部の部員が45人くらいおるのに比べてハンドベル部は15人くらいしかなくて、私はコンクールに出たくて一回出ようとしたんやけど人数が足りなくて出られなかったことがあって、でも合唱部だったら全国大会とかもいつているって聞いているから入りたいなって思いました。」

先輩は合唱部の同級生と仲が良く、「友達に合唱部に多いから」などの答えを予想したけれどそうではなくて少し驚いた。

私「どうして降誕劇とか定期演奏会などでハンドベルも活躍できるのに、先輩はコンクールに出たかったのですか。」

先輩「私の二個上くらいに私の尊敬するハンドベルの先輩いて、その先輩は自分が一年生の頃はコンクールにでられたのに自分が先輩になった時に部員を集められへんくて後輩がコンクールを体験できないということをととても悔しがっていて、それを知った時にコンクールってどんなものなんやろう

って思ったからです。ハンドベルも凄くいい部活だったけれど退部して合唱部に入部したのはやっぱりコンクールにでてみたかったからかな」

私「ありがとうございます。先輩は合唱部に入って色々なコンクールにでていると思うのですが、実際のコンクールはイメージしていたコンクールと同じような感じでしたか」

先輩「最初に出たNHKコンクールはめっちゃ緊張して、ハンドベル部の定期演奏会の時も緊張していたからコンクールでも緊張するのだろうなとは最初から分かっていたけれど、その時とはまた違う緊張やったね。歌って自分の口から言葉を発するから失敗したらどうしようっていう不安は大きかったと思う。コンクールは想像していたものと一緒ではあったけどそれよりもコンクールまでの練習が大変やったかな。多分去年の中1と同じような気持ちやったと思う。出演メンバーを決めるためにオーディションがあった時とかは緊張したけれど、そのために頑張ろうと思えたし、受かったらそれが自信に繋がったと思う。それも含めてみんなで金賞を取ろうと一つの目標に向かって頑張れるのは今しかないと思うからコンクールに出られて嬉しいなって思ったし、良かったなって思ったな。」

先輩は途中から合唱部に入部したのにも関わらず、それを周りに感じさせなかったのは、憧れであったコンクールの為に真剣に練習に取り組んでいたからだだったのだなと思った。熱意ある話し方からコンクールに対する思いが伝わってきた。

関係性の角度

私「先輩はどんな人にもフレンドリーに接することができるところがすごいなと思っていて、普段、人に話しかけるときに意識していることなどはありますか。」

先輩「んー、自分からめっちゃ話しかけに行こうとかはしていないけど一つの出来事を見つけてそこから発展させて話題を作っていくことが大事なことなのかなって思ってる。例えば靴下が破れている子がいたとするやん。そしたら『破れている』っていう出来事から新たな話題を考えていく、みたいな感じかな。自分から今日はこの人に話しかけようとするよりはきっかけを見つけて積極的に新入部員の人に話しかけて話を広げようと思ってるかな。」

私「ありがとうございます。私は自分から話を広げたりするのが苦手だし、色々な会話のキッカケを掴む観察力があまりないのですごいなと思いました。」

先輩「私はコンクールが終わったあとに感想を書いたものを去年の中一の分も読んで『あ、この子こんなこと考えているんだ』とか『こんなこと悩んでいるんだ』とか考えて積極的に話かけていたかな。今もそうだけど。」

私「私が書いた感想を読んでくれたことに驚いた。確かにコンクールが終わった後、いつも先輩はそのことについて話しかけてくれていた。」

私「先輩は後輩のことを大事に思ってみてくださっているって感じですか。」

先輩「後輩を見てあげているって感じはあんまないかな。悩みがあったりしたら聞いてもらったりもするし合唱部内で意見が割れたりした時は相談したりするから気にかけてあげているとかではなく、純粹に後輩と仲良くできたらいいなって思ってる。だから後輩に好かれるように行動することは心がけているかな。助けてもらうことも多いからね。」

確かに私も一年生に色々と教えてもらったり、助けてもらっている。

私「そうなんです。私は先輩に色々と助けられているので後輩のことは守らないとって思っているけれど、中一に守られることもあるし、お互い助け合える関係でいることが大切なのです。」

後輩とのことについてお話ししていただいたんですけど先輩にも当然先輩とか目上の人がいるわけじゃないですか。その時に意識していることはありますか。」

先輩「先輩でも後輩でも意識してすることは変わらないかな。そういうのを区別せずに話を広げることが大切だと思う。だから積極的に話かけているかな。」

先輩が部活のみんなと親しいのは、先輩後輩を区別せずに話をするからなのだなと思った。だからみんなに好かれるし、相手からもちとかな先輩のことを知りたいなと興味を持ってもらえるのだと

思った。

私「ありがとうございます。私にも後輩が出来て、これからも色々な人と関わったりすると思うんですけど、やっぱり先輩が言ってくれたようなことを意識するといいて感じですかね。」

先輩「まあ、今話したのは私の話だし、関わり方とかは人それぞれでいいと思う。私が今みんなに接している接し方もいいと思うけど、Y先輩とかO先輩とか（合唱部の中学三年生の先輩）は後輩とまた違う接し方をしてるかもしれないし、そのあたりは自分で選んでいったらいいと思う。別に『上下関係』じゃなくて『横横関係』みたいなのもいいと思う。斜めとかでもいいと思うし、この関係性の角度は自分で選んでいくべきだと思う。こういうのって難しいよね。」

「関係性の角度は自分で選んでいくべき」という言葉はとても素敵だなと思った。

私「そうですね。なんか先輩になったから後輩に尊敬されなきゃダメだみたいなことを思ってたんですけど実際、そんなことはないんだなって思いました。関係性は自分で決められるんですね。」

先輩「うん。なんなら、私は同級生のみんなより1年遅く入っているから、Y先輩とかO先輩とか同級生でもめっちゃ歌が上手くて尊敬することも多いし、後輩の方が歌が上手だったりもするけれど、歌以外のところで、例えば人間性とかで凄くなって思われる人になりたいなと思って頑張ってい

るかな。」

先輩は爽やかな笑顔で自信満々に答えていた。言葉以外に、表情や真っ直ぐな瞳から先輩の思いがこちらに伝わってきた。

私「ありがとうございます。普段先輩とは話をしていますがこうやって改めて話を伺う機会をいただいて、色々なことを学ぶことができました。今回の話を参考にしてこれからの人との接し方を考えていけたらと思いました。今日は色々なお話を聞かせてくださりありがとうございました！」

取材を終えて

取材前はとても緊張していたけれど、取材が始まるともつと先輩について知りたいと思い夢中で質問をしていた。先輩は忙しい中、時間を割いて私の取材を受けてくれるにも関わらず、終始笑顔で私の質問に答えてくれた。やはり真剣に相手の話を聞いて、そこからさらに新たな質問をして相手のことを積極的に知ろうとする姿勢が人を引き込むような話し方につながってくるのだと今回取材をして改めて感じた。普段の部活では聞かないような話も聞くことができ、また新しく先輩の魅力を見つけることもできたので良い時間を過ごせたと思った。

取材後、「写真を撮ってもいいですか？」と聞くと、「撮ろ撮ろ！」と明るく返してくれた。私は近

くにいた同級生に写真を撮ってもらうことにした。カメラを向けられたとき、先輩は歯を見せてとても嬉しそうに笑っていた。私も先輩の真似をして笑ってみた。

先輩とは定期演奏会などの合唱部のイベントがあるごとに写真を撮っていたのでツーショットを撮るのは今回が初めてではなかった。スマホのアルバムに今回撮った写真を保存するときに昔の先輩とのツーショットを見返しながらこれからも先輩との写真を増やしたいなと思った。



好きなことを夢へ

聞き手 清原志歩

私が魅力を感じる人は、小嶋優芽先生だ。小嶋先生とは、私のピアノの先生である。30代くらいの女性の先生だ。小嶋先生は、教え方がとても上手で分かりやすい。それに私が好きな曲の楽譜を見せると、すぐに音符を読んで、とても素晴らしく、流れるようにきれいな音色を教室に響かせてくれる。それに、ただ単純に上手なだけではなく、紙に印刷された音符一つ一つに感情を入れて気持ちよさそうに、あたかも生きているかのようなあたたかいピアノを弾くのだ。そんな、素晴らしいきれいなピアノを弾くことができ、自分が持っている技術を生徒に教えてくれる小嶋先生を、私は心から尊敬している。

さらに、私達はピアノのレッスンが始まる前に色々なことを話す。色々なこととは、私の学校でのことや、小嶋先生のこと、次に弾きたい曲のこと、世間話などである。私は、小嶋先生と話しているとても楽しいと思える。それは、楽しい話をしているからではなく、小嶋先生は私が言ったことをしっかりと聞いてくれて先生からもいっぱい話してくれるからだ。

だから、私はそんな小嶋先生に取材をすることにした。

（取材の日まで）

私は、あらかじめ、ピアノのレッスンの時に「夏休みの宿題で『魅力的な人に取材しよう』っていうのがあるんですけど、取材してもいいですか？」と聞いていた。すると、「え、先生でいいの？私でよければどうぞー！」と言ってくれた。

数日後、私たちはラインでそのことに関して予定を確認した。

私「こないだ言った取材をするっていう話なんですけど、次の日曜日っていけますか？もし空いていなければ別の日でもOKです！」

小嶋先生「ごめんなさい、日曜日はあいてないです。土曜日やったらいけるけどどうかな？」

私「土曜日は部活があるので午後なら大丈夫です。」

小嶋先生「じゃあ先生もレッスンあるから、5時30分からでもいい？」

私「はい！5時半から行きます！」

日付…8月24日

集合場所…ピアノ教室

取材場所…マクドナルドS店 入って右にある一番端っこの席

聞きたいこと（主に）..

・どうしてピアノの先生になったのか

- ・いつからピアノを弾いていたのか
- ・コンクールなどには結構出ているのか
- ・その他それらの質問の答えに関連する質問をする

当日取材に至るまで

私たちはマクドナルド堺一条店に入った。

小嶋先生「思ったより空いてるなー、どこ座る？」

私「え、どこでもいいですけど…なんか取材してるのほかに見られるの恥ずかしいんで、端っこ座りましょ。」

小嶋先生「いいよー。じゃああそこでいい？（右端の席を指さしながら）」
私「はい、あそこいきましょ。」

ということで取材場所はマクドナルドS店の、入って右側の一番端っこの席となった。そこは、四人テーブルで、壁側がソファーに、ドア側は普通の椅子になっていた。小嶋先生はいすに、私はソファに座った。私たちはマックシェイクとポテトのMサイズを頼んだ。

取材内容

私「えーじゃあ、まず、なんでピアノの先生やろうと思ったんですか？」

小嶋先生「うーん、初めからピアノの先生やろうと思ってたんじゃなくて、初めは、えっと、デモンストレーターさんになろうと思ってて、デモンストレーターさんから始めてん。」

私「え、デモンストレーターってなんですか？」

小嶋先生「デモンストレーターって言ったら、えっとー、例えば…楽器店の前でみんなに聞いてもらったりとか、えっと、要はエレクトーン、えっとエレクトーンやってたから、エレクトーンを弾いてお客さんを集めるみたいな、演奏してみんなに聞いてもらうみたいなお仕事があんねんけど、そう、その仕事をまず初めにやっててん。」

私「へえー」

小嶋先生「で、その仕事をやりながら、ちょっとずつ、こう、ピアノとかエレクトーンを教えるってことも始めたって感じやな。だから、初めは、その、デモンストレーターさんから始めたって感じやな、お仕事を。だから、いろんなそのー、なんていうか、デパートとかショッピングモールとかのところで弾いたりしててん。」

私「へえー、そうだったんですね」

小嶋先生「で、言ったらもともと子供と接するのが好きっていうのもあったし、ピアノとかエレクトーン楽しいんやでっていうのを教えていこうと思ったからやり始めたって感じかな。」

私は、小嶋先生がエレクトーンも教えているということを全く知らなかったので正直驚いた。

私「えー、エレクトーンも教えてるんですか？」

小嶋先生「先生はどっちか言ったらエレクトーンが、えっと言ったら、メインで勉強してた感じ、初めは。で、そこからピアノも、こう、ちよつとずつ追加で勉強したって感じかな。だから、スタートはエレクトーン。あとから、ピアノもどんどん勉強し始めたって感じかな。」

私「なんか、エレクトーンを一筋で通そうと思わなかったんですか？」

小嶋先生「あー、そやね、まあ、エレクトーン一筋で初めは言ってたんやけど、エレクトーンだけじゃ、生徒さんも少なかつたりしたからピアノもどんどん教えていこうと思った感じやな。」

私「え、じゃあ、エレクトーン教室やるまでピアノはやってなかったんですか？」

小嶋先生「いや、ううん、ピアノもちろん後から勉強し始めたって感じやから、そう、少し後で勉強し始めたって感じやな。だから言ったら両方ともちゃんと勉強してたから、両方ともちゃんと教えられるように資格を取ったりとか、テストを受けたりとかはしたかな。だから一応両方ともエレクトーンもピアノも、だけど、音楽をやるきつかけっていうのはエレクトーンやったよ。」

私「テストってどんな感じですか？」

小嶋先生「テストは、えーっと、基本的にはヤマハのテスト、グレードテストっていうのがあるの

で、そのヤマハのグレードテストを受けて、受けたらその、講師資格とかいうものを、その、この辺のグレード持ったら教えられるよみたいな級の級があるから、級も取ったって感じかな。まあ、内容はいろんな音楽の知識を、ちゃんとその、勉強する感じやな。で、それがテストに出てくる。えー、その聞く方もそうやし、筆記の方もあるし。」

私「筆記のテストってどんななんですか？」

小嶋先生「筆記のテストは、和声法っていうその、音の、まあ言うたら、ソプラノ、アルト、テナー、バスとかっていうそのバランスっていうのんとか、あとは、コード進行法って言って、コードの決まった動きちゃんと決まりがあつたりとかするから、そういうのを勉強かな。次はどのコードにいくとか、このコードが前にあつたら絶対次このコードじゃないとダメーとかっていう決まりがあるから、それを要は勉強して、この言ったらコードには、どのコードがあうとかを手で書いていくって感じやな、コードを。で、あとは、聞き取った音楽を全部聴音って言って書いていくテスト、聞いた音楽をメモ全部、メモばあーって取って、何分以内にその楽譜を仕上げるみたいな。」

私「すごい！ え、じゃあ、なんか、ちっちゃい頃にピアノとかエレクトーンとか始めたきつかけ、えー、何歳からはじめたんですか？」

小嶋先生「えーつとね、エレクトーンは三歳かな、で、きつかけは、いつも行ってるデパートの楽器屋さんの前で、デモンストラーターさんが演奏してるのを聞いて、すごいと思って、そこからやるように、やりたいってお母さんに言って。ほんで、ヤマハの音楽教室に通い始めてん。ヤマハって

言うのは、ピアノとエレクトーン両方ともいけるように一番初めはエレクトーンをさわらせんねん。エレクトーンの方が、鍵盤も柔らかいし、色んな音が鳴るから、ちっちゃい子は楽しいねやんか、そっちの方が。色んな音楽に合わせてドレミ弾いたりとかするからさ、で、鍵盤も柔らかいからさ、まだ力も弱いからさ、そうそう。だから、ピアノ教室に通ったって言うよりはヤマハの音楽教室に通って、まずは音楽を楽しむみたいなそう言うレッスンから始めた感じやな。」

私「でも、なんかエレクトーンの方が難しいって聞いたことあるんですけど…」

小嶋先生「いや、どうやろー、どっちも難しいよ。なんか、どっちも良さがあるし、どっちも難しさがあるし、だから、おんなじ鍵盤楽器やけれど、別の楽器で感じやな。」

私「ちなみに、良さと悪さってどういう？」

小嶋先生「そうやな、エレクトーンの良さは、1人でオーケストラにしてみたりとか、ドラムとかギターとかベースとかをバックで流しながら、バンドみたいな感じで自分1人で演奏できるところかな。で、ピアノの良さは、やっぱりその、クラシックの楽器やからその、生音その、繊細な音が出る楽器やからこういうふうに弾くかで音が変わってくるからね、そういう奥深いところはいいかもしれん。ただ、ピアノは、そういうえっと、一台の楽器で一音しかならんし、おんなじ音色で表現しなあかんから、まあそういう意味で難しいっていうのと、ちっちゃい子達が楽しんでくれるのはエレクトーンの方かもしれない。やっぱり、色んな音、トランペットとかピアノとかキラキラの音なったりとかするから、うん。」

私「エレクトーンってあんまりどういのかわからないですよ、私」

小嶋先生「えっとね、右左鍵盤が二つあって、足鍵盤がある感じやから、右手、左手、足を使って演奏するみたいな感じ。」

私「パイプオルガンみたいな感じですか？」

小嶋先生「あつ、まあそやなー、パイプオルガンみたいな感じ！パイプオルガンの形には似てるかなー。足も使うから。」

私「足って難しくないんですか？」

小嶋先生「足ねー、まあ難しいっちゃ難しいけどまあ慣れかな、感覚で引く感じやね。」

私「え、なんか、ピアノとエレクトーンって結構違うのにどっちもやろうって思ったんですか？」

小嶋先生「うん、そやね。どっちも学校の課題の中にあったしね。ピアノもエレクトーンもいい楽器やからな、両方やってて良かったなとは思ってるよ。あと、音楽は好きやしね。色んな楽器やりたいて思ってるよ、やってきたし。」

私「えっ、なんの楽器やったんですか？」

小嶋先生「色々やったよ、トランペットとかチューバ、ギター、ハーモニカとか？でも、唯一挫折したのはギターやったなー。」

私「え、なんで挫折したんですか？」

小嶋先生「いやー、先生結構指短いから、ギターできひんかった。」

私「でも、ピアノでも指短いと不利ですよ。『星影のエール』オクターブばっかで指短いからひけないんですよ。」

小嶋先生「うーん、でも、ピアノも一オクターブ弾くのは苦手。」

私「え、じゃあ、一オクターブ弾く曲の時どうやって弾いてるんですか？」

小嶋先生「えー、誤魔化して弾いたり、一オクターブの曲を飛ばしたりしてた。」

私「いや、『星影のエール』誤魔化せないじゃないですか 笑」

小嶋先生「まあでもオクターブにせなくても弾こうと思ったら弾けるからな。」

小嶋先生がオクターブ苦手ということにびっくりした。ピアノをとてもきれいに弾いている小嶋先生でも苦手なところはあるのかと思った。

小嶋先生「他なんかありますか？」

私「コンクールとかって出たことありますか？」

小嶋先生「コンクール？ ありますよ。ピアノは一回だけかな、あとはエレクトーンやな。でも、基本的にあんまりコンクールは好きじゃない。あんまりその、人の音楽に評価をつけるって言うのはあんまり好きじゃないから、だから、あんまりコンクールにこだわってないかな。」

私「あー、なるほどー。」

私もあまり自分の弾くピアノに評価をしてほしくはなく、ただ楽しんで弾きたいのでも共感した。

私「ポテトおいしい」

小嶋先生「カリカリが好き？ ふにやふにやが好き？」

私「えーっと、カリカリ派」

小嶋先生「先生もやっぱカリカリ派やな」

私「なんか友達が弁論大会っていう夏休みの宿題があつて、その、なんか、あるテーマについて原稿用紙に弁論を書くみたいな宿題があるんですけど、結果的に違うのにしたんですけど、ポテトはカリカリ派か、しなしな派かっていう弁論を書こうとしている友達がいましたよ。」

小嶋先生「おー、ええやんええやん、なんでやめたん？」

私「えー、なんかわかんないです。」

小嶋先生「でもありきたりのほうがおもしろかつたんちゃん？ もったいない、やめたんやー」

そして、しばらく二人ともポテトを食べた。とてもおいしかったし、先生とあまり食べることがないので話しながら食べると楽しかった。

私「先生子供好きなんですか？」

小嶋先生「うん、好きー、好きやなー、かわいい、親戚のおばちゃんぐらいに思ってるから」

私「え、へえー。ちっちゃいころから子供好きだったんですか？」

小嶋先生「えー、うん、どやろー？」

私「人と話すの好きですか？」

小嶋先生「うん、そうやな、嫌いではないかもね。うん、そやなー、子供が好きっていうかー、うん、まあ、そやな、かわいいとは思ってるから好きなんやろな。ちっちゃい子とか見たら昔から可愛いなとは思ってたよ。なんか先生は小学校一年生の文集っていうか、将来の夢は何ですか？ っていうところにエレクトーンの先生になりたいですって書いてるからその時点で。だから、もうそこから、夢は変わらず、そういうエレクトーンとかピアノの先生になりたいーって思ってたから。幼稚園の頃はお花屋さんになりたーいって思ってたけど。」

私「私ころっころ変わってますよ。」

小嶋先生「そうなんや」

私「幼稚園の頃は幼稚園の先生になりたいくて、」

小嶋先生「あー、言ってた、そうやん、先生になりたいって言ってた」

私「そうですよー。ほんで、小学校一・二年の時はなんか、なんやったけ、なんかわかんないですけど、いろいろなところ変わってて、四年生くらいから今までアナウンサーになりたいなって思って

ます。

小嶋先生「あれやんな、先生が『おはよう朝日』のエレクトーン弾いて、志歩ちゃんがおはよう朝日でアナウンサーしたらいいんじゃない？ コラボレーションできるやん。」

私「たしかにー。なんか、ちっちゃいころからエレクトーンの先生になるって決めて、なんかそのために計画とかずっと立ててたんですか？」

小嶋先生「計画？ 計画はなかったけど、なりたいたって思いはずっとあったよ。」

私「あー、私もそんな感じです。アナウンサーになりたいと思ってるんですけどなかなかそのためにどうしたらいいのかわからなくて何もしてないです。」

小嶋先生「あー、でもやっぱりずっとなんかになりたいなっていうことが大事やと思うけどなー」

私「あー、確かにー。」

小嶋先生「他なんかありますか？」

私「えー、何聞こう…もうだいたい喋ったしなー」

小嶋先生「終わりにする？」

私「あー、うーん、どうしよ、はい、終わりにします。ありがとうございました！」

取材を終えて

ピアノの先生がエレクトーンも教えていて、どっちかというとそっちメインだということを知らなかったのも、ピアノの話をしようと思っていたのにエレクトーンの話ばかりになってしまった。でも、そういう、思いもしなかったことが知れてさらにそこに質問を入れることができて新しい発見ができるということについては面白かったと思った。そして、私も小嶋先生みたいに、何をしたらいいのかわからなくても夢をかなえたいという思いが大切なんだと思った。



ギャップ萌えの母

聞き手 野原一瑛

取材動機

今回、私が魅力的に感じた人は、私の母である。私は絶賛反抗期中の今、母のことが鬱陶しいと思っている。でもそんな母に魅力的に感じたのは、私が生まれる前から飼っていた犬が14歳になって、腎臓の病気になって母が看病しているとき、一番母にべったりだった犬が弱くなっていくのを一番近くで見ている、つらかったと思うけど、そんな時でも家事や仕事を休むことなく両立できて、精神力が強いところだ。

他にも、我慢強いところがある。母はほとんど毎日、私か父と喧嘩をしている。でも、頻度でいえば父のほうがよく喧嘩していると思う。私は夫婦喧嘩を見て、いつも母のほうが正しいのに母に負けないのか父は意地を張っているようにみえる。私は一部始終見ていた時、父がどっかに行くと「むかつくな」と母に言うと言は「やろ、ママがむかつく気持ちわかるやろ」と言った。でも母は絶対八つ当たりしなくて我慢強いなと思った。

でも、そんな母はユーモアがあって、明るいところにも魅力的に感じた。例えば、最近でいうと母が急に「レンジちゃん頑張れ!!」と応援しているときがある。その時、私は「急にどうしたん?」なんで電子レンジに応援してるん?」と聞くと、「電子レンジの調子が悪い時、電子レンジに応援した

ら、頑張ってくれるねん！」と言っていた。私はそれを聞いて、「なんで電子レンジに応援したら頑張ってくれると思ったんやろ」と思いながら笑った。私は、なんでそんなに我慢できるのか、ストレスが溜まってると思うけど、どうやって発散できてるのか、どのぐらい発散できてるのかなどを聞くと思った。

取材概要

日時… 8月16日 21時30分～22時

場所… 家のリビング

取材した方… 野原みやびさん

自分との関係… 母親

一番つらかったこと

私「えっと、今までで一番つらかったことは何ですか。」

母「えー、子供が小さいとき。の育児。」

私「どういう風につらかったんですか。」

母「仕事もして、赤ちゃんのお世話もして、犬のお世話もして、家のこともして、天手古舞でした。」

私「てんてこまいてなんですか。」

母「もう、忙しすぎてあつという間、一日が。」

私「つらかったことがそれ？」

母「うゝん」

私「今までで一番つらかったこと。」

母「つらかった？ 難しいな」

私「なんで難しいん？ 笑」

母「うゝん、手術。病気の手術。入院のときに歩いて行ったのもつらかった。」

私「あれ何キロぐらいあったん？」

母「分からん。こつからO病院まで、見てごらん。」

私「え、めんどくさい。」

母「あと、K君（私の兄）を産むときも一人であるいていったなあー」

私「送ってくれへんかったん？」

母「うん！」

私「タクシーで行かんかったん？」

母「いや、タクシーで行くような距離じゃないよ、めっちゃ近いから。近いけどね、おながが大きいおなかがある、産まれそおつというときに歩いていったから。」

私「何分くらいでつくん？」

母「普通やったら、歩いて5分ぐらいやろうけどね。」

私「そんな時何分かったん？」

母「どうやら、覚えてない。」

私「それが一番つらかったん？」

母「うゝん、一番つらいなあー、わからない。」

衝撃的やったこと

私「え、じゃあ衝撃的やったことは？」

母「衝撃的やったこととお？ 衝撃的なこと、一瑛ちゃんが野球部入ったことかな。」

私「なんでなん笑、もっとあるやん」

母「ええー」

私「ないん？ なんか」

母「うゝん。甥っ子が陸上自衛隊の高校に行ったことも衝撃的やったし、それは何に對して？」

私「え、どういふこと？ 何に對してって」

母「何に對して衝撃を受けた… 何でもいいの？」

私「うん、もう人生で1番衝撃的」

母「人生…うえええーそんな決めれんけどまあ一瑛ちゃんが野球部入ったこと。」

私「でも、R（私のいところ）の高校もそうやろ？」

母「うん。」

母のストレス発散方法

私「じゃあ、次はママはとと（父）とけんかするやん、ストレス溜まってるやん、それをどうやって発散してるん？」

母「ガールズトーク。ガールズトークとは言わんな笑 えーと友達とランチした時にお話をする。」

私「たとえば？」

母「愚痴愚痴。愚痴大会とかあとは運動運動。」

私「どうということ？」

母「運動運動すること。」

私「どうということ？ ジム行くってこと？」

母「そうそうそう。スポーツジム行ったり、ヨガに行ったり、あとショッピング。」

私「最近行っていないの？」

母「うん。最近ちょっと行けてないけど更年期が辛いからね。でもまあそれがストレス発散やな。」

ウィンドーショッピング」

私「何それ」

母「見てるだけえーってやつ。でもママ、一瑛ちゃん見てるだけーでも、早く帰ろ早く帰ろ早く帰ろって」

私「だってさ、ママさ、そう言ってさ見てるだけってつてもさ、買いそうになってるやん。」

母「買えへんよ。必要じゃなければ買わないよ。」

私「でもママさ、前いっぱいカバンあるのにカバン買ってるやん。」

母「そお？」

私「うん」

母「それがストレス発散ですね。あ、あと犬も癒されるね。」

私「うん。え、でもさあ…あれっ? …えなんやったっけ」

母「知らんよ」

私「ママはガールズトークでどれくらい発散できてるん？」

母「えーどれぐらい？」

私「うん」

母「そりゃときどきにもよるけど、」

私「でもさママそのガールズトークでストレス溜まる時とかないん？」

母「そういう人とは喋らない。ちゃんと選んでるから」

私「え、N（ママ友）とかはいけんの？」

母「Nとかは違うな。Uちゃん（ママ友）とかWちゃん（ママ友）が1番ストレス聞いてくれる、話を聞いてくれる人と会う。」

私「うん。」

母「ちゃんと聞いてないかも知れへんけど、共感してくれる人と会う。」

私「ふーん。」

母「その共感してくれる人はちゃんと選びますう。」

私「ふーん」

母「やから、友達を選ぶ。Nとかはなんかしょもない話してバカなこと言ってアハハハハハッって笑ってるのが面白い時やな。ちゃんと相手を選んでますよ。遊ぶ相手を。」

私「うん。ママは大学行っていないけど、そのこと後悔してるん？」

母「後悔してるけど、親がそんなじゃなかったから」

私「何？ そんなじゃないって、」

母「え？ 学校行きなさい大学行きなさいとかじゃなくってすぐ何でもやめなさいって言ってたから。」

私「から、行っていないん？」

母「から、行っていないし元々そんなさらさら行きなさいともなかったな。」

私「自分で行きたいと思わなかったん？」

母「知らなかったもん。そんなん」

私「大学っていう存在自体を？」

母「存在は知ってるけど、そんなところに行くっていう人は周りにもいなかったし行けるっていうのもわかんなかったし」

私「ふーん」

私が不思議に思ったこと

私「ママさ、電子レンジさ調子悪い時さ応援してるやん。あれ何なん？」

母「何にでも命があるから。」

私「えでもさ機械やん。人間がいちからつくってるやん。」

母「そ、それでもね、命は吹き込まれるんです。それが八百万の神様っていつて。だから、物でも何でも大切にするの日本人は。日本人は昔からそうやって何にでも神が宿ると思ってるから。だから、物を大切にしなくちゃいけないんだよお」

私「ママも大切にしなくちゃいけない？ あ、物？」

母「物、物。」

私「ママに聞こえた。ママさ、とととけんかしててさ、どういふふうに思ってるん？」

母「むかつく」

私「それだけ？」

母「でもね、男の人ってそんなもんならだって。この本に書いてたよ。だから一瑛ちゃんも読んでください。」

私「『夫のトリセツ』やったっけ？」

母「そう。」

私「うーん。えそれでさ、ととの扱い方がさ分かりそう？」

母「分かったけど、でも感情的になっちゃうよねえ。ママの場合」

私「なんで？更年期やから？」

母「更年期やから笑」

取材を終えて

母の魅力は「ギャップ萌え」だと思う。取材する前は面白いだけかと思ってたが、取材後はいろんな苦勞を知れて、母のことをたくさん知れてよかった。



会話の駄菓子屋

聞き手 杉山貴俊

取材の動機

小学3年生の頃、今住んでいる家に引っ越しをした。

引っ越しをした週末に家族で家の周辺をまわっていたら、少し大きな駄菓子屋があったので授業の時間が少ない日に初めてその駄菓子屋に行ったとき、少し厳ついおじさんがいたので少しどきどきしたけれど、おじさんのほうから話しかけてきたのでどきどきも収まってきて、いつの間にかよく喋るようになった。

最近は何活動などで通える機会が少なくなってしまう、この前行ったときは今入部している部活動の事や最近の学校行事などを話した。駄菓子屋の森本さんは、野球のことも知っていて、自分の地元では野球が好きな人がたくさんいるので、よく野球のことで盛り上がる。

対面したとき、何故か圧がかかることもなく、幼稚園に通っている子供たちもすぐに駆け寄って話しかけているほど、地元の地域では顔が広い。

森本さんは2日に一回くらい朝にゴミ拾いをしていて、夜の7時くらいに駄菓子屋が閉まるけれど、私も部活動がない日や週末にお店が閉まる20分くらい前に駄菓子屋のすぐ隣にある公園のゴミ拾いを手伝っている。

学校に行く時間帯によく会って挨拶をしている。そこで私は、接客で人と接することが多いのでどうすると人付き合いがよくなるのかと、森本さんも段々高齢になられているので、今後駄菓子屋をどうしていくのか、朝の7時辺りによく通学ですれ違うので朝は店で何をしているのかを聞いてみたい。

取材依頼をして日程が決まるまで

森本さんとは、全く連絡先などを繋げていないので、他の客が少ない夕方に、直接お店に行ってアポをとった。「別にいいけど教えられないことは、話さんからな」と、ドストレートに言われた。少し気圧されたが、取材する日程を相談しながら決めた。

取材概要

日時…2024年8月13日 13時～13時30分

場所…ショップもりもと

取材した方…ショップもりもと 森本良太郎さん

自分との関係…駄菓子屋の主人と常連客

取材場所に到着してインタビューが始まるまで

森本さんの駄菓子屋は家から歩いて5分もたない場所にある。取材時間の10分前に駄菓子屋に着くと森本さんが椅子に座って気持ち良さそうに寝ていた。「こんにちは！」と挨拶した。「おお、来たか。ほんじゃやろか」そう言われて顔を洗っている間にメモ帳、筆記用具、録音機を立ち上げて、取材に備えた。

駄菓子屋をはじめたきつかけ

インタビューを始めた。僕はまず、何故駄菓子屋をはじめたのかを尋ねた。はじめた年は聞いたことはあるものの、動機までは、全く知らないからだ。

私「まず、森本さんは、駄菓子屋をはじめたきつかけはありますか？」

森本さん「動機は別にないんですけれども、それまで勤めてたんですけどね会社でね。それが定年退職67歳になって、したときに両親がやってたんですわこを、それで誰もやるもんがおれへんしまあ引き継いでほしいこうかなと思ったのがきっかけ。そういうまあ流れで自分がやっぱり引き継いでいかなあかん、せつかくあるもんをつぶすわけにもいかんと、いうことで自分の仕事として、していいこうと思ってやりました。」

私「森本さんが辞めたときに引き継ぐ人はいるんですか？」

森本さん「反対に自分が辞めたあと？ それは、今のところはまだないです。たぶん引き継ぎ者がおらんかったら、ここは閉店になった場合はまあ後片付けくらいまでして、何かに使えるように息子にまあ譲渡すると、まあそんなとこですね。息子は、ここを何にするか、このままするか、ガレージに改造してガレージとして使うか、それはもう、引き継いだ自身、息子の自由にそんなとこですね。」

私「それまでどれくらい続けようと思っていますか。」

森本さん「そやね、今80ですから、いけるとこまで、ギリギリのところで、んん、あのー、やってできるところまで、まあ80んんー、よういつてもまあ85ぐらいやろな今からやったら今80んんー、どう考えても85、それでもまだいけたら、1年1年延ばしていこうと、んん、でもうあかんようになったらあのー、その時点で、ええ全部、まあ、あのー、閉店という形でとって自分の代である、終う、そんなとこですね。」

その話を聞いて、両親がやっていたというほど歴史のあるお店なんだなあと考えた。話していくとだんだん庄もなくなっていくた。

接客として大事にしていること

授業のテーマである「魅力」について掘り下げるために、魅力的だと思ったことを言って、実際に

大事にしていることを森本さんに聞いてみることにした。

私「僕が来たのが小3の頃で、初めてここ来た時ちよつと森本さんがいかつていうイメージがあったんですけど、そこから何日かしたらこんなに話せるみたいな感じになってたんですけど、コミュニケーションってどうとっているのですか？」

森本さん「やり方ってないんだけどね、まあ誰かと誰かが話するのといっしょで、なんら変わらな
いと思うんだけどその、最初おうた時に、まあ挨拶から始まるわなあ。挨拶して人と人があの一、顔
覚えて、名前も覚えて、それから交流していくっていうのが、まあ人としての、まあ、まあまあいう
たら、これ成長してあの一、やっていく以上は。んー、切って切り離されへんわなあ、それと一緒
で商売でも、ここで、この中で。んー、来てくれたんやから、まあ、んー、挨拶して、んー、
歓迎してますっていう形を出さないとやっぱ来てくれへんわな。まあそういうところやな。だから
まあ、来てたら歓迎してますっていうのがやっぱ心や顔に表さなしゃーないわな、まあそういうこと
やと思いますねこの商売でやる以上は。まあ最初の基本はやっぱ、人が人と会ったときに挨拶で始
まると同じことやけど、商売となったらねまたそれを活かしていかなあかんな。」

私は森本さんにコミュニケーションの常識を教えてもらい、今後友達と話すときのコツを知ることが出来た。

取材を終えて

取材を通じて思ったのは、基本のコミュニケーションが大事だということ。当初は、普通に向き合
って話すことが魅力的だなと思っていなかった。けれど、挨拶から始まり、顔を覚えて、名前も
覚えて、それから交流していく。それが、森本さんの魅力の基本だということを教えてもらった。

「最後に写真いいですか？」と聞くと、「撮ろか」と言ってくれた。初めて、森本さんと写真を撮
る。森本さんと少しコミュニケーションのことを知った自分が撮った写真は、忘れられない取材の記
念です。





父のことを何も知らない私

聞き手 高島翔太

私が取材したいと思っている人は私の父だ。父は野球が好きで野球グッズやプロ野球チップスなどを買って帰ってくる。また、朝早くに家を出て夜の遅くに帰ってきて疲れているだろうに、唯一の休みである日曜に一日中、父が私と兄を遠い公園にも連れて行ってくれて、鬼ごっこやかくれんぼをして遊んでくれた。ゲームセンターに連れて行ってもらったこともあった。

だが、なぜか私は父のことをほとんど知らない。私が生まれる前から仕事をしていて、なんか機械の何かをやっているぐらいしか知らない。なので、父が今何をしているかも当然知らない。私が父に今回の取材で聞きたいことは2つある。1つ目は「どんな仕事をしているのか」だ。2つ目は「なぜその会社に入ったのか」だ。今さらだけど何をしているかを知りたいので取材することにした。

取材概要

取材時間…2024年8月1日午後6時～午後6時30分

取材場所…自宅のリビング

取材相手…高島和夫さん

私との関係…父

取材が始まる前の様子

いつも気軽に話している父に取材することに少し緊張していたが、自宅のリビングで午後6時ということもあり、いつも聞きなれている母が晩御飯の準備をしている音がして少し気が楽になったような気がした。

取材開始

私「今回は憶れている人に取材をするっていう課題で今から取材をしても良い？」

父「うん。」

私「まずは『動機レポート』を読んで」。

「動機レポート」は1学期の授業の課題で、なぜ取材相手に父を選んだのかが書かれてある。私は動機レポートを読まれているとき、少し緊張していた。一方父は少し恥ずかしそうにしていた。

なぜその会社に入ったのか

私「どんな仕事をしているの？」

父「金属の硬さとかを測ったりする機械の整備をする会社やなー。」

私「えっ？　なんか日本語おかしくない？」

僕は一文に「する」が二個入っていて、聞いたすぐは何を言っているのかわからなかった。でも、どういふことか聞いたならその文が理解できた。

父「金属の硬さを測ったりするわけではなくて、その機械の修理や整備をしているってこと。」

私「あーね。なんでその会社に入ったの？」

父「そういう機械にもともと興味もあったし親戚が人手を探していたからかなー。」

私「そうなんや。その親戚の人はどんな感じの人やった？」

父「今の会社の社長でとても優しくて良い人だよ。」

私「なるほど。その社長とのエピソードとかってある？」

父「んー。まあ結構前やけど一緒に出張行ってお酒飲んでギャグ言って滑ってることとかかなー。」

私「例えばどんなギャグ？」

そのとき父は少し答え辛そうにしていた。どんなギャグだったかを思い出そうとしているのか、言っているのか悩んでいるのか分からなかったので、声をかけてみた。

私「答えにくかったら答えんでもいいんやでー。笑」

父「うーん、しょうもなすぎて言われへんわ。笑」

私「その機械の検査するのに、資格とかっているん？」

父「まあ一応なくてもいけるけど、お客さんからの信頼を失ってしまうから、僕の勤めている会社ではJCSSっていう資格がないと入れないよ。」

私「JCSSって何？ちょっと調べてみていい？」

私は突然出てきた「JCSS」という単語が気になったので、取材中に検索をするという、慣れ親しんでいる父だからこそできた異例の行動をとった。調べてみるとどうやら「Japan Calibration Service System」の略であるということが分かった。この「Japan Calibration Service System」を訳すると、「日本校正サービスシステム」だということがわかった。でも、私はちょっと意味が分からなかった。

私「じゃあ取材再開するわ。その資格取るのって難しかった？」

父「そこまで難しくはなかったかな。機械いじるのが好きやったからその辺は意外とすんなり行けたよ。」

私「その資格を取るためには具体的にどんなことするの？」

父「機械の検査をちゃんとできているかを確認したり、とかかな。」

私「ところで、よく朝早くに起きてどこか行ってるけど、どこ行ってるの？」

そのとき、私はふとこんなことを思い出した。小学校の低学年のときぐらいの夜に、隣で寝ていた父に「明日どこ行くん？」「何時に起きるん？」「誰と行くん？」「何時に帰ってくるん？」「昼ごはん何食べるん？」ということを聞いていたのだ。そこで私は、自分が父のことを全く知ろうとしていなかったわけではないんだと思った。

父「たまに事務所に居てるけど、基本的には兵庫や三重とかに日帰りで点検に行ってるね。遠くに行く時はその近くのホテルに泊まったり、会社の車は中広いから、ホテル代浮かすためにたまに会社の車の中で寝ることもあるね。」

私「車の中ってしんどくないん？」

父「うーん、まあホテルよりは居心地悪いけど冷房もすきにかけれるし、席倒したら寝ころべるし意外といけるよ。」

私「へー。結構いけるんや。」

父の唯一の休日

私「そういえばさ、ちっちゃいときに仕事で疲れてるのに唯一の休みの日に遊びに行ってくれたのはなんで？ 土曜も遅くまで仕事してるのにしんどくなかったん？」

父「まあ、子どものことが一番やからかな。母はいつも子どものお世話してて大変そうやから、日曜日ぐらいは母をゆつくりさせてあげたいと思っだし、子どもを楽しませてあげたいっていうのもあったからかな。あと公園連れて行ったらめっちゃ笑顔で楽しそうに遊んでくれてうれしいってのもあるな。」

私「そんな楽しそうに遊んでた？」

父「うん。きゃっきゃきゃっきゃ言っただけで遊んでたわ。笑」

私「そう？ 笑」

私「お父さんってやっぱり家族思いやな。」

父「そう？」

私「うん。お父さんのところに産まれてよかったわ。もっとお父さんのこと知りたいわ。」

父「そう言ってくれるとうれしいわ。またしょうが大人になったら色々教えてあげるから楽しみにしてて笑」

私「なんかそう言っただけで忘れたそう」

父「まあ忘れてたらまた聞いて」

私「おっけー、取材協力してくれてありがとう」

取材を終えて

私は取材前緊張していたことが嘘かのように普通に話していた。この取材を通して少し父のことを知れたが、まだまだ分からないことだらけなので、また機会があれば父のことをもっと知りたいなと思った。



スポットライト

聞き手 所あおい

私が取材相手に選んだのは、清教学園の教師の森山啓子先生だ。

森山先生は、国語科の教師で、何十年も清教学園で勤務している、いわゆるベテラン教師だ。現在は定年を迎え、再雇用として働いている。定年を超えていて、中2学年団の中で最年長にもかかわらず、一番元気だ。声がとても大きくて、礼拝の時の讃美歌や、聖書を読むときに、隣のクラスから大きな声が聞こえてくる。今年で教師を辞める、という噂がある。去年は1年D組の副担任だったが、今年は2年B組の担任をしている。

取材をしようと思った理由は、森山先生は今まで出会った人の中で一番楽しそうに仕事をしているし、仕事のやりがいを感じている人だと思ったからだ。森山先生はどんな大変な仕事でもネガティブなことを言わず、ポジティブで前向きに物事を捉えていて、輝いているように見える人だ。だから私は森山先生に取材をしようと思った。

取材をお願いするまで

夏季午前授業期間中のある日、職員室に行って「森山先生に取材をしたいです」と言って、取材相手を選んだ動機レポートの原稿を渡した。すると、「私でいいの?」と言っていたが、とても嬉しそ

うだった。いつ取材をするのかをその日のうちに決めた。

取材日時…7月30日 火曜日 13時20分ごろ

場所…中2B教室

取材がはじまるまで

取材当日、午前中に部活があつてミーティングが終わってからロッカーの近くで昼ご飯を食べた。取材の時間まで少し時間があつたので自習をしようとラーニングコモンズに向かって歩いてみると、廊下で森山先生にばったり会った。そして、そのまま取材を始めた。

森山先生「レポート読んでびっくりしてんだけど、私、今年で教師やめへんで（笑）前に立って保護者の人にも同じことを言われてんだけど、そんな噂回ってるん？」

私「去年の終わりにくらいから来年に辞めるらしいみたいな噂が回ってて。」

森山先生「そうなんや。今年でやめへんこと書いてないや？」

私「わかりました、書いてきます！」

今までずっと今年でやめるとばかり思っていたからとてもびっくりした。

教師になったきつかけ

私はまず、森山先生が教師になった理由を聞いた。

私「どうして教師という仕事になりたかったんですか。」

森山先生「先生になりたかったのは小学校の頃からずっと先生になりたくて。人の前に立ってしゃべるのが好きやってん。小さい頃から。で周りの大人とか先生とか『啓子ちゃん大きくなったら先生になったらいいね』とか言われて『あ、先生なるんやな』みたいになって。で何の先生になるかはずっと考えてて、高校から大学に入るときに大阪教育大学っていう大学に入ったんやけど、小学校の先生になろうと思って大教大に入ってるね。

大学で小学校の教育実習でその頃は教育実習が六週間あったんやけど、もう子供たちとは一か月半くらい触れ合って、もう絶対小学校の先生になりたいと思って。子供たちと一緒に運動したり、追いかけてこしたりするのもすごく楽しかったから、もうそれでもう絶対って思ってたんやけど、当時、私が大学生の頃の採用試験がすごく厳しくて、いっぱい受けたんやけど、大阪府とか兵庫県とか地方のどこまで行ったけど、全然通らなくて。

小学校の先生は無理かと思ったときに、大学で小学校・中学校・高校の3つの教員免許取っていたから、清教学園という学校が先生を募集してますけど、どうですかって言われて。正直どうなんって思ったけど、それで小学校の先生になるつもりが中学校・高校の先生になってん。でも来てみたらす

ごくいいところやって。生徒たちもかわいし、まあ小学校の先生になるつもりで勉強してたから、中学生とか高校生に教えるのは本当に教師になってから勉強したっていう感じで。」

私「中学校と高校の教員免許って国語だけしか取ってないんですか。」

森山先生「そうです。小学校の免許はいろんな教科を小学生は教えなあかんからいろんな単位を取らなあかんのね、でそこにもうちょっとその自分の専門の国語勉強にプラスで勉強して、中学校の教育実習にちよつと行くと中学校と高校が小学校の免許と一緒にいてくるみたいな感じで。自分がどんな免許が欲しいかで取る授業が変わってくるのでいっぱい免許持っている子もいてたけど、私はそんなに勉強してなかったので小中高しか取れなかったけどまあでも実際に使うのはね結局中高しか使っていないからちよつと勉強して中高も取れたから良かったかなって思います。」

私「清教学園に入ってからもう小学校でもう一回チャレンジしたいなっていうのはなかったんですか。」

森山先生「そんな余裕がなかったな。今思ったらそういうチャレンジしても良かったのかもしれないけど。中学生とか高校生とかに教えるのが嫌だったらここはやめて絶対小学校の先生なろうかと思ったと思うねん。清教学園のまあ居心地が良かったとか、生徒たちがすごくいい子らばかりで先生たちもすごい学校としての環境がすごく良かったから恵まれていたなと思って。別にここでもいいかなって、教師になりたいっていう夢は叶えられたのでいいかなと思って。」

仕事と子育ての両立

私「仕事と家庭の両立ってどうやってやったんですか。」

森山先生「教師の仕事がいいなと思った理由のもうひとつの理由は結婚しても子供ができて継続されてあと男女の差が全くない。男だから女だからって関係なくもう自分の責任で生徒を預かってする仕事を一生続けられるっていうのがいいなと思ったんで辞める気は全くなかったん。

最初の子どもができて、最初は旦那と3人で暮らしてて。子どもがしょっちゅう熱出して。熱出すと保育園が預かってくれへんからその度に、私が休んだり旦那が仕事休んだりおばあちゃんに来てもらったり。妹に来てもらったり、拳句の果てには近所に住んでる卒業生のお母さんに頼んで預かってもらったりとかもう頼れるツテはもう頼りまくって、子ども預けながら仕事を続けててんだけど、もう無理かなと思って、京都に住んではった旦那のお父さんお母さんに来てもらって同居するようになってだいぶ楽になって。夕ご飯も作ってもらえるし、おばあちゃんに。熱が出て保育園にいけない時もおじいちゃんおばあちゃんに見てもらえるし、それは大きかったかなあ。

同僚の女の先生はたくさん辞めていった。30年前ぐらいからすごい進学校になっていった。最初のはのんびりした学校やったんやけど。十年目ぐらいから進学を目指すっていうふうになってからすごく忙しくなった。仕事は家に帰るのも9時とか10時とかになるようになって、旦那さんがすごく協力してくれない家の女の先生はもう続けられなくて次々辞めていった。清教学園としてのすごい損失だったと思う。

今は働き方改革で6時には帰れるしすごく休みも取りやすくなったけど。昔は大変だった。本当におじいちゃんおばあちゃんや旦那に助けてもらって。ほんまに家族の支えで仕事を続けて来られたな
ってすごく思います。」

教師の仕事

私「長い間、教師として働いてきて、そのうち中学校で教師してたのってどれぐらいですか。」

森山先生「高校が今57期くらいやねんけど。私、18期からいてるんやんか。高校の26期の子
が中1の時に初めて中学生を持つて。高校を卒業するまで持つてまた中学に戻つてみたい。また高
校行つてとかで、しっかり中学生を持つたのは37年いてるけど、そのうちの10年ぐらいかな。」

私「圧倒的に高校の方が多い？」

森山先生「多いね。でも降誕劇はもう4回かな。だから今年降誕劇見て5回目ぐらいかな。降誕劇
のことは詳しいよ。」

私「笑。担任と副担任の職務っていうか量つてだいぶ違うんですか。」

森山先生「だいぶ違う。中学校はね中学校は副担任の存在が大きいつていうか去年私、副担任やつ
たけど、冬野先生がまあ半分わけしてやりましようつて言ってくれはつて、担任の先生の仕事もやら
せてもらったけど、高校は担任主導でやっているので。副担任の先生は担任の先生の公休日の日に手伝
いに行つたりとか。ちよつとお手伝いする感じかな。」

代わりに副担任の先生は別の役職がっている人が多い。学年主任とかほかの学校の仕事あるやんか。生活指導とかそういうので忙しいとか。仕事量的には何で忙しいかはそれぞれ違う。部活指導ですごく忙しい先生とか。

だからなで忙しいかはその人によって違う。あの教務とか進路とか生活部とか特活部とか今やったら特活部だったら文化祭の準備も始まっているし。担任の仕事、例えば三者懇談期間中は担任の先生が。その間、副担任の先生は部活を指導したり、通知表を作ったり、居残りの子の面倒を見たりせなあかんから全体の仕事量的にはみんな一緒ぐらい。」

コロナの影響

森山先生「コロナになった時にオンラインで授業をしましょうってなってね。しばらく学校閉じなきゃいけないからオンラインで授業してくださいって言われて。国語の先生ってそういうのに疎いわけよ。疎い先生が多いから、どうするみたいになって。もう来週からは絶対始めなあかんから今週の間で絶対準備しなあかんってなった時に理科の先生とか数学の先生とかに教えてもらいながら、iPadの画面を黒板代わりにして授業できるっていうソフトがあるのを教えてもらって。子供たちも家で先生の声は聞こえてきて黒板に大事なことが書かれてそれで授業が受けられるっていう。これなら授業できそうやなって、それを買って、その使いかたを教えてもらって、自分で録音したり画面を撮ってきいたりしながら。最初20分位の授業するのに5時間くらいかかって。失敗したってもう一回やり

直し、とかやりながら。本当に辛かったな。」

私「ベテランとか関係なく。」

森山先生「関係ないよね。その時私ともう一人、一つ下の女の先生とあと大学出て来たばかりの若い男の子と3人組やつて。3人で高校一年生の国語を担当してて。で3人で色々相談しながらなんとかエデュケーションっていうので授業しようって決めて、やるねんけど私ともう一人先生はやっぱ疎いわけよ。でうまくいかないよ、この若い男の子はそういうのがすごく得意やから。結局、普通は先生なつたばつかりの子やから普通は我々が指導する立場やん、普通は。でもどうしたらいいと教えてもらってばかりだったのがすごく悲しかった笑。なんでこんななんか来たばかりの子にどうしたらいいんですかと教えてもらってるんやろうと思って。」

定年後のこと

私「あと何年くらい続けるつもりですか。」

森山先生「少なくともあなたたちが中学を卒業する来年はこの学園に残しておいてほしいなと思ってる。そのために髪の毛も今一生懸命伸ばしてるんよ。卒業式の時に髪の毛をアップにするために。着物を着て、と思ってるねんけど。その後どうなるかはわからへんけどでもまだまだ元気なので仕事はしたいなと思ってます。」

中学の卒業式の森山先生の着物がどんなのか気になるな。

私「だいたい何歳くらいまで辞めるとかはあるんですか。」

森山先生「えっとね、65歳までは雇ってもらえるんよ。だからあと頑張ればあと三年働ける。」

私「じゃあそれ超えたら、働けなくなる。」

森山先生「それ超えたらもう多分雇ってもらえないと思うので。」

私「じゃあ高校卒業はできない感じですか。」

高校卒業までいれないのが悲しかった。

森山先生「そやね。定年になったら何しようかなと思って。あと何かこう朗読が得意なので朗読をするような仕事とかボランティアとかもしたいなと。あとお芝居が好きだから。今、趣味でもうしばらくしてるねんけど。それも続けたいし。時間ができたら歌とかピアノとかも習いたいし。小学校にちよっと手伝いに行ったりとかもできるかなとかやりたいことはいっぱいある。」

大学時代のこと

私「大学時代、教師になるためにしたことってありますか。」

森山先生「大学の時ってまあ大阪教育大学っていう大学なんで、先生になりたい人ばかりが集まってくるねんけど、その頃は採用試験の合格率がすごく低くてなかなか教師になれなかった時代だけどもみんな教師になりたいっていう人たちが集まってるんで。

私は演劇部やってんけど、2月になると大学が受験のために学生が行けなくなるねん。受験の準備をするから大学が。大学に入れなくなったその時期にちょうど春休みなる前くらいかな。2月の終わりから3月ぐらいにかけて、部活のみんなで地方のちっちゃい小学校でミュージカルをしに回ることとしてたんやんか。大阪教育大学の演劇部のもですけどそちらの小学校で講演させてもらえませんかっていっぱい電話して。いいですよ、来てくださいって言ってくれたところに行って。

全校生徒が100人ぐらいのちっちゃい小学校に行って。その宿直室みたいなところとかに泊まらせてもらって、お芝居して。地元の子供らと交流してっていうのをやって。すごくいい経験になったな。」

部活動の顧問

私「今って部活とかって持っていないんですか。」

森山先生「部活は定年になったら部活はもうないねん。顧問はないねん。」

私「その前ってなんの部活をやってたんですか。」

森山先生「一番長かったのは合唱部かな。勤め始めた頃は演劇部やってん。」

私「演劇部ってあったんですか。」

森山先生「演劇部、高校にはね。中学にもあってんで。中学の演劇部はいつなくなっただんやろう。中学にもあったけど私は高校の演劇部を十年間ぐらい演劇部やったんかな。勤め始めて。そのころは最初のうちは部員がすごく少ないから、男の子1人の時とかあって、その子と私の2人でお芝居やりたりとかしとった。一緒にやろつか、って。顧問というよりも部員同士みたいな感じで何するとか言いながらやってたし、そのあとはいろんな部活行っただけど一番長かったのは合唱部かな。合唱部の前にバドミントン部を五年間くらいやったかな。」

私「どういうことするんですか。運動部の顧問って。」

森山先生「邪魔にならないところでバドミントンの練習してた。バドミントン部ってすごいハードで、バドミントンでこうやってやるのか、っていうのが分かって結構面白かった。その頃T先生と一緒に顧問やって。一緒に広島の方に合宿行ったりもしたし、バドミントン部も終わってから十年ぐらい合唱部やった。」

私「定年最後の方も？」

森山先生「最後の二年だけ合唱部はH先生が来はって。もう私いらなくなって笑。で二年間演劇部持って終わってたかな。」

私「どの部活が一番楽しかったですか。」

森山先生「合唱部（即答）。合唱部は何が楽しかったって、あの指導とかは全然できひんねんけ

ど。指導は高校にすごい優秀なA先生っていう先生いてはるし。中学校はH先生がずっと指導してきてきはった人だから。私は指導はできひんけど、合唱部っていうところまで講演するんよ。いつも私は横でタンバリンを叩いてる笑。パーカッション係やって、それがすごい楽しかった。」

スポットライトを浴びるのが好き

森山先生「結局出たがりなわけよ。だから陰で見てるのはおもないから、私も出て行ってなんかしたいっていうのが。それこそ最初子供と一緒に2人で演劇部でお芝居してた頃から、なんでお前出てくんねんってなんねんけど、なんか前に出てしまう。マイクを持ったりスポット浴びたりするのが好きなのよね。」

これから75期でしてみたいこと

私「国語の授業でこれからどういう授業75期でしてみたいなのがありますか。」

森山先生「速読で構造図とか書いたりして考えて書くやんか。ああいうことも大事だし今年のはあの『走れメロス』が、去年はほら『少年の日の思い出』が去年の小説のメインがやったやんか。今年は太宰治の『走れメロス』があるので、あれをどう料理するかなっていうのをすごいなんか常に頭のどこかに走れメロスのことが頭あるかな。今までやってきた『走れメロス』とはちょっと一味違う授業にするにはどうしたらいいか、すごく楽しみにしたい。」

私「ありがとうございました。」

まとめ

初めて森山先生とじっくりと2人で喋れて楽しかったし、今まで知らなかったことかがわかってよかった。今、少し気になっている教師の仕事についても聞けて参考になった。大変なことでも楽しかったように話す森山先生はやっぱりすごいし、働いていて楽しいんだなと思った。



何事にも真剣に

聞き手 辻山あい

取材の動機

私が魅力を感じる人は、近所に住んでいる看護師の平野ゆいさんだ。私が小さい時から遊んでくれているので、私にとってお姉ちゃんのような存在だ。だから、「ゆいちゃん」と呼んでいる。ゆいちゃんは笑顔の絶えないとても優しい人だ。私の中では「ほんわかとした人」というイメージがある。ゆいちゃんは学生である私にとっても尊敬する人だ。勉強もできるしピアノもできるし絵を描くこともできる。そんな、なんでもできるゆいちゃんだからこそ看護師という仕事がびつたりとあてはまるのかもしれない。私は看護師という仕事は大変なお仕事だと思う。病気や元氣のない人に寄り添って行かなくてはならないので、いつも自分自身が元氣でなくてはならないといけないと思うし、人の命を扱うお仕事なので慎重にならないといけないと思うからだ。だから、なぜ看護師になりたいと思ったのかということが気になったので今回ゆいちゃんに取材をすることに決めた。

取材の日程が決まるまで

私は取材のアポをとるためにゆいちゃんの家まで行った。インターホンを押すとゆいちゃんがすぐに出てきてくれた。「総合学習の授業で『魅力的な人に取材する』という授業があるのですが、ゆい

ちゃんに取材をさせてほしいです。」と、取材の旨を伝えると「え！こんな私でよければ。」と、快く受け入れてくれて本当に安心した。後日、手紙でLINEの連絡先を教えてくれたので私は友達登録をした。アイコンがともかわいくてゆいちゃんらしいなと思った。ゆいちゃんも私も31日が都合の良い日だったのでその日に取材をすることが決まった。

取材概要

日時…2024年7月31日16時～17時

場所…ゆいちゃんの家

取材した方…O病院 看護師 平野ゆいさん

自分との関係…知人

取材場所に到着してインタビューがはじまるまで

ゆいちゃんが「私の家においで～」と言ってくれたので取材場所はゆいちゃんの家が決まった。私の家からは歩いて10秒くらいのところにあり、本当に近所だ。ゆいちゃんの家についてインターホンを押すとき緊張から頭が真っ白になった。しかし、ゆいちゃんが笑顔で出迎えてくれたので少し緊張が解けた。リビングに案内してもらうと、小さい時によく遊んだなと思ってなんだか懐かしく感じた。

ゆいちゃんが「アイスコーヒーか紅茶、どっちがいい？」と聞いてくれたので「紅茶おねがいします。」と言った。紅茶は思ったよりも大人の味だったけれど、緊張からかゴクゴクと飲んでしまった。

ノートを用意して録音アプリを立ち上げた。ゆいちゃんが「なんか私も緊張するわ」と微笑みながら言ったのでその場の雰囲気も柔らかくなった気がした。

インタビューを始めた。私はまずゆいちゃんがどこでどんなお仕事をしているのかと言うことにについて聞くことにした。初めて聞くのでワクワクした。

看護師の仕事

私「よろしくお願いします。」

ゆいちゃん「こちらこそよろしくお願いします。」

私「さっそく質問をさせていただきます！ まず、ゆいちゃんのお仕事の内容についておしえてください。」

ゆいちゃん「はい。まず、私は大O病院の看護師をしていて、NICUっていうところなんやけど、小さい体重の赤ちゃんのお世わをしています。」

私「すごい…。どのような感じで動くのですか。」

ゆいちゃん「はい。スケジュールとしては8時半に全体の連絡事項をして前の日からの情報伝達をして、その日最大3人の赤ちゃんについて。で、日勤のリーダーに報告して一緒にやってほしいこと調節して、ひとりひとりの赤ちゃんについて15分ぐらい話して終わり次第みんなそれぞれの仕事をすることって感じかな。

で、2時間ごとにチューブを使ってミルクを飲ませたり毎日か2日に1回は体重測定して体の中の成分のバランス見たり体重が増えているかを見る。赤ちゃんのお父さんとかお母さんが面会に来はったら抱っこしたりしてるかな。でまあ、その間とかはできる子やったら薬入れたりとかがあって、16時ぐらいになったら1日の状況をリーダーに報告する感じかな。」

驚いた。ゆいちゃんが赤ちゃんの看護をしているなんて！細かい作業だから難しいそうだなと思っただけで、ゆいちゃんは手先が器用なので上手にやっているのだろうなと思った。

どうやって看護師になったのか

私「次にどうやって勉強をしたのか教えてください。」

ゆいちゃん「大学院でできる看護師の免許をとった、さらにそのプラスみたいなんで専門看護師っていう資格があって、私が行ったのはその資格を取るための試験が受けられる前提みたいな。まだその試験は受けてなくてそれに合格したら専門看護師っていう資格が取れるっていうやつなんやけど。

専門看護師には6つの『実践』、『教育』、『相談』、『調整』、『倫理調整』、『研究』 っていう役割があるかな。」

私「6つの役割についてもっと詳しく教えてください。」

ゆいちゃん「えーっと。まず、『実践』 っていうのは看護実践で直接ケアをするとかスタッフみんなでケアをできるようにするみたいな。で、『教育』 っていうのはみんなに対しての指導だったりもつとうまくいくためにはどんなふうにみんなが知識や技術を得たりしたらいいかなみたいなのを教育的な立場になれるようにっていうの。で、『相談』 っていうのは困っていることがあるがあつた時に相談されたらどうやったたらそれが解決できるかなみたいなのを一緒に考えて解決策を見出していくっていうのと、あとは、『調整』 っていう病院の中で看護師だけじゃなくっていろんな仕事をしている人がいるんやけどその人と一緒に協力しながらどうやったたらもつといいケアができるようになるにはそれぞれがどんな役割をしたらいかっていうのを調整する。で、『倫理調整』 は子供とか家族の権利を守るために、今この状況は権利が守られているのかなっていうのを考える。で最後は、『研究』。今の状況をより良くしていくためになんかテーマを見つけてそれに関して過去の文献とかを調べてこれを元にわかっていないところがあつたらそれを明らかにするため調査をする。

これができるようにするためのその基本的な力を大学院で学んで。なので、私やったら小児看護の病気のことでか薬のこととか、なんか看護理論って言って昔の人がどんなふうに考えているかっていうのを今どうやったら活用できるかなとか、あとは、みんながその医療を受ける人に色んな権利が

あって、今これが守られていない状況でどうやって解決していったらいいかっていうのをみんなで考えるやつとか。研究は自分でテーマを見つけて論文にするみたいなことをやってきたのが2年間の大学院のやつです。」

看護師になるのはやっぱり大変だなと思った。資格を取るためにこんなにも勉強しているゆいちゃんからたくさん熱意を感じた。勉強熱心なところもゆいちゃんの魅力だなと思った。

看護師になったきっかけ

次に看護師になったきっかけを聞くことにした。私は「看護師」と聞いて試験があつて難しかったり自分の体調管理もしたりしなくてはいけないので大変という印象がある。だから、なぜゆいちゃんが看護師になろうと思ったのか聞くことにした。

私「次に、進路を決める時どうやって行こうと思いましたか。」

ゆいちゃん「はい。えっとめっちゃさかのぼるんやけど。まず小学3年生ぐらいのとき『よい子の味方』っていうドラマ、櫻井君のやつ。知ってるかな。これを見て保育士さんになりたいって思ってたんやけど、小学6年生ぐらいとかの時に私のお姉ちゃんがちょっとだけ入院してた時期があつてその時に入り口の前で待ってたら看護師さんが声をかけてくれて嬉しかった印象があつてそれで看護

師さんも良いかなってちょっと視野に入れるようにしてて。

その時病棟保育士って言うのを知って、それいいな〜って中学生から高校生ぐらいで思ってた。高1とか高2ぐらいの時かな、割と看護の方に進む子が多かったりとか周りで入院する子がおったりとか色々あって小児科やったら自分のやりたいことに1番近いかもしれないみたいな気持ちになって、高校2年の時の先生に保育士以外にも考えたらいいんじゃないかって言われたりとかもあって。看護やってみようかなと思って学校みていいなと思って決めたんやけどやっぱり保育士の勉強もしたいなと思って。あとは、病院に就職するときに小児科に行きたいですって言ってもどれだけ通してもらえるか分からなくて、じゃあ、保育士の資格を持ったらいけるんじゃないかって。で、筆記と実技がある試験で大学生の時に資格とって。就職するときに子供のところに行きたいなと思ったから今のO病院やったら自分のやりたいことができるなと思ってそこに就職しようって決めました。」

このことにも驚いた。ゆいちゃんは初め保育士の仕事をしようとしていたなんて！ どちらもお世話をしたり元気を届けたりという共通点があるなと思った。いつも笑顔なゆいちゃんには本当にピッタリ当てはまるなと思った。

実際に看護師になってみて

私「次に、実際に看護師になってみてどうですか。」

ゆいちゃん「んゝ。なんか実際になってみて悲しいとか難しいなとかって思う方が多いけどいろんな子に会ったりとかするよ。」

優しい笑顔でそう言ってゆいちゃんは赤ちゃんの写真を見せてくれた。

ゆいちゃん「そう。なんかこれ私が大学院行く前にみてた三つ子ちゃんなんやけど。みんな600グラムとかで生まれた子たちの担当とかさせてもらって、生まれた時はみんなしんどくって3日とか1週間超えられるかなって言うところやったから。でも途中で色々ありながら大きくなって。これ100日祝いとかなんやけど。」

写真をみて感動した。赤ちゃんがとてもかわいくて胸がいっぱいになった。今まで話してくれた赤ちゃんの看護のことがより一層身近に思えて「こういうふうに育つんだな」と思うと感慨深かった。

ゆいちゃん「この子達のお母さんとも仲良くさせてもらって、まあ、かわいいかわいしながらこうやって大きくなっていくのを一緒に見られるのはなんかすごく嬉しいなって言うのがあったり。この子は1歳まで生きられる子が半分とかの生まれつきの子がある子なんやけどもう5歳かな？ ぐらいとかになる。いろんな治療とかするのかそんなに無理せず過ごすのかみたいないろんなことを悩みな

がらしてはったんやけど、それを一緒になんかこう過ごせるのがあるがたいなあって思うし。この子も500グラムとかで生まれた子なんやけどお母さんからお手紙もらったんやけど、最初はこのまま生きられるかなとか不安な気持ちがあつたけど看護師さんたちが暖かく話してくれたらこの子に優しく手を差し伸べてくれている姿をみて前向きに過ごすことができました、みたいなことを言ってもらったり。お母さんとやりとりする紙があるんやけどそこにいっぱい今日はこんなことがあつたよとか書いたり、その子が入院してる時に七夕があつてそんな時にそれぞれにメッセージを書くみたいなんがあんねんけどそれで愛されているんだなと思つたつてお母さんが書いてくれたみたいで。そうやって言ってもらえると、はる良かったなあって思つて。嬉しいことも色々だなあって。1年近く入院している子とかもいるからこんな大事な時期に一緒にいられるつて言うのは貴重な時期やから大事にしたいなあって思うし。この仕事じゃなかったらこの子達に会えないからそういうところはやりがいになつてんのかなあって思う。」

このことにやりがいを感じているゆいちゃんはイキイキとしていた。

先ほと言つた通り「看護師」と聞くと難しかったり大変な印象があつたが、1人の看護師として赤ちゃんに関わることを誇りに感じているゆいちゃんはそれだけ赤ちゃんひとりひとりに誠意を持って優しくそしてゆいちゃんならではの笑顔で接しているからだろうなと思つた。

私たちにできること

私「最後に、私たちには何ができますか。」

ゆいちゃん「うーん。なんかコロナのときに妊婦さんが感染してから赤ちゃんが生まれたことがあって。でまあ、その子は隔離して入院してたんやけどその時部屋が2部屋ぐらいしなくて。どうしようってなったことがあるから感染者が少ないほうがいいなって思った。赤ちゃんが入院するところやからお母さんが妊娠中も健康で過ごせたらいいな。赤ちゃんいますっていうマークをつけてる人がいてもし困ってる時に助けたら健康に過ごせるかなと思う。」

私「すごくいいと思います。」

さすがゆいちゃんだなと思った。自分のことだけではなくほかの人にも目を向けているところの配慮ができていて視野が広いのだと感じた。みんなが気持ちよく過ごせるように助け合いたいと思った。

取材を終えて

取材をする前は「ほんわかとした人」という印象が強かったが、ゆいちゃんのお話をきいているとゆいちゃんの力強さが分かった。私は今まで看護師は難しくて大変なものだと思っていたが、ゆいちゃんが看護師としての自覚、そして赤ちゃんひとりひとりに対しての熱意が伝わってきて、看護師とい

うものは難しい大変かもしれないけどだからこそうまく行ったり赤ちゃんが成長したりするとやりがいを感じるものだった。また、色々な資格を取るために勉強をしている姿も学生である私にとってもとても尊敬していて見習いたいポイントである。私もゆいちゃんのように何事にも真剣で、そして誰に対しても笑顔で接することを心がけたい。

「最後に一緒に写真を撮って欲しいです！」と言うのを家に着いてから思い出してしまったのでゆいちゃんに再度お願いに行くと、「全然！写真とろ！」と言ってくれた。これもゆいちゃんの心の広さだなと思った。ゆいちゃんとのツーショットは小さい時に何回か撮ったことがあったが久しぶりに撮ったのでなんだか緊張したがゆいちゃん得意の笑顔のおかげでその写真がより明るくなった。



米丁の魅力

聞き手 寺本大輔

取材の動機

今回取材をお願いしたのは、清教学園で社会を教えている米田先生だ。

最初に米田先生と出会った時はロシアの軍人みたいでとても怖かった。だが授業を受けているとてもやさしいと感じ、顔と性格のギャップが激しい先生だ。いつもいつ銃に打たれてもいいような防弾チョッキみたいなのを着ており、意外と似合っている。しかも戦車も運転できる免許を實際持っており、誰かが攻めてきても安心だ。

そんな米田先生の社会の授業が楽しみだ。その理由は三つある。一つ目は、授業が分かりやすいところだ。地図や戦いの年代などを描いた図がとても分かりやすいからだ。しかもその図は高校まで活用できるので、非常に便利だ。また細かくなく、おおざっぱに描かれているから頭に入りやすい。

二つ目は、様々な世界の国に行っており、その旅がとてもおもしろいからだ。アジアの地理についての授業があった時にその行った国の食べ物や建物の話などがあり、とても興味を持った。

三つめは、授業にクイズレットというクイズのアプリを用いていることだ。そのアプリはグループに分かれ、質問の答えを持った人がボタンを押すというアプリだ。そのアプリを使い社会の授業が好きになった人が多いと思う。しかし最近はクイズレットの法則性に気づいた人たちがいて、チートが

横行している。

ではなぜ米田先生に取材をお願いしたいのかというと、僕はとても社会が大好きで将来の夢は学校の社会の先生になろうと思っていて、様々なことを聞いてみたかったからだ。

僕が米田先生に聞いてみたいことは、まず「なぜ社会の教師になりたいとおもったのか」だ。母や父からも「あんた、社会の教師になりたかったら、いろいろ米T（ヨネティー）に聞いてきいや」と言われ、責任重大だ。米Tというのは、家で呼んでいる米田先生のあだ名だ。Tはティーチャーの略だ。最初の質問のほかにも、教師になって楽しいこと、辛いことなども聞いてみたい。また様々な国に行かれていますので今まで行った国でどこが良かったかというのを知りたい。

取材概要

日時…2024年8月12日

場所…清教学園

インタビュした方…米田耕助先生

自分との関係…担任の先生

インタビューが始まるまで

部活動が終わり、早足で職員室に行った。そこに着くと、米田先生がいた。緊張や部活動の終わり

ということもあって、汗が噴き出していた。タオルで拭きながら、米田先生へのインタビューが始まった。

教師になろうと思ったきっかけ

まず僕は、教師になろうと思ったきっかけや、なぜ社会科なのかを尋ねてみた。米田先生の過去が気になったからだ。

僕「よろしく願います。」

米田先生「こちらこそよろしく願います。」

僕「まず一つ目の質問からいきたいんですけど、なぜ社会の教師になったのですか。」

米田先生「子供の頃から社会が好きで、それを活かすことができる仕事を考えて行き着く仕事教師だったですね。それになんかさらに歴史の面白いところとか社会の面白いところを人に知ってもらおうと思ってたので、それやったらやっぱり自分がしている大学の研究とかよりも教師の方が向いてるんじゃないかって思ったのは一つあるかな」

子供の頃から社会が好きだったことは知らなかった。とても自分と似ている。

僕「いつから社会の教師になりたいと思ったんですか」

米田先生「うーん、もうね小学校高学年か中学生の前半ぐらいかな」

僕「社会だったら地理か歴史かどっちが好きですか」

米田先生「えっと僕はね大学の専門が歴史やったので、どちらかといえば歴史ですけれども、地理にもやっぱりすごく興味があります。それは去年の授業を見てくれたらわかると思うけどな」

地理好きなことは授業を受けていてよく分かった。体育大会など行事でどこか行く時、社会科の教師だからとすぐわかりやすく電車のホームや行き方を説明してくれて、初めての場所でも安心して行くことができたからだ。

米田先生が旅行会社でバイトをしていた!?

僕「学生時代にやってたアルバイトとかクラブ活動で何か今に生かされているものとかってありますか」

米田先生「僕、大学まで体育会の陸上競技部という結構ガチの部活入ってたので、もうそれはすべてに活かされてるな。やっぱりなんでもそうやねんけど、どうしても我慢せなあかんとこってというのがだんだん社会人になったらあるんやな、うん。

そこで自分が我慢強いかわからへんけれども、うん。あの頃はとにかくもう我慢せよってい

うのが運動部の基本やったから、うん。まあほんまよくないんだろうけどね、戦時中の名残ね。でもおかげでなんか辛抱強さを覚えたんだなというふうには思います。まずはそれが学生時代に一番自分にとってプラスになったことかなと思う。

実はね、学生時代一年間旅行会社でバイトしてたんですよ、うん。旅行の添乗みたいなのやつとか案内したりとかね。でも地道にやっぱりお客さん取ってくるのが一番大事な仕事やから。

なんでそういう仕事してたかというと、実は教師になる前に旅行会社就職決まって、当時はその教師の仕事の採用試験っていうのが合格の時期がすごく遅かったんで、その旅行会社に勤めるつもりでおったんやけども、運良く教師の方合格できたんで旅行会社をお断りして教師をやることにしてんけども。まあそれが良かったのかどうかわからへんけどね。でもまあなんて言うのかな、学校ってやっぱりね、こうなんか閉鎖的な世界だとか、社会とかけ離れてるとか孤立してるとかいふふうによく言われるけれども、そういう意味ではその一年間企業で仕事した経験っていうのは生かされてるかなと思う、うん。」

学生時代には、陸上部に所属していたようだ。スキー合宿の前日にも大阪マラソンに出ていたのが納得できる。旅行会社でバイトをしているのは似合っているなと思った。楽しそうだし、僕もそんなバイトをしてみたい。

僕「教職員の採用試験に落ちてたら旅行会社に一生勤めてましたか」

米田先生「多分勤めてたやろね。勤めてたとしたらコロナの時もどうなってたかわかんよな。だから今となつてはちよつとセーフって思ったりもしたけれども、旅行会社勤めてたら勤めてたでまたそれは別の生き方があったんやろうから、きつとそっちも楽しくやれたんちゃうかなと思つてるけどね。でも別に後悔はしてないです。はい。」

米田先生なら旅行会社で働いていても、すごく詳しい添乗員になっていそうだな。米田先生が旅行の行程とかを考えてくれたらすごく楽しい旅行ができそうだな。

いつも楽しそうな米田先生に辛いことなどがあるのか？

僕「教師になってみて、何か良かった事とか辛かったことはありますか」

米田先生「そうやね、良かったことと辛かったことが両方、うん。同時に存在してるんやけども、結局教師ってまあ言うたら、人を育てる仕事やんか。育てるつちゅうのは言い換えれば人を変えるし、人を変えなければいけないんだよ。」

で、人を変えるっていうのはものすごくストレスのかかる仕事やねん。よく言うやんか、「過去と他人は変えられない、未来と自分を変えられる。」と。その変えられない他人を変えなあかんから、しんどいですよね。恐ろしくしんどい、うん。

でも、その働きかけた相手がそれによって明らかな成長が見えた時とかは絶対それは喜びになるだろう。でも日々やっぱりその苦しさとの隣り合わせやからしんどいですね。しんどいと同時にやりがいがある世界があります、はい」

教師という仕事人が人を育てる仕事だと初めて分かった。でも自分の働きかけで人がいい方に変わってくれたらとても達成感があるのだなと思い、僕も教師になったら頑張りたい。

僕「何か生徒を変えていくためのポイントとかがありますか」

米田先生「あのね、中学生ぐらいになつてくると納得しないとやっぱり行動しないんよね、うん。形だけ怖いように見せかけている先生とかは絶対にその裏で信用されてないやろうし、その時だけこう、聞いているふりだけ一人でやり過ごそうと思うんだろうし。だからいかに聞き手って言うか、その生徒に納得させるかはそうだね、『そのとおりだね、だからこうしたほうがいいよね』って思ってもらえるように、やっぱり伝え方やね、言葉の選び方とか、うん。

僕のホームルームでしゃべる時にはいつも言葉選んでるし、授業でも次から次へと伝えなあかんこといっぱいあるけど、それでもやっぱ言葉選んで納得してもらいながら、動いてもらうようにしてるかな。形だけビビらしても絶対にそれは長続きせえへんし、だからやっぱりその辺を一番心がけてるかな、うん。」

生徒を納得させるためには、言葉選びは大切なのだなと思った。先生の話し方をじっくり聞いてみて、自分の言葉を反復するように、自分に言い聞かせるように「うん」とかゆっくり噛み砕いて話してくれていて、すごく温かみを感じた。

僕「ストレスがたまってストレスを変えるために何かやってることってありますか」

米田先生「なるほどね、できるだけ溜めないようにしてるんだけどね、うん。寺本君って将来教師をやってみたいなと思ってるわけやね」

僕「はい」

米田先生「じゃあ、ちょっと面白い話するよ。幸い5年前、10年前に比べたら少しその辺はストレスがなくなってきた。何でかという世の中がやっと教師の仕事が大変だということに気づいてくれ始めているからやねん。もう10年前とかもうボロクソやったで。あの時は大変やった、何べんやめよう思ったか。でも今はちよつと世の中が気づいてくれてるから、ありがたい話だなと思って、だから以前に比べたらやりやすくなったので、なんかもうこれは無理、みたいなストレスは今かかってることはほぼないです。

だから前のホームルームで君らに言った言葉は、あれ本当やからほんまにみんな上手にね、中学生なりに私にええ意味で気を使ってくれてるし、だからすごくやりやすい。それは去年の1Bでもそう

やったし、今年の2Dでもそう。だからこの、こういう時代がもうしばらく続くんやったら、大きなストレスなくやっていけるんちゃうかなと僕は思っているので、まだ今のところは続けようと思っています。」

昔は教師の仕事は大変だと思われていなかったそうだ。僕たちが米田先生を助けていると思ったら嬉しくなる。

いつも面白い社会の授業！ その45分の中にはどんな工夫がされているのか

僕「いつも社会の授業でとても分かりやすい図説とかを書いてもらってるんですけど、授業を面白くするために他に何か工夫されてるんですか。」

米田先生「社会の授業を受けててやっぱり面白いと感じる子と、面白いと感じない子が多いよね。面白いと感じる子はある程度普通の授業をやってもついてきてくれるんだけど、面白いと感じない子をどうにか包み込むかっていうのがすごく大事やねん。」

で、そういう子らにはやっぱりまず興味を持つきっかけを持つてもらわなアカんで、僕は動画を使ったりとかね、人間ってやっぱり動くもんの方が反応するから、これは興味ない人に興味が薄い人に向けてのやり方やけども、文字より写真、写真より動画というようなことをやるんだけど、ただ動画を流しっぱなしで「はい見とけ」じゃなくて、それをちゃんと噛み砕いて前後で説明する時って

いうのは必要になってくるんだよな、うん。

で、社会ってやっぱりなんやかんやで知識量はある程度必要やから知識もない状態でいきなりこう『机を班にして、さあ話し合いをしあえ』と言ったってそれはもう無理に決まってるから、だから、僕は必ず最初に説明はするようにしてる、うん。その説明を飛ばして『はい、じゃあこのページからこのページを教えなさい』なんて、これは教師のサボリと僕は思っているんで、僕はそれはしなないです。」

いつも授業を聞いているので、その通りだと思った。噛み砕いて説明してくれる時間があるから、授業がわかりやすいのだなと改めて思った。

今の時代とてもAIが発達している。果たして未来の社会の授業はどうなっているのか！？

僕「将来2045年問題でAIが人間を越すとかって言われてるんですけど、社会の授業とか教師とかってどうなると思いますか」

米田先生「あのね、難しいけど、この先まだ10年20年ぐらいは教師を超えるAIは出てこないと思う。例えばAIで授業を説明して動画を流しっぱなしで『それ見とけ』っていうようなことはできるけど、やっぱりその生の人間が前に立って、ほんで一人ずつ机の上の様子とかな、反応を見ながら言葉を変えたりとかするようなそこの技術っていうのは、まだ今のAIにはちょっと難しいか

な。

少なくともAIの発達過程の中では一番最後になるやろうなあ。教師はコミュニケーション能力が必要だから、コミュニケーションを必要としないような仕事からだんだんAIに取って代わられていくから、そういう意味で言う『やっぱりまだ教師の世界っていうのはこれからも長く存続する世界かな』というふうには思ってます。

で、例えば授業とかでね、ロボットの教師がガーッと入ってきたとして、画面に何かを映し出していろいろ説明し始めたらみんな聞かかって実際思うわけよ。聞くわけないでしょそんなもん、うん。少なくとも大学受験用の予備校とかやったら話は別やけど。クラスの中の8割ぐらいがその授業に対して興味とか関心を持ってない子らがおるようなところに入って、AIがさあ授業をやるってほんまにやれるか？動き回るやつとか寝てる奴とかどうやって起こすの、いうことになるやんか。

だからさっきも言ったように、AIにどんないろんな仕事が取って代わられるやろうけど、教師の仕事はその後ろの方かなと思うので、僕は今の中学生の子が教師を目指したいと言ったらそれは歓迎する選択かなと思ってます」

AIの授業も少し気になるが、僕は寝てしまうと思う。生の人間の授業の方が気持ちが入っているから、記憶に残りそうだ。

僕「将来まだ社会の教師を続けるつもりですか」

米田先生「これなかなかの鋭い質問だけど、うちの学校って一旦定年が60歳やねん。僕も50を超えてるんです。あともう10切ってます。そこまでは何も根本的なことを考えずにやり通そうかなと、今のところ。」

で、ただじゃあ60超えた時に世の中を見て教師の仕事が続けた方がいいのか、まあそれこそ僕何か変な資格持つてんの知ってると思うけど、そんなをやってみようかなと思ったりもしてるのはしてる。だからとりあえず60までは続けようかなって今のところは考えています。その後まだ白紙だけれども、もしかしたら以前に説明したような、ああいう…」

僕「バスの運転手とか？」

米田先生「そうそう、ただバスの運転手もどんどんこれからAIに取って代わられるだろうから、もしかしたらその時だったら求人がないっていう可能性もあるので、そこはちょっと冷静に考えていかなあかんなとは思ってる」

ただやりたいだけではなく、将来の世の中がどうなっているのかも含めて仕事を決めることが必要なのだなと思った。

米田先生は様々な資格を持っている。なぜそれを活かさないのか？

僕「あくまで社会の授業の話だったんですけど、中国語検定持つてるじゃないですか、なんで中国語の教師にならなかったのですか」

米田先生「中国語の教師ってね、高校や中学校の社会の教師よりも圧倒的に数が少ないねん、だって中国語の授業をやつてる学校なんてほとんどないでしょう？ 一部の国際科がある学校だけやんか。だから中国語の教師の免許も僕持つてるんやけど、でもそれをやっぱり活かせるところが少ないのと、語学はあくまでコミュニケーションの手段であつて目的じゃないと僕は思つてるから、やっぱり僕の目的は地理、歴史、公民の面白さを伝えることかなと思うので、やっぱりそちの仕事の方が大事なのかな、と思つたんでそうしました、うん。

ただやっぱりね、これからね翻訳ソフトとかどんな発達するけれども、英語の能力とかを身につけておいたほうが絶対いいと思うので、うん。英語力は絶対あつて損はないと思う。英語力さえあれば何とかなる部分っていうのがあるので、だから中国語の教師を目指さなかったのはそういう理由。実際に教えるんやったらやっぱり社会の方を教えたいっていう思いが一つと、あとはその翻訳ソフトの発達とかで英語さえできればいけるような世の中になるだろうから、中国語の需要がじゃあこれからどれだけあるかって言ったらそんなにかないかなというふうに思うのが一つ。

でも、じゃあなんで僕は中国語を勉強したかって言ったら、僕が大学生やつた30年前つて中国に旅行行つてんな、中国の田舎の方行つたから、誰も英語しゃべられへんからサバイバル英語も通じひん。ほんならやっぱり僕、中国史が専門やつたから、中国の歴史をしつかり知ろうと思つたら、あの

国の言葉をちゃんとしゃべれないと本も読めないし、そもそも行って会話もできへんし、説明聞いても分かれへんし。だから、これはちよつと自分が勉強したいことに対して問題があるかなと思ったんで、中国語をちゃんとやっていこうかなって思ってたという理由です」

中国語を教えるより、地理や歴史、公民の楽しさを伝えることが目的。米田先生の社会への愛が感じられた。自分の好きな国を知るために、その国の言語を学ぶところもすごいなと思った。

僕「中国って好きなんですか」

米田先生「やっぱりこう何千年もの歴史の中で日本がずっとお手本にしてきた、うん。百数十年前までずっと手本にしてきた国やから、だからやっぱり日本文化のルーツみたいなのが中国にもあるし、圧倒的に歴史が古いから日本の倍ぐらい歴史があるから、国も広いし何でもスケール大きいし、うん。だからそういう意味で言ったら、やっぱり中国の歴史っていうのは勉強してよかったかな、というふうに思ってる」

この質問が一番大切だ！

僕「教師になるために何かやとくべき事みたいなのってありますか」

米田先生「社会の教師を目指してるんですね？ 専門的な知識は勿論の事やねんけども、例えば、

うちで社会の教師したいんやったら、受験まで対応できる大学受験まで対応できる結構深いスキルが必要になってくるんだよね。うちと違う高校とか中学校とかで勤めようと思うんやったら、それはまた別の技が必要になってくるんやけども、うん。

とにかく大事なのはコミュニケーション能力を磨くことだから、人との接し方とか上手な伝え方とか、そういうことがちゃんと身についておれば、教師としては、聞き手から一目置かれるようになるから、必ずね、うん。人を変えなければならぬ仕事は当然ストレスも溜まるし、時には喧嘩になることもあると思うんだけど、できるだけ喧嘩せずに自分の目的を達成するっていうね、これ非常に難しい技やねんけど、それが必要になってくる。もう最後絶対譲れない一線があるときには、それを超えた時には喧嘩せざるを得ないっていうこともあるけれども、日常から何でもかんでもけんかで解決しようという考え方は、社会の教師には絶対にダメだと思うよね。社会はまず平和を教えるための究極の目的があるから、うん。だから、いかに争わずに自分の使命を達成するかっていう、そこが難しいところですよ。

そういったところを今のうちから意識してね。例えば、寺本君と考え方が合わない人ってのは、やっぱり当然世の中にいっぱいいると思うけども、そういう人に対してどうしてもこつちが要求しなければいけない時に、どううまく伝えて、どのようにに接して、どのように相手に納得させるか、ということを常に考えながら行動して、喧嘩とか揉め事にならずに自分の要求を相手に聞いてもらえるような、うん、技を身につけてもらえたらいいと思う。

これはやっぱり経験でしかなかなかね、身につくもんじゃないから、そこはちよつとずつちよつとずつ意識だけしておいてもらって、うん、そうするとだんだん年齢上がっていくにつれてやっぱり一定の能力が身に付いてくるから、そこをぜひ実践してみてください。」

教師になるためにはまずコミュニケーション能力を磨く。そして日常で何でも喧嘩で解決をしない。僕の日常を振り返ってみて、まだまだ全然できてないなと深く感じた。社会科は平和を教える目的があるということと、米田先生がいつも穏やかでいることは深く関係しているように思えた。

僕「ありがとうございます。頑張って社会の教師を目指します！」

米田先生「はい、じゃあまあ寺本くん、高一、高二ぐらいになると文系や理系の選択とか本当に二年から三年になると社会の選択とかね、あるいは受験科目の選択とか、国公立大学を目指そうとか、私立大学を目指そうとかそういうものがあると思うので、まあその時も今の気持ちをまだ持っていたら是非私のところに相談しに来てください。より具体的な進路に一致した将来の話ができると思います。」

そうなんだ。もっと具体的な将来の話とかができるんだ。高校生になったら絶対相談しに行ってみよう。

僕「今日はお時間いただきありがとうございました」

米田先生「どういたしまして、こんなんでもいいですか？」

僕「はい！！」

インタビューを終えて

米田先生に「写真を一緒に撮ってもらっていいですか？」と聞くと、写真を撮ってくれた。慌ててセルフタイマーにするのを忘れていて、僕がシャッターを押したので、変な構図になってしまった。

米田先生の話の聞くと社会への愛が溢れていたと思う。社会の教師というものは社会が本当に好きだという人しかできない仕事だと思う。だから米田先生に似合っている。

今回のインタビューを通して僕の教師になりたいという気持ちが一層強くなった。教師という仕事はとても大変なのだけれど、一つのこと達成した時にはとても嬉しいのだ。教師になるための大切なことは二つあった。一つ目はコミュニケーション能力を磨くことだ。これを磨くことで、人との接し方や自分の思いの上手な伝え方などが習得でき、聞き手からも一目置かれるのだという。二つ目は何事も喧嘩で解決しないことだ。社会は平和を教える仕事だ。それを教える教師が喧嘩で解決をしていたら、それは失格だと思う。この二つをこれからも気を付けていきたい。



全てに憧れて

聞き手 西園寺ひな

やすえさんに取材したかった理由

私が魅力的だと感じて取材したいと思った人は、母の姉、白鳥やすえさんだ。私との関係は伯母と姪である。彼女は神奈川県に住んでいて私とはなかなか簡単に会えない。

なぜ私が取材する相手にやすえさんを選ばせてもらったかというと、うまく言葉にできないけれど魅力的だ、とても感じるからだ。とても綺麗でおしゃれでファッションセンスまでも懂れるように感じる。特に深い思い出とかはあまり覚えていないけどとりあえず、私から見たやすえさんの第一印象は氣遣いができる本当に私の理想の大人だった。

最後に会ったのは一昨年の夏休みだ。その時私は小学六年生で受験生だった。祖母の家に帰省した時、ちようどいとも帰省していた。だからやすえさんと会うことができた。もちろん私は受験生だったから勉強をしていたのだが、みんなが遊んでいるのを見るととてもやる気なんか起きなかった。だからと勉強をしているとやすえさんが来てくれて一緒に社会の問題を解いてくれた。

これだけじゃないが他にもやすえさんは手先が器用で手の込んだヘアアレンジをパツとしてくれた

り、私にはじめてネイルを足の爪に塗ってくれたりしたことがとても印象的で嬉しかった。

また、やすえさんが勤めている空港の仕事に私は興味がある。だからやすえさんの仕事についても聞くことにしようと思った。

でも、それだけ魅力的だなと思っていてもなかなか会うことができなかったり、あまり話す機会がなかったりとかで本当はよくやすえさんのことをわかっていない。やすえさんは普段どんなことをしているのかなとか趣味はあるのかなとか詳しく知らないからこそ質問したいことがいっぱいある。だからこの機会にやすえさんのことを知って今までよりもっと仲良くなりたいなど感じた。

取材をお願いする

私が取材をさせてもらうのは遠くに住んでいる伯母である。夏休みは直接会えないと聞いたので母にお願いして母とのLINEでビデオ通話させてもらうことにした。また母とやすえさんとのLINEで、取材相手に選んだ動機の手紙を写真で送ってもらうと、取材を快く許可してくれた。

最近、やすえさんは仕事の部署が変わったらしく忙しいと聞いたので、仕事が終わって時間がありそうな夜にさせてもらうことにした。

取材概要

日時…2024年 8月20日

取材した方…白鳥やすえさん

自分との関係…伯母

場所…ビデオ通話で取材をさせてもらった

取材

会うのは久しぶりでビデオ通話であつても緊張した。

電話をつなぐ前に氷をいっぱい入れた水をたくさん飲んで緊張をほぐしていた。私がお風呂上がりがだったこともあつてとても暑く、緊張やうまくやれるかという心配で焦っていた。私が取材の会場にした場所は家の小さな書斎だったから、夏の夜は蒸し暑く、窓を開けても湿った空気は変わらなかった。だからその小さな書斎に冷房をガンガンにつけて心を落ち着けてから取材の準備をした。

母に電話をつなげてもらつて取材ができるようiPadとスマホを用意して取材に備えた。電話からやすえさんが出るまでは緊張でずっとドキドキしていたけど、久しぶりに話すやすえさんは前と変わらず明るく接してくれた。私は机に向かつてびっしりしていたけど、やすえさんはソファでリラッ

クスした感じで電話に出てくれたから私もリラックスすることができた。少し話して緊張がほぐれたところで取材をさせてもらうことにした。

やすえさんの仕事

私「まず、仕事について聞きたくて」

やすえさん「仕事について、はい！」

私「なんかそういう飛行機関係の仕事に（私は）ちよつと憧れとか興味があつて、でその仕事をしようと思つた理由とありますか？」

やすえさん「ええとね理由はねやつぱり飛行機が好きだった。飛行機に興味があつたし飛行機に乗つたりして旅行をすることとかが好きだったから、まあそれ仕事にできたら楽しいかなつていうのはちよつとありました。なんとなくですなんとなく！」

少し関係ないけど、私はすぐ考えてしまうところがある。最近はそのいう風に思わないようにしているけど、やすえさんは抱え込みすぎずに感覚とかに頼れることがすごいと思ひ、改めてかっこいいと感じた。

私「その仕事したいってちゃんと決めたのはいつぐらいですか？」

やすえさん「なんかね本当こう就職活動するぐらいかな、で」

私「じゃあギリギリでしたか！」

やすえさん「そうそうですね。なんか特に将来の夢とか私はあんまりなくてね。あの最初はソフトウェア会社にいたんだよ。ソフトウェアの開発をしてた！」

私の知らなかったやすえさんの過去が見つけられた。ずっと飛行機の仕事をしているというイメージがあつたからソフトウェアというずっとパソコンに向かってやっているような仕事をしているのは想像しづらかった。

そういう過去があつたことは知らなかったから私は驚きと同時に興味を持ち、前のめりになるようにやすえさんの昔の仕事について聞いた。

私「ソフトウェア？ ソフトウェアってなんですか！」

やすえさん「コンピューターとかのシステムとかを操作してプログラムしたりする仕事！」

私「ええ…大変そう…。どういう感じでソフトウェアの仕事をしてましたか？」

少し間が空いてからやすえさんが昔就いていたソフトウェアの仕事について教えてくれた。

やすえさん「最初はH社にいた。H社でソフトウェアの開発っていろんなシステムを作って、S
Eって言って、システムエンジニアってわかる？ システムエンジニア！ システムエンジニアをねや
ってた20年ぐらい前。それで、それやってただけですけどやめちゃった。」

私「なんでですか！」

やすえさん「システムエンジニアは当時きつい仕事だったの。残業時間が多くて休日出勤が多くて
100時間は残業します、とかそういうったのが当たり前でそれがすごきつかったので他の仕事を探
し始めて。で、もともと飛行機が好きだったからとかそういうった意味で今のF社に転職して」

大変な過去があったということを初めて知り、大変なことを乗り越えてそれをいい経験として取り
入れることも大切なんだとわかった。

私「F社っていう会社なんですネ！（今就いている仕事が）いつぐらいに転職したんですか？」
やすえさん「ええとね、大学卒業して就職して二年で最初の会社を辞めて三年目にF社に転職しま
した。」

新しい仕事

私「その、一年でなんか大学でそういう資格とか取ってたんですか？」

やすえさん「もともとね特にね資格とかは取ってないです」

私「いないんですか！」

やすえさん「えっとねそうですね。私がやってるような総合職というか企画系の職は就職するタイミングで資格が必要ってわけではないですね。資格が必要なのはまあパイロットとかそういう人は資格を持つてはいる人もいるけど、会社に入ってから資格を取るっていう人もいたりするので持つてればよいかもしれませんけど持つてなくても就職はできるかな。うちの会社は。」

私「なんかそういう飛行機とかの仕事って英語とか、いっぱい外国語必要だと思うんですけど、英語得意だったんですか？」

やすえさん「えっとね英語は会社に就職してからすごい必要に迫られて勉強することになります。笑 えっとやっぱり入社試験の時に英語を今はあるのかもしれないけど当時は英検二級ですとか書いてたら入れた。ちよっと今はみんな英語が得意な人が周りもやっぱ多いですね。みんな英語上手ですね。」

私は飛行機とか空港の仕事に携わりたいと思っていただけで英語が得意ではない。だから少しやりたいうという気持ちを強くさせてもらった。最初は得意じゃなくても後から学んでいけばいいのだとわかり、目指そうと強く思えた。

私「私のお母さんからやすえさんは学生のときに賢かったって聞いたんですけどなんかそういう英語が得意になる勉強法とかってありますか？」

やすえさん「本当、英語いまだにえっと苦労している：笑 一番頑張ってる毎日のようにこうインプットしててもなかなかこうそれが自分でアウトプットできないなって思いながら。うん。やってるんだけどもう何年やってるんだろいうなあっていう感じで。でもコロナになってあんまり海外とか行けなくなってるメールだったりとかオンラインで会議をしたりすることもあるけどちょっと鈍ってしまいましたね。笑 まあ、インプットしてアウトプットすることが大事な。英語は特に！」

私「じゃあとりあえず実践してみることですね！」

やすえさん「そうですね！」

私「なるほど。じゃあそういう仕事って英語がめっちゃ得意じゃなくても就けるには就けるんですか？」

やすえさん「大丈夫大丈夫です！ えっと特にあのやっぱり海外とのやり取りは必須になってくる。飛行機は日本で作っているものではないから海外であのアメリカとかヨーロッパで作ってる飛行機を使ってる、部品とかも大体海外からえっと取り寄せたりするし、すべてあの飛行機のマニュアルは英語になっちゃうので英語は必要なんだけど。それ以外にもいろんな職種がありまして国内で空港のカウンターだったりとか、会社の総務だったり人事だったりとかいろんな人がいるので逆にそういう人は日本語が上手じゃないといけないなあって思います！ はい！」

私「じゃあなんかその飛行機の仕事やって一番なんか大変だったって思うことはありますか？」
やすえさん「はいもう大変だったことはね、終わるとねもう忘れちゃうことが多いんだけど。笑
あの、私がやってる企画系の仕事は新しい飛行機を導入したりする企画をやっていて、今度また新しい機種を導入するの。今その準備が忙しいんだけどね。十年前ぐらいにね、あの、エアバスっていう日本で初めて入れるっていうことになったの。それを製造してるヨーロッパに行ったりして、向こうで飛行機の試験をしたりして頑張って日本に飛行機持って帰ってきました！会社がうまくいかなくて飛行機を売り飛ばすことになりましてその新しい機種は今いません：悲しかったです。っていうごめんなんかいいエピソードがなくて。」

初めて見る、やすえさんが悲しそうな表情をしていた。それほど頑張って努力して導入しようとしたのに努力が消えてしまったような出来事で相当ショックだったのだろう。

私「なんか苦しい思いして頑張ったけど頑張ったものがなくなっちゃったってことですね」

やすえさん「そうそうなの。それがすごい大きくて。いい飛行機だったんだけど、やっぱりいい状態を維持したりメンテナンスしたりしながら飛ばして行くのにお金もかかるし。なんかえっと難しいねってなって。それまで持ってた、いつもあの慣れた飛行機の型式機種でやっていこう、ちっちゃい方でやっていこうみたいになかったかな」

私「なるほど、」

優しさの秘訣

私「なんかちよっと話変わっちゃうんですけどなんかやすえさんっていつもなんかあの自分のイメージではずっと優しい感じがあるんです！それで、なんでそんな優しくできるのかなって」

やすえさん「なかなか我が家では言ってもらえないんですけども笑えっと多分外ではそんな風にしてるのかな：笑 本当はねそんなに優しくなくて喧嘩してるんですけど」

ずっとニコニコしているイメージだったがそう言う一面にホッとした。自分も喧嘩とかよくしちゃうのでそういう面で同じだということが安心して自分もコントロールできるようになるうと思った。

私「全然そのなんか優しいんですけど！優しいのに加えて：なんか穏やかというか！きつく怒らなさそうな感じがあって。むかついた時とかにはどう押さえたらいいいんかなって」

私が悩んでいることについて聞いてみた。やすえさんは少し考えてくれた。

やすえさん「えっとちよっと言ってしまった後にすぐ後悔するタイプなので笑なんか10秒待っ

てみようって思うときはある。本当、S（やすえさんの息子さん）とかにイラついてちょっと言うこと聞かないことが多いから10秒待って何もしてなかったら怒る！ちよつとこういう自分の気持ちのマネジメントはまだまだ不十分だなんて思ってます。待つてみるのが大切ってことですね。ちよつとね待つようにします。」

自分も同じ、後から後悔してしまうタイプだから思ったことに感情的にならず、一度落ち着くために待つことが大事だと気づかしてくれた。

憧れポイント

私「あの（私の）お母さんからなんかやすえさんはなんでも勉強もできるしみたいな聞いたことがあって。えつと学生の時はどんな生活してたんですか？」

やすえさん「あ学生の時はね多分こう喜子（私の母）と比べるとのんびりと学校に行ってたかもしれない。はい今から高校生ぐらい振り返ると勉強はそんなに嫌いではなかったの…あ、H（やすえさんの息子さん）おかえり。Hが帰ってきました。ひなちゃんですこれ。すみませんすみません。脱線しました。」

私「笑」

こう言う面白いところも好きだなんて思った。真面目な時は真面目、楽しむときは楽しむ、こういうメリハリがはつきりつけられるように私もなりたいたいと感じた。

やすえさん「あのあんまり何も考えてない高校生だったし大学生になってもあんまり何も考えてなかったかなでも」

私「勉強好きって頑張ればのびせるじゃないですか。勉強好きだったら。でも私、好きじゃなくてやる気起きたりしにくいんですね……。嫌いじゃなかったから普通に頑張ってたはずなのに笑。なんか勉強好きってどういう感じですか？」

やすえさん「たしかにたしかに笑やられてるっていう感じではなくこうできるようになったり問題が解けたりとか。あ、歴史とかだったらちよつと新しい出来事を知ると面白いなあっていう！ただそれだけだったと思うけどね笑 面倒くさい時もちろんあるし、ちよつと意味わかんないなこれっていうのもあったけど、トータル的にはなんかこう年の近いY(私の母)とかもいたからまあえっと同じタイミングで勉強したりとか、テスト前とかしたのも良かったと思う。私が三年生だとYが一年生っていう感じでテストのタイミングも同じだったし。」

私もせっかく姉がいるのだから、モチベーション上げること繋がるなら一緒にやろうかな、と思った。やっぱり原動力は必要だなと思う。

私「じゃあなんか一緒になんかできる人がいたらやる気もちよつと上がるみたいな事ですか？」

やすえさん「そういう素晴らしい影響もあったと思う。えつとでも私がサボってYには悪い影響を与えた時もあったかもしれない…笑」

サボるなんてこともあったんだ！と思った。時には一生懸命頑張って勉強して、時にはちよつとサボる。なんて自分をうまくコントロールすることができたらいんだと気付かされた。これから意識して勉強をしてみよう！と決意した。

私「なんか最近自分でダラダラしちゃってるなって時はあるんですけどなんかそういう時ってなんかやってますか？」

やすえさん「えつとねだらだらしちゃう。うんすごいしちゃう笑けどそういう時間もちよつと必要かなと思ってダラダラするのも許してあげるようにしてます！」

私「いいですね！笑えつと、完璧なイメージがあるんですけど失敗談とかってありますか？」

やすえさん「失敗談…えつとね若気の至りみたいな笑なんかねいろいろあるな。なんだろう。H（やすえさんの息子さん）がえつと、部活でまあ水筒にいっぱい氷を入れて行かなきゃいけないのに氷を作ってなかったとか。ヤバイ明日氷がないっていうこととか地味に失敗してますね 笑色々あります

ぎてどうぞそんな感じですかね！」

私「じゃあたまにはそういう失敗があつてうまくいってるからいいってことですね！」

やすえさん「そうそう。失敗は細かいことから大きなことまでいっぱいありますね笑 あの先週1週間S(やすえさんの息子さん)が島根と熊本に行つて、うちにいなかったの、その間夏休みの育てるホウセンカの水やりをたのまれたの。でも私が一切水やりしてなかったから枯れちゃったりいう失敗も…あ、ごめんSって今ひたすら謝ってます」

私「そんなことがあつたんですね笑」

やっぱり面白いところもたくさんある。すべて完璧じゃなくて少しこういうところがあるのがいいくらいなんだと思う。

やすえさんがくれたメッセージ

私「最後になるんですけど、これからに向けて私にメッセージとかもらえますか。」

やすえさん「はい！あのまだ中学二年生だね。ひなちゃんねしつかりしすぎててびっくりつていうかもうこれから大人になって大きくなって行くのがとても楽しみです。笑もし高校卒業して東京に行きたいとかそういう気持ち但至少もあつたら、すぐ迎えに行くからホテルとか手配しておばちゃん受験会場とかまでついていくから！いろいろな選択肢の一つとして考えていいと思います。は

いもうひなちゃんもこのままで大きくなっていけばとても素敵な大人になれると思うので本当楽しみです。」

私「ありがとうございます！ また会って話したいですー！」

やすえさん「ありがとね。また会おうねー。」

取材を終えて

やすえさんと二人きりで話したことは初めてで緊張もしたけど憧れを抱いていたやすえさんのことをよく知ることができたいい機会になったと思う。やすえさんは優しさと面白さを兼ねそろえて、自分の話も親身になってきいてくれる。新たにやすえさんの魅力を発見できて嬉しかったし、今度会ったときはもっと仲良くできるといいなと思う。

今回はビデオ通話だったから一緒に写真を撮ることはできなかったけど今度直接会えたら一緒に写真を撮ってもらおうと決めた。また、ちゃんとお礼を言いたい。

やすえさんの魅力を見つけさしてもらったからそれを見習って自分もいろんな人に気を遣えて優しく面白い尊敬されるような大人になろうと思う。



気遣いができるとは

聞き手 一ノ瀬くるみ

取材の動機

今回私が取材相手に選んだのは、いとこのみのりちゃんだ。

みのりちゃんはとても優しく、正月におばあちゃんの家に行くとき、おせちを食べることより、みのりちゃんに会えることを楽しみにしていたぐらい、私はみのりちゃんになつていて、同時にみのりちゃんのいいところをたくさん知っていた。

例えば、みのりちゃんは本当に絵が上手で、正月には私のはまっているアニメの中の、好きなキャラクターを描いてもらうというのが定番だった。でも頼むのも少し恥ずかしく、毎回私ほもじもじしていた。そんな私の気持ちを分かってくれたのか分からないけど、みのりちゃんはいつも自分から「絵、描こっか?」と聞いてきてくれた。そうすると私の顔がぱあっと明るくなったいたらしく、みのりちゃんが笑ってくれた。つぐつぐ私は分かりやすい性格なんだなあと思う。

また、何度かみのりちゃんにLINEで描いてほしいものを伝えたときのことだ。何も言わずすぐに描いてその写真を送ってもらった。でもその時は絶賛みのりちゃんの受験期だった。私はまだその時小さかったので受験だったのに気も遣えず、わがままを言ってしまった。だから母がラインで忙しいのにごめんねーと送るとみのりちゃんからは勉強の休憩になって楽しいから大丈夫だと送られてき

た。本当はそれが負担になっていたんじゃないかと今では反省しているが、気を遣わせないようにしている大人っぽい優しさがみのりちゃんの魅力だと思った。

また、昔にみのりちゃんが巫女さんのバイトをしていた神社に遊びに行った時も、優しく接してくれ写真も撮ってくれた。

取材概要

日時…2024年8月8日 6時30分～8時00分

場所…コメダ珈琲 K店

取材した方…M高校 社会科教師 吹奏楽部顧問 一ノ瀬みのりさん

自分との関係…いところ

インタビューが始まるまで

母に取材のことを相談すると、取材をさせてもらう側だからと、母にみのりちゃんと私を取材場所まで送ってもらうことになった。

みのりちゃんは車に乗ってきた時、白とジーンズと黒のカバンを身につけて、髪の高さもあまり変わっておらずあー、みのりちゃんだなと感じた。白い服がとても似合っていて相変わらず美人だった。それと共に前に会った時より、大人っぽさを感じられた。

しばらく三人で話していると、母が明るい性格なので車の中で話を広げてくれて、少し私の緊張を解いてくれた。部活や仕事、世間話など色んな話が楽しかった。

そして車を降りると、さつき少し解けたはずの緊張がまた追い寄せてきた。もう二人きりで母に頼ることは出来ないと思うと、少し冷や汗もかいた。

店に入ったらまず、総合学習の先生から渡されていた「添え状」を読んでもらった。授業と課題の内容、取材相手への挨拶が書いてある。みのりちゃんも少し恥ずかしそうだったが、じっくり読んでくれ、「すごいなあ。こんな宿題あるんやなあ。」と感心していた。そうすると私の緊張が伝わってしまったのか分からないけれど「なんか飲み物飲む？」と聞いてくれた。そして飲むものが決まり、みのりちゃんが注文してくれた。そして録音の許可を取り、いよいよインタビューが始まった。

先生になるまで

私は仕事と部活動のことについて質問をしようと思っていたので、なぜ社会の先生を目指そうと思ったかについて尋ねることにした。私も実は社会の先生になりたいと思っているので、色んなことを聞けたら良いなと思っていた。

私「みのりちゃんはなんで社会の先生を目指そうと思ったんですか？」

みのりちゃん「んーそうやなあ。結構先生になろうと思ったのは高校生の方で、何しうか

迷ってる時学校の先生を見てこれかなってなったんよなあ。めっちゃ思いつきやんな（笑）それで、まず理系の先生か文系の先生で悩んで、理系は数学とか物理とか難しいから文系にしようってなつて、英語国語社会やったら社会が得意かなってなったからかなあ。」

私は、みのりちゃんは小さいころから先生を目指していたんだと思うんだけど、結構後の方に、先生を目指すことになったのが意外だった。それに結構思いつきで決めたんだということがしつかりしているみのりちゃんには意外だった。

それに結構みのりちゃんが取材に対してノリノリで、たくさん喋ってくれてうれしかった。

私「じゃあその社会の先生を目指そうってなつてから社会の先生になるまでの過程で大変なことってありましたか？」

みのりちゃん「やっぱり受験かな。国公立大学に行くには文系科目以外も勉強しなあかんからそれがめっちゃ大変やったなあ。でも無事国公立大学に行くことができて、大学に入ってからでも資格とか取らなあなくて、大変っちゃ大変やったけど、受験に比べたらだいぶマシやったよ！（笑）で、その資格の取り方は、社会をメインに勉強するか、先生っていう仕事について重点的に学ぶか決められて、私は先生っていう仕事についての方にしたんやけど、自分に合った勉強をできてよかったよ！」

先生になってから

先生になるまで経験したことについて聞かせてもらったので、次は先生になってからのことについて尋ねたいと思う。

私「先生になってから大変だったことはなんですか？」

みのりちゃん「授業を教えるだけじゃダメなことかな。授業の予習、準備とかテスト作りとかもしなあかんし、それだけじゃなく進路とかの担当があつてそんな仕事もあるし、担任もしたり、部活の顧問もしたりやることは結構多いなあ。あと大変というかつらいこととかわからへんけど、注意をすること、あんまり怒りすぎると嫌われてしまうかもしれないへんやん？ でも校則は守らなあかんから注意するんやけど、それもちよつと嫌やつたりするなあ。もちろん怒られる側もいややと思うけど、先生たちも好きで注意してるわけではないんよなあ。それをみんなにわかつてほしなあ。」

私は結構リボンがゆるかったりして注意してもらったことがあつて、その時は正直面倒くさがつてしまつていて、でもそんな注意を好きでしているわけではなく、私のためにしてくれているということを知り、考えを改めることができた。

私「なるほど。逆に先生になって良かったなーと思うことはありませんか？」

みのりちゃん「大変な分自分で選んだ仕事やからやりがいもあるよ！それに私は進路担当やから色んな生徒と進路についての話をするんやけど、色んな話をできて楽しいし、頼りにしてもらえてるって思えてくるし嬉しいなあ。あと仲いい先生ができたり自分からなりたいてって思ってた仕事やから、やっぱり楽しい！」

私は書いた通り先生になりたいと思っていたからたくさんさんの興味のある話を聞くことができた。先生という仕事は簡単になれるものじゃなく、たくさん勉強して、先生になることができてからも、色々しなければいけないということを知った。そんなことを聞いても、先生をやっている楽しいこともあるし、やりがいもあると思うから改めて先生になりたいと思った。そのために色んなことを調べたり、さばりがちだった勉強もするようにしようと思った。

しかしこの後、途中で新しくできたご飯屋についての話に急に飛んでしまった。でもみのりちゃんが「あかんあかん！こんなレポートに書かれへんよなごめん！！」と言ってくれた。だけどそんな雑談も楽しかった。

吹奏楽について

みのりちゃんは小学校、中学校、高校、大学でトロンボーンを吹いていて、今では吹奏楽部の顧問

の先生をしているからそのことについて聞いてみることにした。

私「何でトロンボーンを始めようと思ったんですか？」

みのりちゃん「お母さんに勧められたからかな。小学校の時、特にこれといった特技がなくてお母さんにやってみたら？ って言われて体験してみてん。楽器は身長高めで手足長かったからトロンボーンなって言われてトロンボーンになってん。あんま身長とか関係ないと思うんやけどなあ。でも今になったらほんまにトロンボーンでよかったなって思ってるなあ。」

私はこういう楽器の決め方もあるんだなと驚いたが、みのりちゃんがトロンボーンを吹いているところを想像してみると、絶対似合うだろうなと思った。

私「吹奏楽部の顧問の先生をしていて特に大変なことと、していてよかったなーって思うことを教えて欲しいです。」

みのりちゃん「そうやなあ。大変なことはオフが少ないとかより、辛いことみたいになっちゃうねんけど、コンクールのメンバーを選ぶところやなあ。うちの学校は三年生は絶対出れるとかは無くて、上手い人から出る感じで、うちの学校は朝も夜も自主練あるねんけど、両方とも行つてめっちゃ努力してる子とかでも出れなかったりするねん。そこが1番辛かったり大変なところやなあ。自分や

ったら絶対悔しいし、そんなこと考えてたならもっと辛くなるなあ。でも出れなかった子にはお守り作ってもらったりしてるよ！他にも色んなサポートしてくれててめちゃくちゃ先生としても助かるなあ。

次によかったなーと思う時はやっぱり結果が出せた時かなあ。でも結果が出されへんくても、近くでみんなを見てる分どんだけ努力してるか伝わってくるし後悔せんようにできてたら良いと思ってる！後悔しちゃうってもみんなの努力は知ってるし！それに、私も楽器が好きで、好きなことを仕事にできてるから楽しいなあ。」

私はこの話を聞き、顧問の先生たちはたくさんのことを私たちのために考えて、行動してくれていることを改めて感じ、改めて感謝の言葉を伝えようと思った。

「絵」について

最初に書いた通り、私は昔みのりちゃんに絵を描いてもらっていた。だからどうやってそんなに絵が上手くなったのか聞いてみることにした。

私「なんでそんなに絵が上手くなったんですか？」

みのりちゃん「そうやなあ。そんなにうまくはないと思うねんけど、絵描くのがめっちゃ好きで、

とにかく毎日書いてたなあ。楽しかったし懐かしいわあ。あれなんか私おばさんみたい？ まだ全然二十代やのに（笑）でも今は描いてなさすぎて多分めっちゃ下手なってると思うわー」

そんな風に努力していたみのりちゃんの姿がぱっと思いついた。みのりちゃんぽいなあと思った。

お別れ寸前

色んなことを話していて、時計をちらっと見てみるともう八時になっていた。お互い仕事や学校もあるし、そろそろ終わろうかという話になった。

そうしていて帰る準備をしていると、みのりちゃんが「くるみちゃん、私なんか取材の相手を選んでくれてありがとう！ 全然いいこと言えてないけど、魅力的やと思ってもらってたなんて一回も思ったことなかったし、取材されるのも人生初やから、LINE来た時最高にうれしかったわ！ これから友達とかに自慢しよーっと（笑）ありがとう！」

私はそのまんまその言葉を返したかった。全然ない休みを取材のために使ってくれ、たくさんのお話をしてくれた。私もお礼を言って、迎えもお母さんが来てくれたので、一緒に車に乗った。

みのりちゃんの家に着くと、お礼にと家の近くの美味しいパン屋さんのメロンパンを渡した。私はメロンパンがパンの中で一番好きで、家族には何が何でも渡さないが、みのりちゃんには躊躇なく渡

することができた。みのりちゃんは遠慮してくれていたが、母の圧がすごくてしばらく経つと受け取ってくれた。

みのりちゃんは車から降りるとき、母に「送迎ありがとうございます。さようなら。」と言い、私にも「バイバイッ」と手を振りながら言ってくれた。とても可愛かった。

取材を終えて

取材と今までのエピソードを通じてわかったみのりちゃんの「魅力」は、「気遣いができる」ところだと思う。私がまだ小さい頃はそんなみのりちゃんの魅力に気づけていなかったが、今になると色々のりちゃんの優しさが滲み出ていることがたくさん思いだされる。しかし「気遣いができる」ということに対して、そんなの普通やんとか、当たり前やんとか思う人もいるかもしれない。でもそんな普通なことが当たり前にできるってことがとてもかっこいいと思った。

でも私は周りを見れていないことが多いから、全然みのりちゃんにはほど遠い。取材の時、緊張のしすぎでみのりちゃんに「気遣い」でなくなんだか気まずくて「気を遣わせてしまう」こともあった。「気遣い」と「気を遣う」という言葉も似てるようでなんだか違うと思った。でもみのりちゃんのように「何気なく気遣いができる、気を配ることができる人」になれたら、このような後悔から前に進み少し自信を持てそうだった。

また、次にみのりちゃんに会ったときは下手であるけれども、私からみのりちゃんに今回撮ったツ

ーショットを絵に書いてみて、お礼としてプレゼントしようと思った。

記念撮影

最後に「写真って撮らせてもらっても大丈夫ですか？」と聞くと、「全然大丈夫やで撮ろー」と言ってくれた。私はいいい思いい出を作ることができたので、取材とか関係なしにみのりちゃんと写真を撮ることができてよかったなと思った。



憧れの先輩を目指して

聞き手 柴崎さな

取材の動機

私には高校1年にとっても魅力的な先輩がいる。中学から吹奏楽部に入っていて、今年で4年目となる竹畑光輝先輩だ。今年の三月に中学を卒業してしまったが、クラリネットという楽器を担当しており、中学3年生の時はセクシヨンリーダー（通称セクリ）という役割を担っていた。

セクリは投票ではなく指名制で決まる。そして木管楽器や金管楽器、低音楽器で分かれて練習をする際に細かい箇所を注意したり、全体で基礎合奏をするときには部員の前で指揮をしたり全体の音色を確認したりなど、他にもたくさんあるが、主に音楽をまとめる役目がある。つまり「聴く」ことが必須なのだ。

しかし、光輝先輩は片耳が難聴のため、音を均等に聴くことが難しかった。そんな中、夏のコンクールに向けてセクシヨン内はもちろん、全体をもまとめて私たちを導いてくださった姿がとてもかっこよくて、私は尊敬と憧れの気持ちでいっぱいだった。

それからこれは吹奏楽部で夏合宿に行ったときのことだが、1日目の夜、私と他3人が部屋でくつろいでいたところ、ゴキブリが現れた。他3人はすぐ部屋の外へ逃げて行ったが、少し遅れた私はそれを踏んでしまった。足が気持ち悪かったし、まだそれも動いていて気持ち悪かった。私たちの悲鳴

を聞かれていたのか、すぐに光輝先輩が部屋に駆けつけてくれた。そしてなんと生きているそれをアイッシュで掴んで捨ててくれたのだ。私にはそんな勇氣は出せないのです、光輝先輩を見てとても感謝しているし、勇敢な人だなと思った。

また、冬にはアンサンブルコンテスト（略してアンコン）があった。アンコンにその年、1年生の3人のみで出場をした私たちだったが、練習が行き詰っていた。他にも出場するグループはあって顧問の先生方も忙しく、指導してくださる人がいなくて困っていた。すると、光輝先輩が突然「録音したやつ送ってくれたら改善点とか教えてあげられるで」と、言ってくれた。そして翌日、改善点がびっしり書かれたルーズリーフをくださった。先輩は私たちが出場するものより難易度の高いアンコンに出る予定で私たちより忙しいはずだったのにそう言うてくださった先輩の優しさに私は感謝しきれなかった。

そんな光輝先輩に今回は、セクリになったときどう思ったのか、いざというときにどうすれば勇氣が出せるのか、なぜそんなに周りに気を遣うことができるのか、その他たくさんのことを取材したいと思う。

取材概要

日時…2024年7月22日（月）17時～19時
場所…スターバックス K店

取材した方…竹畑光輝さん

自分との関係…部活の先輩

取材が始まるまで

待ち合わせ場所はK駅。私は普段近鉄電車を使っているので、慣れない南海電車に少し緊張した。移動中にスマホを確認すると、光輝先輩のお母さんが車で駅からスタバまで送ってくださるようになったと、光輝先輩から連絡が来ていた。この日はとても暑かったので送ってくださるのは本当に有難いことだったが、同時に申し訳なかった。K駅に着くと改札を出たところで光輝先輩が待ってくれていた。おそらくプライベートで会うのは初めてだ。私が挨拶をすると先輩は笑顔で返してくれた。それから少し雑談をしているとき、「今日のスタバ奢るで」と言われて私は慌てた。ものすごく申し訳なかったが、先輩は先輩のお母さんに私の分を奢るように言われたらしく、奢らせてしまった。同じくお母さんに先輩の分を奢るように言われていた私は、「帰ったらお母さんに怒られるのかな」とも思いつつも、ありがたくキャラメルフラペチーノを受け取り、席についた。

私「改めまして、今日は忙しい中ありがとうございます。取材の動機レポートと、先生からの添え状を渡しておきますね。」

そう言って、総合学習の先生からの「添え状」と取材動機を書いた原稿が入った茶封筒を渡した。

先輩「ありがとう。また読んどくね。」

こうして取材を始めたわけだが、実はこのときiPadの文字起こし機能が上手く起動せず、私はこの後苦労することになる。

入部動機

私「最初にですが、光輝先輩はバレエ部に入られる予定でしたよね。同じく73期の梨音先輩に声をかけられたことがきっかけで吹奏楽部に入部されたそうですが、R先輩とはどれくらい仲が良かったのですか？例えば小学校一緒だったみたいなの」

耳にハンデを負う光輝先輩がなぜ吹奏楽部に入部しようとしたのか気になったので、まずその経緯をきいてみた。

先輩「いや、そういうわけじゃなくて、最初Rとはクラス同じやって、入学したら証明写真撮るやん？そのとき男女別の出席番号順で並んで、そしたら後ろにRがおったから他よりは仲良くなっ

たみたいな感じかな。そのうち話してたら吹奏楽誘われたっていうのもあるし、バレエ部に友達がおるからっていうのもあってバレエ部か吹奏楽部か迷ってたんやけど、吹部のその年の入部希望者が一桁とかで結構少なかったんよね。それでやばいなって思ってた、それやったら吹奏楽やろうかなって思ってた。それとバレエ部は学年で20人くらいいたからその中でやっていけるのか不安になったからっていうのもありました笑。」

友達に誘われたのはともかく、人数が少ないから入部するという光輝先輩の優しさに私は尊敬の念を抱いた。

私「そうだったんですね！じゃあ音楽経験とかは…」

先輩「全くないです笑。あと73期は元からピアノとか楽器やってたって人結構いたっていうのもあって最初は本当にやっていけるか不安でした。吹奏楽入ったきつかけがもう一個あって、もう女バレと吹奏楽で迷うぐらいやったらどっちも入るのやめようかなって思ってたんよ。そしたら当時の学年主任のF先生に、『部活入ってた子の方がやっぱり体力付くし、気持ち的に成長する部分も大きいからすごい良い経験になるのと、大学受験ちょっと有利やで。』って言われて、それなら入ろうって思いました。」

私「じゃあ吹部に入った理由は結構周りからの影響が多いんですね！あと部活でそんなにも得ら

れるものがあるのは驚きました。」

先輩「懐かしいな笑」

ここでR先輩や、F先生に声をかけられていなかったら、光輝先輩と出会うこともなかったのかなと思うと、今取材できているのは本当に奇跡だなと感じた。

入部してから

私「じゃあ光輝先輩が吹奏楽部に入ってから話に移りたいと思います。光輝先輩は右耳が難聴だとおっしゃっていましたよね。音楽する上で『聴く』ことってすごく大事だと思うんですけど、そういうハンデを負っている中でストレス感じたことってありますか？」

先輩「ストレスか……。実はすっごくあって、合奏するときなんやけど、合奏ってアンサンブルの拡張版やと私は思ってた、アンサンブルするには周りの音聞いてピッチとか和音を作っていけないとあかんやん？ けどその音が私は聞こえづらいから誰の音を聞けば良いのか全然わからなかったし、なんなら自分が吹いてる音でさえも聞こえづらかったんよね。それで1年生の保護者見学会の練習のときそのことをOGの先輩に相談したら、『でもそれはしゃあないから頑張って』って言われちゃってすごいショック受けたのよね。それで、こんなんではんまにやっていけるんかなってそのときすごく不安でした。」

私「右も左もわからない入部したての時にそう言われちゃうと先行き不安になりますよね…」

先輩「あと片耳難聴の特徴として、音がどこから鳴ってるのかわからなくて、その方向からの音が聞こえづらい。めっちゃめっちゃ遠くから聞こえる。1キロ先？ 1キロ先は盛っちゃったけど、小さく聞こえるみたいなの？ それプラス自分の音でかき消されるからアンサンブルはやりづらかったし、すごいストレス感じてた。」

私「もう私が思ってた以上につらい思いをされてたり、たくさん苦労されてるって知ってその中で3年間も聞われてたんだなって思うと本当に尊敬します。」

私は吹奏楽を始めてからの一年とちょっとで、音楽をするのに聴くことは本当に重要だなと感じたので、もし自分がそうだったら吹奏楽どころか音楽に携わることさえ避けて、嫌になっていただろうなと思う。だからこそだ。その中で必死に食らいついていった光輝先輩が本当にすごい。

先輩「ありがとうございます笑。自分でもびっくりしてます笑。」

セクリに選ばれたとき

私「それからしばらく経った2年生で、73期の皆さんの中でも運営が決まり始めると思うんですが、部長は立候補制なのに対してセクリは指名制でしたよね。セクリに選ばれたときどう思いました

か？」

先輩「実は私部長選挙で落ちたんだよね。それで落ちた後すぐに木管のセクリって言われて、え、気まずみみたいな笑。そのなんかRだけ受かって副部長になって、うちだけそういうことになって仲違いとかあってギスギスしてて、運営になったとき気まずくならんかなって、ちよつと不安に思ってたよね。で私とRとSちゃんが普段仲良くしてるんやけど、Sちゃんも低音のセクリになったから、3人とも運営ならまあいっかってなったのが一つ。

あともう一個は音楽経験とかないのに、なんで自分が選ばれたんやろっていう、ちよつと、はてな？ 笑。それでY先生になんでなんですかって聞いたたら、私たち中1のとき夏のコンクール出れてなくて、2年生で初めてのコンクールや！ ってなって嬉しくてすごい燃えてたんよね。それで自分にできることをどんどんやっていこうと思って、練習の音源とプロの音源聴き比べたりして2年生やのに注意点とかをどんどん研究してて笑。それを一回報告したことがあるんよね。多分それで評価されたのかな、『お前には分析する能力があるよ。セクリやれ。』って言われました笑。」

私「光輝先輩が部長になりたがっていたのは初めて知りました！ なんで部長やりたかったんですか？」

先輩「なんか当時はみんなをまとめたかったんよね。なんか今の吹部じゃコンクールとかは絶対無理だろうなと思って。何がだめだったかは申し訳ないけど覚えてないんやけど、より良い部活にしたかったのと、部活に一生懸命で部活のためならなんでもしたかったから、たぶんその衝動で部長選挙

に出たんやと思います。結局落ちちゃったけどね笑。やっぱ部長ってかっこいいやん？」

部活のために一生懸命なのが、さすが運営の人だなと思った。今思えば光輝先輩が部長をやっているとおかしくない。

私「めっちゃわかります。運営とか部長めっちゃ懂れます笑」

先輩「72期とか71期見てるとやっぱり、いいな！ かっこいい！ みんなに頼られてる！ 私もやってみたい！ と思って立候補しました。」

私「最初先輩は部長に立候補されましたけど、セクリになることは考えてなかったんですか？」

先輩「実は全く考えてなくて笑笑。セクリって上手い人になるっていう風習があって、自分はそんなに技術ないからどうせ無理やと思ってましたね。」

先輩はそう言っているが、私の知っている限り、光輝先輩はクラリネットがとても上手だ。

私「なるほど、技術だけじゃないんですね！ じゃあそのあとセクリを実際にやってみてどうでしたか？」

先輩「なんか基礎合奏してる時とか最初は、これ言っているのかな、言ったら嫌われそうっていう

のを気にしてビクビクしながらやって、今までの歴代の先輩みたいにできるだろうかみたいな不安がめっちゃ多かったです。けど、ビクビクしてもみんなの合奏よくなれへんし私が言わないで誰が言うんだという謎理論を作って恐れずに言った方が少しでもみんなのためになるって思い始めてそれから楽しんでやってみました笑。」

40人くらいの人の前で何か発言することは本当に怖いだろうと思う。私は日番の教室礼拝ですら少し緊張するので、来年3年生になるのに、こんなのでは全然ダメだなと思った。

私「そう思えるのめっちゃカッコいいですね！セクリに限らず運営の人たちってやっぱり周りにどう思われるか気にしちゃいますか？」

先輩「それセクリの中でもめっちゃその話してて。部長・副部長と会議して、これ言ったら絶対やばいよな、嫌われそうっていうのをよく言っていました。やっぱり人の上に立つのって最初すごい憧れるけど、なつてからの問題とか大変さとかあるんよ。メンタルの問題とかすごい出てくるから、それにどう立ち向かっていくかで運営の良さとか部活の良さが変わっていくんだなって実感しました。」

先輩には言えなかったが、73期の運営はすごく良かったと思う。

私「光輝先輩にはどういう部活が理想ですか？」

先輩「私の経験でだと、学年とか関係なくみんなが意見を言い合えるときが一番良かったかな。あと、合奏のときにどこかのパートだけが浮いてるとかなく音がまとまってたらいいなっていうのもある。音も、心も、一つに？笑笑」

名言を言った先輩は少しドヤつといていたが、本当にその名言は大事なことだと思う。

私「おー！　そうなるように頑張ります！　笑」

先輩「頑張ってください　笑」

3年生になったら

先輩「さなちゃんは運営選挙出たりするの？」

私「実はこれ最後にお話ししようと思ってたんですけど、実はセクリをやりたいと思ってまして…」

先輩「ええ！　まじで？　頑張つて！　部長にはならへんの？」

私「部長も考えてみたんですけど、自分より適してる人が結構いてその人たちに任せた方がいいのかなって思ってます。けど、セクリは光輝先輩に憧れてどうしてもやりたくて…。セクリは選挙じ

やなくて指名じゃないですか。こんなの聞くことじゃないかも知れないんですけど、どうやったらセクリになれますか？」

先輩「例えばちょっと怖いかもだけど練習で思ったこととかを先輩にもちゃんと言うっていう勇気を今のうちに育てておくとか？これになれる保証は全くないけどそのやっぱり自分なりに音楽を研究して、疑問に思ったことはすぐにY先生に質問しに行ったり自分から事前にちよつとでも調べたりするのがいいかも。」

少し怖いのが、元セクリの光輝先輩からの貴重な意見としてこれは絶対にやらなければならないことだと思ふ。

私「なるほど、ありがとうございます！」

先輩「あと私の代の金管セクリのMさんとは私そんなに仲良いわけじゃなくて笑。最初多分連携取れないんじゃないかっていうのがありました。」

私「運営でもメンバー選ぴとかでチームワークが変わったりするんですか？」

先輩「結構変わると思ふ。73期の運営は男女比が4対2になって分かれてたから、正直歴代で一番連携取れてなかったんよね。だからメンバーは大事な人やけど誰かが勇気を出せば次第に絡み合っていく感じがする。あとは時間が解決してくれるよ笑。」

私の代は73期よりも男子が少ないので、連携が取れないかもしれないと少し思ったが、先輩を信じて頑張ろうと思う。

私「連携取れないようには見えなかったです！あとそのことは来年運営になれば参考にさせていただきます。」

虫の話

私「こんな真面目な話のあとに申し訳ないくらいの余談みたいになっちゃうんですけど、合宿のときに部屋に虫出たじゃないですか笑。そのときに捕まえてくださったと思うんですけど、虫を触ったりするのは得意だったりするんですか？」

先輩「めっちゃ得意です 笑」

私「え、そうなんですか？」

先輩「変かな？ 笑」

私「全然そんなことないです！」

まさか光輝先輩が虫が得意で虫を処理してくれたとは思わなかったので、正直なところ結構驚いた。

先輩「私昔福岡に住んで、外で遊んで昆虫採集とかよくするタイプですごいやんちゃしてたんですよ。だからGが出てみんなが騒いでるの見てなんでなんやろってめっちゃ思ってます笑。」

先輩が昔は昆虫採集をしていたやんちゃな人だったとは普段の先輩からは思えなかったので、新しい一面を知れた気がした。

私「いや、外にいる虫は触れるんですけど、Gって基本屋内にいるじゃないですか？」

先輩「なるほど、安心できるテリトリーにそういう虫がいることがあかんねんな笑。納得したわ。答えが出た笑。たぶんその理論で行くとうち私の家はあんまりゴキブリ出ないから多分その人が育った環境にもよるんやろんな笑。」

私「私それで光輝先輩が来てくださるまでにG踏んじやったんですよね笑。まだ動いてたんですけど取ってくれたじゃないですか。先輩は虫得意かもなんですけど、虫に限らずいざっていう時にどうやってたら勇気出せますか？」

先輩「難しいね。対象によるけどまあこれもその時周りにどう思われるかじゃなくてその思うより先行動とかじゃないかな。慎重になりすぎたら何もできないからそういう非常時はあくまで冷静にやけど行動することが大事。行動するっていうことが多分勇気やと思ってる考えすぎないことですね。それから最近自分に響いた言葉があって、『しない後悔よりする後悔』っていうのやねんけど…。そ

の言葉のおかげでいっぱいチャレンジしようと思えたんよね。」

光輝先輩のように自分自身のモットーのようなものを作って行動するのもいいなと思った。

私「私も以前この言葉聞いて、いい言葉やなあって思っていました！笑」

先輩「お、気合うな笑。悩むぐらいやつたら動くことを優先していいと思います。」

私「Gからこんなに深い話になると思っていませんでした笑」

先輩「同じくです笑。合宿のこと覚えててくれてたんやね。」

私「もちろんですよ笑。あのときは本当にありがとうございました。」

先輩「いえいえ、こんな思ってくれるなんてゴキブリに感謝せなあかんわ笑。」

アンコンの救世主

私「これで一応最後になります。アンコンで自分たちは1年生の3人のみの編成だったんですけど、練習のときY先生たちは上の大会のチームの指導で忙しくてあんまり見てもらえてなかったんです。3人中音楽経験あったのが私だけで、ある程度何かは言ったんですけど、あんまり上手いかなくて練習に行き詰ってたんです。したら光輝先輩の方から、『録音送ってくれたら講評してあげられるでー』って言うてくださりました。あのとき声かけてくださってめっちゃ嬉しかったんですけど、

なんで助けてくれたんですか？」

先輩「シンプルにY先生忙しかったやん？ あと同じサックスの先輩も自分たちのアンサンブルしてたやんか。だから一年生誰が見てくれてるんやろうって思ってた声かけました。演奏聞いててめっちゃ下手やなって思ったとかそういうわけじゃなくて、教えてくれる人がおった方がもっとやっていこうと思えるかなって。」

またこれ自分の話になっちゃうからちよつと長いかもしれへんねんけど、結構最初の方にコンクールに出れなかったって言ってたでしょ？ でそうだから練習が分けられてて、当時の3年生はもうコンクールの曲一生懸命やって、ずっとパー練（パート別練習）してるみたいな感じでその端っこで基礎やってるみたいな感じだったのよね。だからあんまり当時の3年生の先輩と関わりがなくて、しかもそれに気づいたのがその先輩の卒部式の日だったのよね。あれ、語り合える思い出ないと思ってすごい悲しくてなんかめっちゃもやもやしてて、だからそういう思いを先輩にして欲しくないなって言うのがありました。だから74期のクラの子には3年生と悪い出作っておきやって言っていました。その理論で言ったらやっぱ1年生と3年生ってあんまり関われないことあると思うから、自分から関わっていききたいなって思いました。」

私たちのことまで気にかけてくださったことが本当に嬉しくて、思い出すとまた感謝の気持ちでいっぱいになる。

私「ご自身の経験からそこまで考えてくださってたんだって思うと感動しました…。」

先輩「75期74期がめっちゃうまいからめっちゃ期待して勝手にしてて、だからもつとうまくな
ってほしいもつと音楽好きになって欲しいし、その子たちが上を目指すんやったら自分もその上
に行かせるための手助けしてあげたいなって結構シンプルにそう思ったから声をかけました笑。サッ
クスの2、3年生アンサンブル忙しそうだったから、あれ大丈夫かな1年生って思ってた。」

私「そう思ったら光輝先輩たちも大阪府のアンコンで忙しくしてたのに助けてくださってたこと
ですよ。あのときも本当にありがとうございました!!。」

みんなをまとめて

私「自分は大変な時期とかだと周りのことが見えなくなるんです。自分の範疇で一生懸命になるこ
とが多くて…。どうしたら周りに気遣いとかできるようにするんですか?」

先輩「一個前提として話すと、私は周りのために動くのが好きなよね。っていうのはあるけどさ
なちゃんの今の状況から周りを見るにはどうしたらいいかっていうのを考えたら、さなちゃんの後輩
になんかもつと教えてあげたいとか気にかけてあげたいとかはある?」

私「2年なんですけどそういうのあります。」

先輩「いいえそんな学年なんて関係ないよ笑。それで提案やけど、2年生の間は自分のレベル

アップを重点的に活動して、3年生になったら教えるのをメインで活動するのはどう？ 甘えに聞こえるかもやけど、今は先輩に頼るのも大事なんじゃない？ それに3年生になったら自然と学年下の子を見ることになるから、そうなたら自然と気遣えるようになると思う。まあ確かに教えるのが好きかどうかによるかもやけど、先輩ともっと関わりたいと思うんならば自然にそうなると思います。」

最高学年になると周りが見えるようになるというのはなんとなく理解できる。

私「それずっと不安だったんですけど今の話聞いているとなんかそんな気がしてきました笑」

先輩「今洗脳してるから笑」

私「勉強になります。」

先輩「それはまあよかったよかった笑。だってさ、それがきっかけで今こうしてなんか関わりが増えているんだから。すごい嬉しいよ笑。本当にあなたたちは上手いので本当に成長が楽しみで、ほんまに73期の中で自分が一番中学のコンクールワークワークしてる笑。3年生になってみ、そうなるよ。」

後輩の未来をすごく楽しそうに話していたので、本当にこの部活が好きなんだなと思った。

私「光輝先輩って後輩の面倒みるのが好きだったりするじゃないですか。まだ1年ちょっとしか中学で過ごせてないんですけど、私の中では光輝先輩以上の先輩はいないんじゃないかって本当に思うんです。」

他にも尊敬している先輩はいるが、光輝先輩ほどの人はそうそういないと思う。

先輩「いるいるいるいる笑。世界は広いんやで笑。やばい、十数年しか生きてないのにこんなこと言ってるの笑。だからそうやな、一回一回の出会い大切にしたいなと思うよ。すごい自信なくすこととか結構あるからその度に後輩から頼ってもらえて、後輩の存在も大きくなって感じたし。」

私「こっちもすごい嬉しいです。初めての3年生が73期の皆さんで本当に良かったです！」

先輩「他の73期にもそれを言っておあげてください笑」

私「言うのは恥ずかしいです笑」

先輩「まあそれは大丈夫、秘密にしよう。えーと、質問には答えられたでしょうか？」

私「はい！ありがとうございます！思ってたより長くなってしまってますみません。」

先輩「いえいえこちらこそ！私が答えられることあったのかなとかめっちゃ不安やった笑」

私「光輝先輩ほんとたくさん話してくださったので逆に私質問しなくてもいいんじゃないかなって

なっていました笑。」

先輩「話すの好きだから笑。」

私「コンクールとかもあつて忙しい中今日は本当にありがとうございます！」「

先輩「ほんまに応援してるし期待してます。君たちなら関西行けるよきつと。」

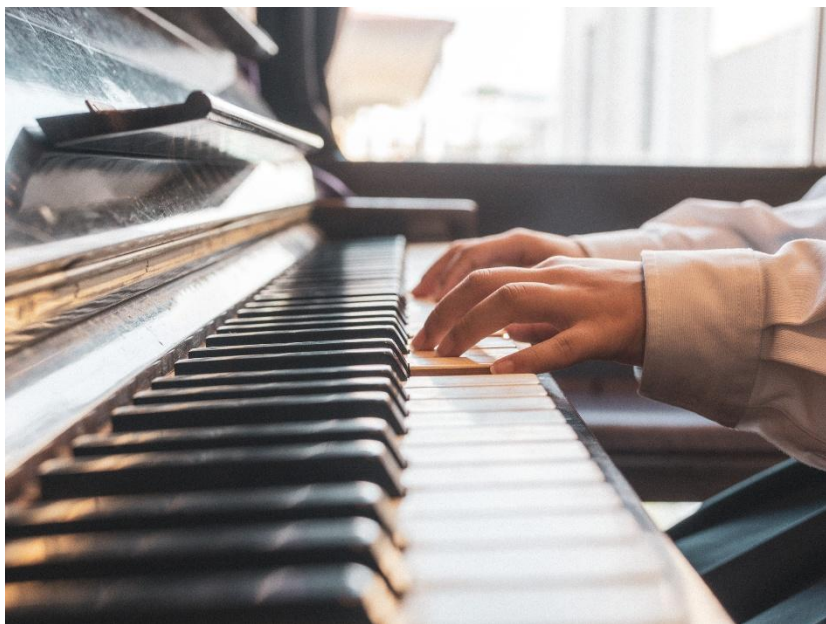
私「ありがとうございます！私たちも応援します！それから、みんなで絶対Y先生を関西連れて行きます！」

先輩「頑張ってください！」

取材を終えて

今回の取材でわかった光輝先輩の魅力は、物事にとにかく誰よりも熱心に励むことができるところなのだと思う。それから部活内では知れなかった、先輩がお喋り好きで虫が得意だという新しい面を見つけることができた。そしてこれを通して私は、セクリを目指しながら、光輝先輩には及ばなくとも、光輝先輩のように真面目で部活に誰よりも熱心で、後輩に頼られる、そんな魅力的な先輩になりたいと心から思った。先輩方の意思を私たちが引き継げるように。そして、みんなで絶対に関西大会へ行くという想いと共に。





憧れのお父さん

聞き手 鈴木千春

取材相手をお父さんにした理由

私が取材しようと思う相手はお父さんだ。お父さんは自衛隊で、剣道をしていて、今回の取材も剣道についてのことを聞こうと思っている。

私がお父さんを取材相手に選んだ理由は、私が関わっている人たちの中で一番尊敬している人だからだ。お父さんは普段、いろいろなことばかりしていて少し腹が立つときもあるが基本的に面白くて一緒にいると楽しい。また、切り替えがとても速くて怒られた後もパツと面白い雰囲気にしてくれたり、ふざけて遊ぶ時と真面目にやるときの差がきっちりしている。

私は小学四年生のころから、剣道をしている。始めたきっかけはやっぱりお父さんだ。普段はおちゃめな感じのお父さんが剣道をするときすごくカッコいい。普段からお父さんは行動、考え方などカッコいいのだが剣道が関わってくるとなおさらだ。

私の試合があった後はその動画を忙しい仕事の間に何度も確認してアドバイスをくれたり、なかなか上達しない私に何度も何度も教えてくれたりと私にたくさん時間を使ってくれる。また、お父さん自身は毎朝4時ぐらいにおきて素振りをしたり走りに行ったり自分にとっても厳しい。

剣道に対してすごくまじめで努力家なお父さんは小学生のころから今までずっと剣道をやっている

らしい。私は剣道をはじめてまだ五年だが少し剣道が嫌いになることがある。とてもしんどいからだ。「今日、やる気まじでゼロやねんけど……ほんまいきたくない」と、言いながらも30年以上剣道が続けているお父さんは本当に尊敬している。と、ともになぜこんなにも剣道が続けられるのか不思議に思う。

お父さんは私の中で人間としても、お父さんとしても強い人だと思う。だから、私はお父さんにどうしてそんなに頑張ることができるのか、頑張ることが、剣道が嫌になったときどうしているのか、大切にしていることはなにかを取材したい。

剣道を続ける理由

私「じゃあ取材始めるな。お願いします。」

お父さん「はい。こちらこそ、なんかきんちようするな（笑）」

私「小学生の頃から剣道を今まで続けていてやめようと思った事は無いんですか」

改めて、お父さんに取材となると、変な感じがして、敬語をつかってしまった。なんだか緊張する。

お父さん「やめようと思った事は何百回で済まない位あります」

私「じゃあなんでやめないんですか」

お父さん「やっぱりそれって自分が一番それを今まで1番頑張ってきたから、やっぱりやめられないです」

私「でもさ、行きたくない日もあるやろ？ 行きたくない日のモチベーションをどうやって保てるんかを知りたい。」

お父さん「優勝がしたい。それが1番のモチベーションで高校まではやってたよ。今、大人になってからはやっぱり仕事もあるから嫌やなあと思うことの方が学生のときより多いけど、今は1つ1番大きい自分のモチベーションは昇段審査に受かりたいってのと、子供たちが剣道してるからそこで何か自分は子供たちに言うのに、じゃあ父ちゃんの仕事が忙しいからとかしんどいからって言うで行かへんっていうのはもう自分の中では絶対ないから、行きたくない時が90%やけど、行くようにしてる。」

やっぱりすごいなと思った。どうしてこんな考え方ができるのか、不思議である。

私「今回の取材は、身近な自分の関わっている人たちの中の魅力的な人に取材するって言うテーマで取材してるんやけど、なんか千春が父ちゃんに魅力を感じるのには自分のやるってきめやるって決めたことに対して、絶対に最後までやるってところやとおもうねん。その力はどうやって身に付けた

ん？」

お父さん「身についてるかどうかは知らんけど、ちっちゃい頃から学校の勉強とかはそんなに言われへんかったけど、剣道自分がやりたい、勝ちたいですって言ったからには、先生も親も絶対に辞めさせるとかそんな選択肢もなかったし、もうどんな時でも、怪我しようが学校休もうが剣道だけ行くとて言う自分の中で決めてたって言うよりは、まあもしかしたら半分ぐらいはどっかで怒られるかなと思ってることもあったかも知れんけど、それでも何が何でも行くって言う習慣を身に付けたことが大人になっても今続いてる理由かなあと思う」

剣道のことはもう充分な気がしたので、話を変えようと思うが取材は難しくて、聞こうと思ってたことが聞けない。

私「じゃあ次は、剣道の事はもうわかったから話し変えるな、なんか普段さ、なんていうの、怒った後に切り替えがはつきりしててさすごいなっておもうねん。普段の生活でさ、怒る時は怒るけど、すぐ明るい感じに戻してくれるやん。その辺の切り替えはどういう考えでそうしてくれてんの？」

お父さん「俺は、毎日どうやったら子供たちの頭が良くなるかなあとかそういうことじゃなくて、どうやったらこの子が一番嬉しいかなあとかどうやったら伝えたいことが何とか伝わるかなあって思ってた、だからあんまり怒りたくないってのもあるし、それでも怒ってしまった後はいつも甘やかす

方が大きすぎて家出て行ってから朝から怒ってしまつて大丈夫だったかなあとか悲しい思ひしたかなあと思つて、そっちの方がでかいかなつて思うんと、やつぱり切り替えていうかそうやな。すぐにまた子供たちの笑つてる方がいいからそっちに持つていくために冗談言つたりとかして切り替えるようにはしてるかなつて思う。」

私「へえ…そんなこと考えてたんや。真面目な時とふざけてる時の切り替えちゃんとできてるやん父ちゃん、そこつてほんまにすごいよな。えつとじゃあ次の質問です。父ちゃん昇段審査のためにめちゃくちゃ頑張つてたやん。それやのに落ちちゃつたやんか。その時はどう思つたん？」

お父さん「もちろん自分がめちゃくちゃ反省したことが50%。でもあとの30%はゆつたらあかんことやと思うけど、あんまり言いたくないけど、ちゃんと見えてるんかな？ つて思つてしまつたかな。自分があんなに努力したのになんで受からへんのかつてめつっちゃおもつた。何があかんのか説明して欲しいなつて。あとの20%は、大人になつてから1番悔しいつて思つたぐらい悔しかつた。大人になつて悔しいことなんて普通なかなかないと思うから。」

私「次さ、昇段審査受けるの3回目やん。2回落ちて3回目受けるのつてもう一回落ちひんかなあとかそういう怖い気持ちとか、失敗しへんかなつて言う思いはないの？」

お父さん「落ちたのもしかしてやつぱり夢じゃないんかなつて思つたりするけど、それよりも今自分ができるこれ以上の事は無い位にやつて行つてから準備めちゃくちゃしてるつもりやからいつでも行けるかなあつて言う位の準備してるつもりやな。正直怖いなつて思う気持ちもあるけど、自信あ

る。」

私「千春が一番尊敬してるのは、なんか毎朝さ、4時とかに起きて素振りとかしてるやんか走りに行ったりとか：何でそんなにできんの？ やめようとか思わへん？」

お父さん「そういうことってなんかやり始めた一週間とかのほうが大変やった。何回も辞めたいなとは思ったし、今も思ってる。自分でも、もういいかなとか、もう辞めてもいいかって思うわ。剣道始めた時からずっとやけどな。やるってゆったら辞められへんかったから、もうその時はしんどいし、正直泣きそうになったこともあったけど、そうやって環境があつたからずっとやってこれたんかになって思う。今、大人になってからは辞めたいって思うけどそれをやめへんために自分で毎日手帳とを書いて止められへん状況にしてる。」

私「やっぱりやめたいとは思ってんのか。ちょっと意外かも。」

お父さん「それぐらい思ってるわ！ 俺も人間なんやから（笑）」

私（笑）えっとじゃあこれが最後の質問です！！ 千春に伝えたいこととかある？」

お父さん「えームズイなそれ：んー」

私「なんか！ なんかない？？！？」

お父さん「あ。ある」

私「なにに？？」

お父さん「剣道って行きたくないのがほとんどやし、しんどいけどさせっかく始めたんやからやめ

んと続けてほしいなあってゆうのはあるな。剣道って大人になってもできるから、今やめても、またやってほしいかな。これからも一緒に剣道がんばろな！！」

私「うん！！頑張る！ありがとう！！！」

取材を終えて

改めて取材をしてみるとお父さんの魅力がよくわかったような気がする。言葉でパッと説明はできないけれど、何でかすごく魅力的にかんじるのだ。自分の決めたことをやめても構わないのに努力し続けることができるところは本当に尊敬している。わたしもお父さんみたいな人になりたい。



おじいちゃんの過去

聞き手 村上悠岐

取材の動機

僕が取材したいと思った相手はおじいちゃんだ。おじいちゃんは、昔カーテンの会社の社長だった。そのカーテンの会社でおばあちゃんと出会ったらしい。今年で78歳になるのに、山登りやサイクリングをしていて、とても元気だ。少し前までヨットを持っていた、僕が幼稚園にいるときは、そのヨットのある海で釣りをしたり、ヨットに乗せてもらったりしていた。どういう経緯でヨットを買ったのか知りたいと思った。

今は学校や部活で忙しいが、昔はよく野球を見に行くために野球場に連れて行ってくれたり、動物園や魚釣りをするために川にも連れて行ってくれた。いつも僕をプール(習い事)に送ってくれる時も、たこ焼きや、お菓子を買ってきてくれたりしてくれて、優しかった。でも、そんなおじいちゃんも僕がダメなことをした時は怒ると怖かった。小学生の頃ピアノを少しだけ習っていた、ピアノの練習をしない時に怒られたりした。

おじいちゃんは今の僕と同じくらいの年齢の時何をしていたのか、部活には入っていたのか、おじいちゃんの昔のことはあまりしらないので聞いてみたい。

取材当日

その日は、お盆休みでおいちゃんの家に戻っていた。いつもよく話しているし、別に緊張するとは無いと思っていたが、いざ取材するとなると緊張してきた。家に着くとおいちゃんは寝起きだった。家に入ってすぐの時は声をかけても返事がなかったので少し焦った。取材を始めるために机に座るとおいちゃんが麦茶を出してくれた。

取材概要

日時… 8月10日 午前10時～11時

場所… おいちゃんの家

取材相手… 鈴木利道さん

自分との関係… おいちゃん

おいちゃんの学生時代

僕「取材よろしくお願いします。」

おいちゃん「こちらこそお願いします。」

僕「早速ですが、おいちゃんは学生時代何が楽しかったですか？ 何をしたりして遊んでいましたか？」

やっぱり、おじいちゃんが僕と同じくらいの年齢の時になにをしていたのか気になったので質問してみた。

おじいちゃん「学生って何年生ぐらいの時のことや？」

僕「僕と同じ年ぐらいの時のことを聞きたいから中学生の時かな。」

おじいちゃん「分かりました。中学校の時はね、じいちゃんあの化学とか理科が好きやったから勉強とかよりもロケットを作ってた4人ほどでロケットをあげるっていう実験をしてました。」

おじいちゃんは体を動かす事が好きだと思っていたので、理科が好きだということは意外だった。僕「ロケットはどういう仕組みなんですか？」

おじいちゃん「当時は今みたいな科学が発展してないからノズルな、簡単に言ったらどれだけ細いノズルをつけるかとか、傾斜角度をどのぐらいつけて細くしたノズルを付けてそして色々混ぜてあの火薬を作るんだけど花火のね、元になるやつを作るんだけどそれをあとどのぐらいの量、何グラムと何グラム合わしたら効率いいかなと言うのをやって、何回もやけど寸前に爆発する事がありました。でも20メートル以上飛んで成功したこともあります。まあそういうふうなことをしてました。」

僕「その頃のおじいちゃんの夢は何だったんですか？」

おじいちゃん「その頃の夢っていうのはなかったな。そういう興味のあるものがなんか夢だったんだな。うん、そのかわり未知の夢にその時はまだロケットが世界でも日本でもでかいのが飛んでない時代だから、それが夢でした。」

僕「実際に大人になって就いた仕事について教えてください。」

おじいちゃん「漠然としてるなあ（笑）。はい、あのじいちゃんからまとめると、じいちゃんは本当は高校を卒業したら大学行くつもりだったんや。それも英語を勉強する大学を目指してたんや。その当時はあの英会話教室とかしか英語を勉強するところっていうのはまだなかった時代やったから、大学行かんことには英語の勉強はできなかったな。で、こうと思って勉強してたんだけど本当に入学をあの大学のあの学部のとって入学決まったんだけど親が親の仕事におじいちゃんは手伝わそうというようなことに決めとったもんやから入学金払ってくれへんかったんや。だから大学入るときだけ払ってくれたらもうじいちゃんも家出てあの働きながら大学を出るつもりでおったけどね。」

まあそんなんであの大学行けずに家の仕事を継いで、その仕事はそんなにからしたら、じいちゃんの夢でも何でも無いから嫌だなと思ってたけどまあ一年ぐらいした時にあの父親が急に死んだんや。その時兄弟で姉がお嫁にまだ行っていないし、それから下の妹は高校卒業してないし、それからもう一つ下の弟は中学卒業の時期だったかな。それでそんな時にもう親が死んだら、私も一年しかその仕事してないから技術がないからお得意さんは全部逃げちゃって、で職人さんも4人ほどおったんだけどな、その人らもう当然いなくなっちゃったの。じいちゃんも勤めていた時、その当時1万5千

ぐらいいかたっていうぐらいお給料がないねんな。そんなんで商売をやっていかざるをえないって借金借金っていうのも当然何万というのを毎月払わなあかんかってん。その時はまだ19歳ぐらいやった。」

僕「その時は職人さんって何の職人なんですか？」

おじいちゃん「そうやね、あの昔はねあの着るものから何からね布で出来とって、布というのは縦糸と横糸で出来上がるものでね、それに模様を出すことができるのね。そういうんや。模様を出す仕事。そのただあの縦糸と横糸だけやったら何にもないのに、それに縦糸をこう、いろいろ操作することによって柄が作れたりした。じいちゃんのところはその柄を出す職人さんでした。」

僕「なんのデザインをしていたんですか。」

おじいちゃん「デザインは日本のデザインっていうのはもう昔からの帯のデザインみたいなんだけど、毛布のデザインだったのね。そしたらやつぱりちよつと華やかな柄とかがあるんで、ヨーロッパの雑誌を日本に輸入して売ってるところがあつたのね。まあそういうところにたまに買いに行つて、そのデザインを見るわけね。外国のんで、あの影響があつたのがカーテンのデザインでそれであとから毛布の花柄とかチュールリップとかね、そういうデザインをヒントにして当時やってました。」

で、その頃独自に自分のやり方で新しく、これから織屋さんもあの新しくしようというところもあるねんな。そういうとこばかりを営業しに行つて、そういうところから注文ももらうようにして、でやっていたんだけどだんだん今プリント柄っていうのであの綺麗な色がね色々出てね、それが主流に

なってくるのがその当時のじいちゃんも感じだから、もうこれはこの世界あかんと言うことで五年ぐらい続けてたけど、だから25歳ぐらいにはもうこれあかん、とその前から感じてたからそのカーテンのデザインを見てたろ、それで人気の仕事し始めて、だから日本でまだカーテンってそんなに人気のない時。それでもデパート行ったらあってんな。で、そういうようなのであの家庭の主婦となったらデパートに行かなきゃで、まあ名前言ったらあれだからあの心齋橋の百貨店営業に行ってな、で、注文もらうまで一年ほどかかったけど受けてもらってそこから下手に仕事をするようにしただけどそれも五年ほどしたらもう困難だけで儲かるわけではないから、うん今度は直接そのカーテンを売ろうというので切り替えたのがよかったね。」

僕「その仕事で一番大変だったのは何だったんですか。」

おじいちゃん「それはもう大変なこと山ほどあるけどね、あの未知の部分が多いから大変っていうよりも面白いな。こうしたらもつとよくなるんじゃないかとか、こうやったらもつとお客さん喜ぶんじゃないか、っていうねその当時あった今まで日本は畳のあの生活があたりまえだったな。うん今だったらもうカーペットとかが当たり前だけど昔は畳が当たり前でそこへ絨毯を上に乗くのだからあの正座してもあの柔らかくて痛くないから、みんなカーペット買うようになりました。またカーテンもちょっと外から見られるから、きれいなカーテンつけるというのが流行りっていうね、まあそういう時代でした。それはやっぱり流行中であってな55歳位になって、もうそのぐらいになってくると今

度はもう大手の会社もあの参入してくるからおじいちゃんが個人でやってるようなところは太刀打ちできないというのを感じたし、まああのおじいちゃんもちよつと50の時に大きな病氣したからあの55、56で店閉めました。」

僕「その仕事の中でおばあちゃんと出会ったのですか。」

おじいちゃん「あのね、その状況の時に職人さんみんなおらんくなつたやろ。だからじいちゃん一人であのまあ営業してても仕事もないかなそれでそれからちよつと仕事のことを分かつてる人も欲しいと思つてね、まあたまたまね、その時にその他の同業者のに勤めてる人がね勤めてる所を辞めると言つたその時に、あの親戚の人を。そこで働いていた女性がおつたわけだ。で、その人がおじいちゃんの働いていたところにきて、それがおばあちゃんやつたんや。」

僕「前までヨットに乗っていたけど…そのヨットを買うきつかけはなんですか。」

おじいちゃん「ずっと仕事してると、お得意さんとも色々お付き合いが広がるわね。その中の一人があ釣りが上手な人で夕方からね暗くなりかけてきた時からよく釣れるチヌがねこの大阪でもあの釣れるわけね。それであのちよつと仕事はあの早めに終わって行きませんか言ってくれる人がいて、やつぱりそのチヌを釣りに行ったらやつたらほんまにあのつれてね、すごく楽しかったです。その時ヨットが何隻かあつて、それに憧れて買いました。」

僕「最後に今の僕たちに伝えたいことかありますか。」

おじいちゃん「あのじいちゃんねその19歳の時にあの商売したくて出店して家族を守るためにやってきたんや。そして今日に至るまでの間ね、人のぬくもり、人の心の汚さはそれなのほう身に染みて経験しました。特にあの弱い者にはつけこんでくる。まあそういう中でね、それに会わないようにするためにはどうしたらいいのかなっていうのは、その時から、なんて言うかな、自分だけのことを考えてあの営業行って、あの仕事くださいって回ってても誰も仕事くれない。何か相手が困っていることを考えて仕事とかでもすることは大事だと思います。」

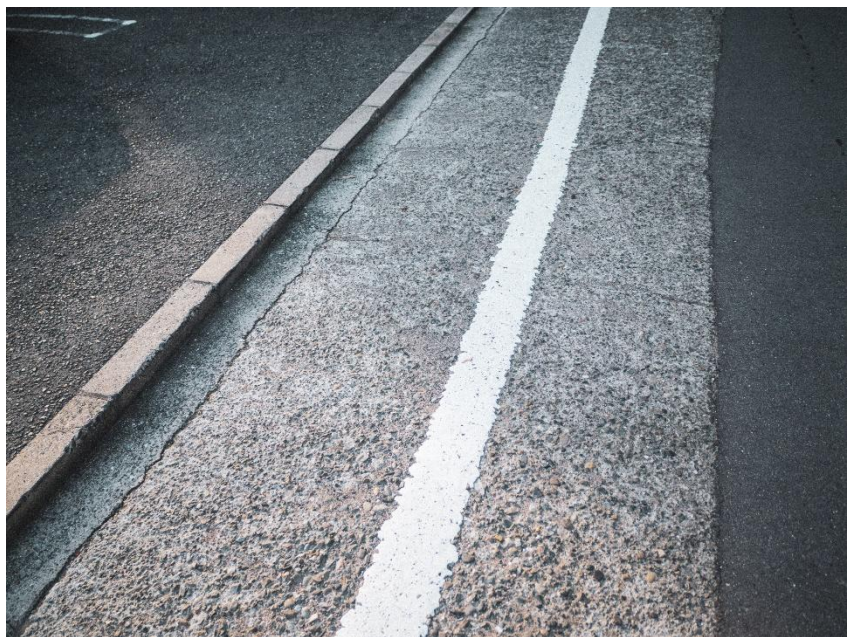
僕「はい。今日は取材ありがとうございます。」

おじいちゃん「こちらこそありがとうございます。」

インタビューを終えて

今まで、おじいちゃんの過去についてはあまり知らなかったのですがこの機会におじいちゃんについて知ることができて良かったと思う。取材当日、焦りすぎて写真を撮るのを忘れていたので、お母さんが思い出に（？）と撮っていた写真を使った。おじいちゃんが言っていたように、いつでも相手のことを考えて動けるような人になりたいと思った。





久しぶりの再会

聞き手 向日葵愛

取材の動機

今回私が取材相手に選んだのは、小学校5、6年生の時の担任の西山つゆり先生だ。西山先生とは、休み時間に一緒にバスケットをしたり、話をたくさんした。西山先生は、とてもまじめだ。

私は、西山先生のおかげで、小学校の先生になろうと思った。理由はたくさんあるが、特にわたしが皆さんに伝えたいと思った理由3つを話したいと思う。

まず、1つ目は私が、小学2、3、4年生の時に将来の夢について考えたときに、将来の夢がなかなか浮かばなかった。そして5年生になったときに西山先生が担任になって、初めて、西山先生みたくになりたいと思った。なぜなら私にとっては、一番相談しやすく、頼りやすかった。勉強熱心の先生で、算数とかで、困っている子に手を差し伸べている姿を見てとても優しい先生なんだと思った。その姿に私はひかれた。

2つ目は、小学校5年生の時に、一度自分が委員会の仕事（委員長なのに）をさぼって、別のことをして先生に怒られた事がある。怒られた時に言われた言葉は今でも鮮明に覚えている。「優先することが間違っている。次からは、何を優先的にしたらいいか考えて行動しなさい」と。

自分は怒られたことがめったになかった。100%私が悪いのだが、西山先生のことをずっと尊敬

していたのに、怒られたことをずっと引きずって、怒られてからの一週間、西山先生とほぼしゃべらなかつた。

今考えれば、「何やってんだ！？ 自分！！！」と思うほどにとてもしょもないことだった。でもその経験があつたことで何を優先したらいいとか、何を大切にしたらいいのかとくだんだんわかるようになってきたような気がする。西山先生は、自分が大人になるに必要なことを教えてくださっていたんだと、改めて気づいた。

3 つ目は、西山先生のおかげで勉強に対する考え方が変わったことだ。小学校中学年の時は、勉強の楽しさがわからなくて勉強はやらされているものだと勝手に思い込んでいた。高学年になって西山先生の授業を受けていると、なんでかわからないけど勉強が楽しいって思うようになって、自主的に勉強するようになった。

取材依頼の手紙を送って日程が決まるまで

西山先生とは、卒業してから、地元の夏祭りぐらいでしか会えていなかった。もちろん先生のLINEの友達登録や、メールアドレスの交換はしていない。そこで、弟に私の電話番号が書いてある手紙を直接西山先生に渡して貰うことにした。

数日後、西山先生から手紙が送られてきた。「私に魅力なんて……ないよ、でも力になれるのであれば、協力したいです！」と返事が返ってきた。そこから、メールでのやり取りを繰り返し、取材日

は、8月2日に決定した。しかしその日私は、体調を崩してしまい、取材をすることが出来なかった。でも西山先生が日程調整をしてくださり、取材日は、8月10日になった。今まで誰かに取材を依頼することが無かったから、とても恥ずかしかった。

取材概要

日時…2024年8月10日 9時～10時30分

場所…K市立H小学校6年1組教室

取材した方…K市立H小学校の教師 西山つゆり先生

自分との関係…小学校5、6年生の時の担任

取材場所に到着してインタビュが始まるまで

西山先生との相談の結果、母校のH小学校に決まった。私の家からは、徒歩20分ぐらいのところ
にあり、学校は森に囲まれている。

約束の9時より2、3分遅れていた為、走って向かった。学校に到着して先生にメールし、すぐさま先生が職員室から降りてきてくださった。すると、先生が「ヤッホー久しぶりー!!」と明るく出迎えてくださった。最初は緊張していたものの、その言葉で、緊張が和らいで落ち着いた。そして、6年1組の部屋へと歩き、学校の話や、世間話をして、とうとうインタビュが始まった。

約1年ぶりに再会した元担任の西山先生

先生は私の取材を受けるただけに、学校に来てくださっていた。会った瞬間、「久しぶりだな」って思うのではなく、「懐かしいな」って思う方が大きかった。

実際ちゃんと話すのは1年ぶりだ。「小中一貫になって、今もH小学校の先生をしていて、6年1組の担任らしい」などと色々な人から聞いていた。私はとても緊張してしまい、目を見て話すことができなかった。でも先生が「葵愛がやりやすいようにやってくれたらいいよ。」と言ってくださって、少し緊張がほぐれた。

挨拶を済ませた後で今回の課題レポートの趣旨を改めて説明し、事前に渡せていなかった、総合学習担当の先生からの「添え状」を渡した。授業や課題の内容が書いてある。添え状をじっくり読んだ西山先生は、「今の中学生凄いいねー」と言い、私が「録音してもいいですか?」と聞くと、「全然いいよー」と快く引き受けてくださった。

小学校の先生になったきっかけ

インタビューを始めた。私はまず、小学校の先生になった理由について尋ねることにした。この質問は、私が小学生の頃から西山先生に聞いてみたかったが、卒業するまでに聞けなかったので、この「魅力的な人に取材する」課題で聞いてみようと思ったからだ。

私「早速なんですけど、西山先生はなぜ小学校の先生になりたいと思いましたか？」

西山先生「子供が好きっていうのが初めにあって、教えるのとかも小さい頃から楽しいって思っていて、小学校の5年生の時の先生がすごい自分の中で、学校の先生だけど、お母さんの存在で、こんな先生凄くなって、学校来るの楽しいって思えたのがその先生がきっかけで、そういう先生になれたらいいなって思ったのが、小学校で1番初めに思った事だった。

高校では小学校の先生ではなく、違う夢に進みたいなあと思い、大学ではボランティアで海外にも行ったりしたけど、その経験をするだけじゃなく、その経験を話したいと思うようになって最終的に小学校の先生の夢に行き着いた。全教科を教えられる事が、小学校の先生の魅力で、自分の中で、この教科が得意っていうのがひとつにしぼれなくて、結局全部の教科が好きやし、いろんな教科を教えられるのは、小学校の先生だけ。6年間の成長の糧を見れるのは小学校の先生だけやな、そこに魅力を感じて小学校の先生になった。」

話を聞いて、西山先生との共通点が見つかった。西山先生も小学5年生の時の先生に憧れて、小学校の先生になろうと思ったことなど、改めて共通点が多いなと感じた。私も、西山先生のような先生になりたいと思った。

子供との接し方について

先生になるために、子供との接し方が1番大事になってくる。私は、小さい子供と接するのがあまり得意ではないので、西山先生に普段何を意識しているのか聞いてみることにした。

私「普段どんなことを意識して子供と接していますか？」

西山先生「できてるかわからないけど、なるべく子供と目線を合わせたいっていうふうに出ていて、もちろんダメなことはダメって言うし、だけど子供と一緒に楽しめるほうが、自分も楽しいから、子供と一緒にというのは意識しているかな…？ 全部子供達のおかげです。」

西山先生に教えてもらった、「目線を合わせる」ということなどを心がけて、これから過ごしていきたいと思った。「目線を合わせる」など、1つを意識するだけでだいぶ子供との接し方が変わるんだなと思って思った。

先生が今まで教師をしてきて、やりがいを感じるなと思うところは？

先生をする上で、「先生をしてきてよかったな」と、思えるポイントを知リたかった為、先生に聞いてみることにした。

私「今まで先生をしてきて、やりがいを感じる事はありますか？」

西山先生「一番は卒業式の時によかったなど。でもそこで自分だけがよかったじゃなくて、子供達が満足して卒業してくれるのが一番だからそこはすごく思うかな。子供達の中で何かが残ってくれてたらずごく嬉しい。それこそ葵愛のように卒業してからもうやって連絡をくれたりとか、一番最初に卒業させた子も大学生になったけどいまだに連絡くれたりとか、関わるのは1、2年だけど心に残ってくれている事がやりがいを感じています。」

だんだん緊張がほぐれて自分が小学生だった時に戻ったような気がした。「教師」という仕事はとても大変。でも、やりがいを感じられる職業だなって思った。

生まれ変わっても教師になりたいか？

今回の授業のテーマである、「魅力」について、詳しく掘り下げる為、「教師」の魅力について、聞いてみることにした。

私「生まれ変わっても教師になりたいですか？」

西山先生「あ、でもほかのことに挑戦してみたいなあっていうのは思ったりするけど、でもこの仕事をやっているとほかの仕事できるんかなってすごくおもったりするかな…それこそ海外行きたい

なって。大学の時や、高校の時とか思ってたから、なんか将来的に海外で教えたらなって：でも英語苦手だからどうしようかな笑 夢はあるんだけど。」

私「いやー凄いです!!」

西山先生「あと、先生、お父さんが日本人学校行ってたから、幼稚園から小学校まで海外におってんやんか、親も教師だからそれで一緒に行ってて、なんかそういう環境に自分があったのもあるから行きたいなあっていう気もするし、でもなんかまだまだやし、行って何かが出来るってわけでもないから、まだまだこっちでちゃんとしたいなっていう気持ちもあるし、もう一回この仕事するかって言われたらもしかしたら違うことしてるかもしれないし笑、でも楽しいのは楽しい。こんだけ人の成長を見れる仕事って無いと思うんやんか。」

私「確かに。人の成長を見れるのって本当に教師ぐらいだけですもんね。」

西山先生「だからなんかねこうやって会って、おおきくなったなあーって思うのも嬉しいし、なんか中学生見てたらそんなことできるようになったんやーって思うのも楽しいし、1年間の間で大っきなっていくやん。小5の時の葵愛達とさ小6の時の葵愛達って全然違うかったやんか。凄い思うねん。なんか写真とか見てめっちゃ可愛いもん。5年生の時とか。6年生になったら、お兄ちゃんお姉ちゃんになったなって感じるねん。なんかそういう変化をやっぱり見れるのは、この仕事しかないなって、思う。ある意味難しいけど6年生相手するのと1年生相手するの全然違うやん笑。」

先生と話していて、凄い小学校の時の思い出とかが蘇ってきて、凄く懐かしかった。先生の話聞いて、やっぱり「教師」の仕事は、とても凄いなって思った。

今まで、教師をしてきて、思い出に残るエピソードは？

西山先生は、「海外に行って、子供達に勉強を教えたい」などの大きな夢があるからこそ、先生の中で一番思い出に残っているエピソードについて、聞いてみることにした。

私「今まで教師をしてきて思い出に残るエピソードとかがありますか？」

西山先生「一番初めに卒業させた子達の思い出も濃いいけど、でも葵愛達との二年間もすごい濃かったな。初めて1クラスで単学級っていうのが。だからすごい葵愛達が卒業してから無になったと言うか。何もなくなった、状態やって、その2年間凄いい濃かったって改めて思った。持ち上がりで、6年生持ってるってなった時は嬉しい反面、嫌じゃうかなって……けどでもすごいなんやろう……楽しませてもらったなっていうのは思っていて、前の学校で、一番初めに卒業させた子たちが3年持ち上がった子たちやって、4、5、6年生の時持ったんやけど、クラス替えがあるから3年間持った子って普通に少ないねやんか。でも葵愛たちって、5、6ってそのままやんか。やからすごい濃かったなって思うし、ある意味分かってくれてるやんか。これ！！　っていうエピソード1個！！　とかじゃなくて、毎日当たり前に過ごしてたけど、それがすごい楽しかったなと思う。毎日授業したり、休み時

間の時話したりして、居心地がよかったなーって思う。あの2年間特別やった。すごい助けられたし、あの次の年に3年生持つてんけど、その時に、やばい：めっちゃやってもらってたんやつてすごい思った。ほんまに楽しかった。なんか授業してて、楽しいって思った。」

私「西山先生が来る前までは、勉強はやるけど、好きじゃなくて。やらされてる感じだったんですけど、西山先生の授業とかは特に社会とかすごい楽しくて、勉強が好きになりました。あと、勉強の大切さについても知れました。」

西山先生「みんなが頑張ってくれたし、すごいそれは思ってた：なんかやる気あるやん？やる気には答えたらなってると思うのがあって、みんなのやる気について行くのに必死やった。でも楽しかった。授業だけじゃなくて休み時間とかが楽しかった。コロナですごい制限があったけど、制限あってもなんかすごい密やったなって。密になったらあかんかったけど笑」

私「西山先生が来た時に、初めて勉強楽しいなって思いました。」

西山先生「いやいや、そんなことないよ。葵愛が頑張ってくれたから。」

私「そんなことないです。学校の先生になれるようにこれから頑張ります！」

西山先生「一緒に働けたらいいねー！」

私「はい！お忙しい中、貴重なお話ありがとうございました。」

西山先生「こちらこそありがとうございます！部活頑張ってるねー！」

私「はい！ありがとうございます！」

私は、西山先生に授業をしてもらってから「勉強の大切さ」に気づくことができた。先生が最後に「葵愛が頑張ってくれたから」と言っていたいただいた時、凄く嬉しくて、これからも勉強頑張ろうと思えた。

取材を終えて

西山先生を取材相手に選んだ理由は、「今までの先生の中で、一番思い出に残ったから魅力的」という感覚しかなかった。だけど、取材する中で、色々考えながら行動していて、子どもに対する考え方や接し方もとてとても尊敬できるなと思った。「人の目を見て話す」など、教師をする上で大事だということを西山先生に教えてもらった。普段から、そういう細かいことを考えながら、子供と接していて、子供が卒業する時に、「このクラスでよかった」と思えるように、今頑張っていると聞き、私も西山先生のように夢を持って、これから先頑張ろうと思った。

この取材で、西山先生に元氣付けられたなと思った。そこまで、子供のことをしっかり理解していて、優しい先生はいないと思うぐらい、私にとっても大きい存在だった。外国に行って、日本人学校で働き、貧しい国の子達を救いたいと考える西山先生の「優しさ」が溢れ出ていると思った。私も将来、小学校の先生になれば、この「魅力的な日に取材する」を通して西山先生から学んだことを活かし、これから先も頑張っていきたいと思った。

「最後に記念写真撮らせてもらってもいいですか？」と聞くと、「いいよー！！ 先生も撮ろうと思
っててん！！」と言ってくだった。そういえば、一緒に写真を撮ったのは、卒業式ぶりだ。凄く懐
かしい。この総合の授業で西山先生に取材でき、本当に良かった。





先輩の日常に迫る…？

聞き手 葛井康志

今回、僕が取材相手に選んだのは清教学園卓球部副部長の、宮野脩介先輩だ！彼は卓球部の先輩の中で一番関わっていて、しかも通学する際の駅も一緒だ。

なぜ選んだのかというと…宮野先輩の周りがなぜか「キラキラ」しているし、なんか不思議と魅力的に感じたからだ。たとえば、ふだんから何かと相談しやすい性格で、卓球部入りたての時も練習に付き合ってもらえたり、関わりやすい雰囲気で僕の一年の時の体験談などを話したときに（もちろん二年の時も）自分はこうだった、と先輩の体験談を語ってくれたり（磯観察の時とかだったら、「自分が行ったときこんな奴が出たよー!」とか、「これは出なかったー!」など）、困ったことがあるときにアドバイスをしてくれたりもしてくれた。

また、自分だけでなくほかの先輩方とも仲良くしている。それはつまり、だれとでもなかよくなれるということだからどうしてそんなに仲良くできるのか気になっている。

卓球部ならではの質問ではあるが、部活の引退とかについてどうとらえているか（取材する頃には引退しているであろうが）も聞いてみようと思った。引退前と後についてどんな心情かも聞こうかな？そして、体育祭の時に部活動対抗大縄跳びにも参加していて回し手もしていた？らしいのだが、こういう気持ちでやっていたのかなとか、もし飛び手ならば、なんで全然飛べなかったのかと

かも知りたいし、この失敗をどう生かすかも一緒に考えてもみようかな、とかが、理由になるかな。でも、本人いわく副部長になりたくなったわけではないが、どうしてなったのだろうか？そのあたりもきいてみよう、とか、いまさらながらこの小学校にいたのか、などききたいことはやまほどあるが、聞き切れる気がないので、やめておこう。（しかも聞きたかったところは結局取材ミスで消えてるし…）

しかし聞き方の問題がある。なれなれしく話していいのかな？敬語を使ったほうがいいのかな？とかいろいろ気になるけれど、そこらへんはもう敬語にしておこうかな。（敬語できてないかも、文章中で）

取材情報

取材相手…清教学園中学校3年Dクラス、元中学卓球部副部長 宮野脩介さん

取材日時…7月11日木曜日 15時00分から 取材場所2B教室

まさかのミス！？

今回の取材にあたって事前に渡すべき動機レポートの完成原稿を、総合学習の授業で受け取る前に取材をしたので、後日渡すつもりだったが、そのレポートを紛失してしまったので家でPDFをスマホで写真に撮って、LINEで動機レポートを見せることになった…そして、先輩とは部活の後に取

材をするよう打ち合わせをして、決めたけれど、なぜかともと聞く予定だった部分が音声入力から抜け落ちていて、書き直しがたいへんになってしまった。だったらしょうがない！ 元々の取材予定を変更だ！

取材動機の質問（あれ？ 逆！？）

早速先輩に質問をすることにしたが、まさか先輩に逆に質問されるとは… これはちょっと予想外だったが、ありのままの動機を語らせていただいた。

葛井「本日はよろしくお願いします。」

宮野先輩「よろしく願います。」

宮野先輩「最初ちょっと俺から聞かせてほしいことがあるんだけどなんで俺を選んでくれたん？」
葛井「あの卓球部で最初H先輩とかも候補に一応あげていたんですけど、H先輩はちょっと共通点とかが結構少なくて質問しづらくなって。まあ生徒会の先輩っていう立場ではあるけれど、卓球部の先輩でもあるから、卓球上手くなるコツとか聞きたいなと思ってたんやけど、総合の授業でなんかそれはその人の魅力に迫ってたくない？ って感じのツツコミが入って、あ、これだめやなって察して、で一回やめて。なんで副部長を選んだかっていうと共通点とかあのまあ一年生の時からそれこそあの本当よくしてもらってるから、感謝の気持ちも込めて取材したいとか、そういうものもあるし、

どうして副部长とかそういうのになろうかなと思ったのかのも普通に気になったから聞くことにして、で動機レポート頑張ってまとめたんですけど、思ったより難しかったという……………」

宮野先輩「笑」

質問① 卒論で何を語るの？

正直な話をする、この質問の前にもととする予定だった取材の内容が入るはずだった。しかし、先に述べたように取材ミスによりこれは収録されておらず、しかも思ったより短い内容だったので、カットすることにした。ごめんなさい！ その代わり、これ以降の質問は先輩が取り組んでいる卒業論文について＋雑談という感じのテーマで話を進めていく。

葛井「えーっと、副部长は卒論とかで何を語るつもりなんですか？ また、そのテーマ選びはどうしましたか？」

宮野先輩「俺は実をいうと、というか、初めて打ち明けることになると思うんだけど、俺は『笑い』について研究しているのね。」

葛井「なんかすごいそんな感じがしていたけどやっぱりか」

宮野先輩「『笑い』って言ってもあの、漫才とか落語とかそういうのじゃなくて大喜利とかではなくて、もう笑いの根本で、なんで人間って笑うのかなっていう…」

葛井「うわあ…」

宮野先輩「ああめっちゃ面倒くさい感じのテーマやなと思うやろ？ じゃあ俺も言っちゃえば好きなことがいっぱいあんな。それこそ野球見るのだって好きだし、あの鉄道とかも俺割と興味あるし、そんなふうになあなんか色々あるやろ？」

自分で言うのもなんだけど、もうちょっと結構知ってるなって言うのが多くて野球とかも好きは好きやねん。俺ももちろんそんな感じなのやったら俺調べる価値はあると思うねん。思うねんけどm知ってるからこそ逆に知りすぎてもうよくわからないって感じだね。分からなくて俺は挫折したというよりは、知りすぎているから諦めた。

もともと俺野球にしても、実はなんかそんな気はしてたけどやっぱりそうだった。ちょっと俺には研究ができる気がなくて、どうしてもテーマが思い浮かばなかったんで、好きなことでもテーマにする疑問が全然見当たらないっていうトラブルあるんだって初めて知った。だってあくまでも卒論ってあの、知らないことを探究するみたいな感じの探究学習やね。つまり趣味とかでもいいからとりあえず学べるようなことを探さないといけないしなんか厳しいってことなんか、多分。

まあ諦めるのはそんな動機があったんだーとかいろいろあるけれども。だからね、卒論について言うならやっぱり結構時間掛かるもんなよ。卒論ってこれに気づくまでと同じようにもう言っちゃ悪いけど何倍もかかるもので、俺はもともと野球できるわと思ってもうそのノリと勢いで研究しようとしてただけどそれじゃ無理です。ノリと勢いでやるもんじゃありません。」

葛井「つてことは俺の場合は『恐竜』について調べるのはちょっと無理があるということ？」

宮野先輩「いやそれはないと思うで。深掘りとかでも良いし、だから一番必要なのはモチベーションかな。やっぱりそれがなかったら、たとえば好きじゃない教科とかあるやん？俺やったらまあ国語とかあんまり好きじゃないんだけど、俺は国語はちよつと案外行ける自信はあるし、いけるけど図形がちよつと無理だなんて。だって一人で図形の勉強してくださいって言われてもモチベーションないでしょ？無理です。」

だからその、これやったらいけそうやなって言うのを見つける時期やと思って今はなんかぜんぜん早くなりました。卒論のこと今聞いてても、正直言ってもうこいつ何やってんだろうって思われるとかは無いと思うね。どんなテーマやったとしてもやる気がなかったら無理だよな。」

葛井「卒論ってなんかすごい大きい壁みたいに見えるのは私だけかと思ったけどそうでもなかったんやな、と思いました。」

宮野先輩「やったらそれを好きに変えればいいね。自分で決めれるもんな。それがいいところだと思う。これは無理やわと思ったら投げ出すことができるんよ、言ってしまえば。だからまあ何でもやってみてくださいって感じ。中2なら全然まだ時間はあるし、俺はもう結構迫られてる感じがするけど。からもう何でもやってみるもんだと思う。」

質問② 卒論の成功と失敗はあるの？

卒論を軸にした質問その2。自分が参加して聞いた卒論の研究発表会に、「こんな感じで大丈夫なの？」と不安になるような発表をした先輩がいらしたので、最も頼れる先輩に質問しておきたい！と思ったからである。

葛井「去年の三年の卒論発表をいくつか聞いたんですけど、あの、まあほとんどの先輩がめっちゃ長い発表をしてたんだけど、とある先輩の卒論で、一瞬で結論が出ちゃって、でも何もする必要ないじゃんって感じになってたからせっかくやし調査みたいなやつてみようっていうのをやっていたんですけど、あれって成功パターンとアウトパターンどっちになるのかな？ 俺的にはアウトパターンじゃないかなって思っているんですけど。」

宮野先輩「正直言うとその段階で○×はつけられへんと思う。これから次第だと思うで俺は。やし考えてたテーマは結論でるわけやん？ やったら結論でーへんよりも何十倍もマシやと思う。俺はだから、全然いいパターンというか全然成功に近いパターンなんだと思うし、まあそれから次第かな。まあそういうこと言われると、ネタ切れでもう書くこと無いみたいな状態なんか今みたいにまあまああるけど、新しい調査をしてそれを作り出そうとするわけよ。その人は、そこはまじで偉いと思う。俺はそんなことなかかなできるやつじゃないから、それはほんまにもうその人がすごい論文どうこうじゃなくて本当にそういうやつなんやな、と分かればええわ。」

葛井「先輩のテーマに関しては結論でない可能性の方が高そうなんですけど大丈夫なんですか？」

宮野先輩「はい、『笑い』の根本とか明らかにそういう感じなんやろうけど俺はあのね、たぶんやけど中3になったら言われると思うねんけど、目に見えないものはオスメシない。心理学とかそれこそ笑いだってそうだし、笑った感じで書いてたら見えるけど分かれへんやんか？普通に目には感情が見えへんやん。で、そういうのははっきり言って難しいです。やねんけど俺は目に見えんからこそ学ぶ価値があると思ったんよ。だって、この飲み物が食べ物やって言ったら食べ物になるような、哲学みたいな世界。わかってないよ、そっかわからんから試さないといけないのか、けど分からんからってこれを食べ物っていうのはおかしいやん？それをどうやって結論出すんですかっていうと本を読むこと、実際に研究する人が多いのか、なんか証明みたいな感じだから、その辺はまあ不明瞭なちよつと難しい言い方すると証明とかで例えたらもう本当に全く分からない状態だから、証明できたらなんかないって卒論うまく行きそうな気がしたのは俺だけかな？例えばその、恐竜が好きって言われたら恐竜の何を調べるんですかってなってくるよ。」

葛井「なんかこの前、大人向けの恐竜に関する本読んだけどそういうこと言ってたな。」

宮野先輩「そんな中で、著者がそうだから恐竜ってもアバウトすぎんねん。あの定義上めちゃうくや大きい分類になるから、例えばまあ言ってしまったらまあ動物やんか。動物っていうでかすぎるくくりの中で恐竜ってあるやろ。その中でさらに細かい分類とかがあって1種類1種類の名前があるから、例えば俺は知らんけどプレアノドンがあったりティラノサウルスがあったりするわけやんか。だから今はアバウトでいいと思うよ全然。でも今度は対象を絞って行かないと卒論にならないよ。まあ

そうなるともう一番前だからわかるようになってくると思うね。で下手したらその一万倍本当に読めるとかそういう問題じゃないから時間も限られてるし、それやったらもつと絞り込んだ方がいいでしょうって話になるから、一万倍とかまあさすがに盛り過ぎたけど、それをかけてもあまり意味ないと思う。なんでかっていうとそんなの誰が読むんですかってなるやん。そらそやるだつてまとまってい文章を読むのが俺はほんまに嫌いやねん。誰だつて嫌いだし、俺もたまに言い方回りくどくなったりするから人のことは言われへんけど、その十文字で表せることを百文字とかにして言われると俺は腹立つ。十文字で表せるやつをもつと詳しく説明しなさいとかそれが嫌いってこと。つまりその十文字で言ってる事と一万字で言ってることが同じやつたらそれ無駄じゃねってこと。つまりなるべくいらんとこ省いて一万枚を五枚とかにしてください、そのためには恐竜っていう大きな分野から、深く深掘りして行く必要があると思う。今回の論文の場合俺失敗してることになるけどその過程処理ができてなかった気がする。」

自分の専門的なツツコミイイイ！

僕は、話を聞きつつ、自分の専門的分野に関しては、容赦ないツツコミを入れたくなるものだ。なので、先輩であれ後輩であれ、違うことにははっきり違うと、述べるつもりだ。その意識がここで炸裂する！まあ、ある程度予想していた回答が来たけれど…

宮野先輩「まだ30分20分くらいは別に全然なんか知りたいことあったら俺で良ければ何でもございますって感じだけどなんかある？」

葛井「うんまあさっきの話でツツコミをいれると、まあ専門じゃないからどうしようも無いかもしれないですけど、ティラノサウルスは恐竜です。ですがプテラノドンも恐竜じゃないんです。実はそうなんですよ、爬虫類っていう分類でくくってしまえば全部一緒なんですけどね。」

宮野先輩「それは単なる俺の知識不足ですわ、すいません。」

葛井「普通に自然科学の棚にあるから探してほしいけれど今はそういうこと聞いている場合じゃないと。」

宮野先輩「そういうこと聞いている場合じゃないねうわーそれはちよつと俺の脳じゃちゃんと理解できません。だって、それこそ本当に好きな人じゃないと無理じゃん。」

葛井「好きな人ですら、その好きな恐竜だけとかそういうのだけで調べてまとめてたら絶対どこかでネタが尽きるっていうのも言ってる。で本当になんて言うんだろうな。あの自分の好きな恐竜も嫌いな恐竜も全部まとめて調べないといけないっていうのが俺の将来の夢、まあ恐竜学者なんですけど、でそれで求められるんじゃないかって。その論文で言ってる。」

宮野先輩「まあ論文読めるぐらい俺も待てるわけでもないんだけど、まあだからなんかすごいためになるなと感じはしてはいる。一応そういうのを一旦俺の質問に：うんなんかすごいそれる気がするしな。そんなわけで話変わります。ええつとなんだろうな、さっき聞いたことに対して突っ込ん

でもくれても良いしこれって何なんですかってことも良いしもっと具体的に教えてくださいますか？

質問③ 何の代表やりましたか？

僕は、現在卓球部の部長、生徒会、副代議員(EMR委員)を兼任している。そして、一年生の時は、スキー実習の実行委員もしていた。それを踏まえて、聞いておきたいこととして、この質問を考え

た。

葛井「先輩ってあの部長とか、生徒会立候補して失敗したけれども、それ以外で何か代表みたいなやつで立候補したりとかしたことあるんですか？」

宮野先輩「一年の頃に、えっと俺らは北海道行っただけ、その時の実行委員とかはやった。ちょっと話遡るし葛井が全然知ってる話じゃないんだけど、小学校の頃はね、俺、高学年は基本ずっと学級委員やってたから。最近行っただけ、なんやろ沖縄体験学習なんかの実行委員はやらなかったな。たぶん北海道の時もういいよってなったからやと思うんだけど、今グローバルのやつをやってます。三年はオーストラリアグローバル研修で…」

葛井「俺はその話聞いて思い出したんやけどスキー実習の実行委員もやって、でなんかあの去年は1年、3年合同で長野行っただったんですけど、なんか初日のホテル入所みたいなやつ

やったりあとはしおりの先生版の裏表紙を担当させてもらえたり、いろいろ経験あったなってなんか思い出しました。」

これ……質問？

この質問はそれこそ雑談に近い内容である。でも、降誕劇を二学期末にやるので、これだけは聞いておきたかった。（取材したときは中学二年生だった）なんだかんだ、降誕劇の感想を聞けてなかったからここで聞いておこうと思ったからだ。

葛井「あとは降誕劇に関する質問で、もうここまで来たらあの質問する個人に関するネタじゃなくて学校行事とかの普段話に近いんですけど、あのキャストの役やる上でなんか厳しかったりしたことがあったんですか？」

宮野先輩「厳しかったこと……これはあの前提で知ってるけど俺は降誕劇めっちゃ楽しかったんや。もういい思い出しかない、だからこそ俺はあの兵士の役をやらせてもらいました。」

葛井「してましたね。」

宮野先輩「あのキャストって大変なんだなと思ってたりするじゃん？ 見てるだけだったらいいけど、またちょつと話変わるけど……」

葛井「兵士は楽なのか」

宮野先輩「まあそれ言っちゃえばそうやね、楽や。だってセリフ少ないし、けど立ってるってこと

には変わりないじゃん、だから厳しいと思うだろ？ その厳しいことにぶち当たることって全然あると思うね。これから生きていく中でだけど、その時に楽しいと思えたら俺は勝ちだと思ってる。下を向かず上を向いて楽しいなって思えるような事に変えてしまえばいい。」

葛井「なるほどその辛いことも自分が楽しいと思ったら楽しいのか」

宮野先輩「なんでもだから、俺それこそ国語の授業苦手って言っただけ、まあ先生がおもしろいから俺は授業嫌いじゃない。全然勉強できるっていうよりは勉強もできないしテストも苦手だけど先生の授業が面白いからなんとかついてきてる感じがするところ。だからそういう嫌いなものでも嫌いだからこそ好きになる余地がある、そういう人になったらほんまにいいと思います。」

最後にパシヤリ！

さあ、取材が終わった！ 帰る帰り：いやちょっと待った！ まだ記念撮影が終わっていないではないか！ えー、別に後日でもいいじゃん。いや後日っていつだよ！ …そんな葛藤なんてなかったのが。話を戻すと、実はこれが最初で最後の記念撮影かもしれない。ちょっと名残惜しいな…

葛井「ありがとうございます。私的にはこれぐらいで、最後記念撮影みたいなやつたほうがいいと思うんです。いいですか？」

宮野先輩「いいよー」

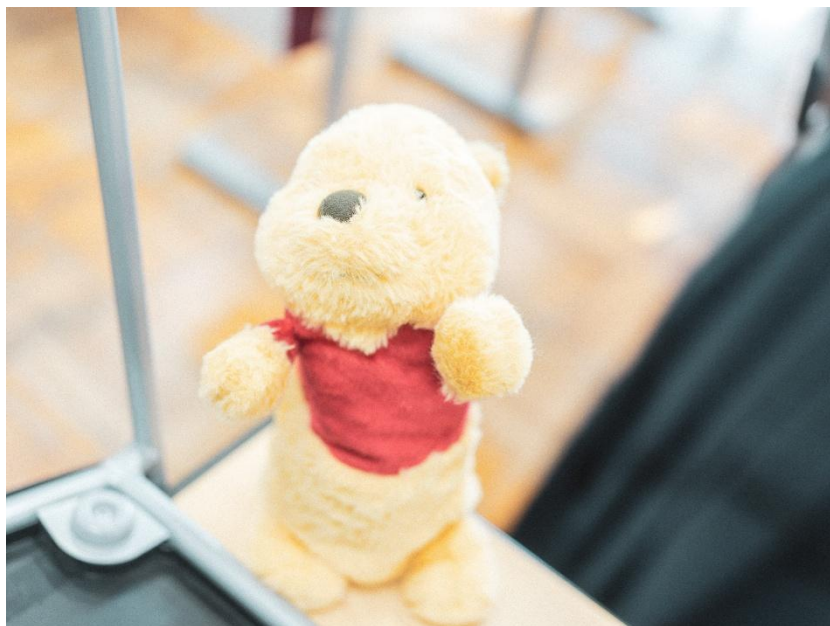
パシャリ！ 教室での取材に応じてくださりありがとうございました！

取材を終えて

取材を今回は卓球部副部長の宮野脩介先輩を相手に行った。思っていたより自分の質問が少なく、話が続きにくいことがわかった。もっと質問を考えておけばよかった。しかし、アドリブとは言え、質問をして話を聞いていくと、先輩のポリシー？ みたいなものが見えてきた気がする。そのポリシーは、しっかりと自分の意見を持っている人だな、と思った。（本当にそれがポリシーなのかかわからないが…）

なお、後から見返してみると、意外と取材中に敬語を使い忘れていたところが多々あったので、これからも気を付けていきたいと思った。また、先輩に取材する前と後で、印象が少し変わった。どういうことかという、前は、部活でも親しみやすい先輩という印象だが、先輩の取材記録や、実際に取材したことを踏まえると、なんでも前に出てやりたいことをやる人なんだな、という印象だったし、もしかしたらそれが「キラキラ」の理由ではないのかな、と思いました。（キラキラに関する取材箇所が消えてしまったので、実際にはどうだったかはわからないが…）





これからの私に必要なこと

聞き手 鈴崎心

取材の動機

私が魅力を感じる人は叔母である。叔母は4人の子ども（高校二年生、中学二年生、小学六年生、小学三年生）の母親であり、看護師でもある。叔母は私の母の妹で、現在、横浜に住んでいる。叔母と私の関わりは私が赤ちゃんの頃から深い。

母は私を出産してから「産後うつ」になってしまい、生後間もなくから半年にわたり、母の実家がある横浜に私を連れて滞在していた。その間、母は服薬のため授乳ができなかったので、丁度、同じ時期に出産をしていた叔母が、母の代わりに私に授乳をしてくれていた。その為、叔母は私にとって「乳母」でもある。

叔母は明るくて優しい人で、私が家族と横浜に訪れた時もいつも笑顔で迎えてくれる。また、行動力があり、人のお世話をするのが好きである。叔母が、看護師になった理由も人のお世話をした、人の役に立ちたいと言う気持ちからだったそうだ。

私が、叔母のすごいと思うところは4人の子供を育てながら、看護師として働いているということである。

私も将来、医療系の仕事に就きたいと考えているため、現在看護師をしている叔母になぜ看護師になろうとしたのか、どうやって看護師になったのか、看護師をしていて感じるやりがい、大変なところ、看護師に必要なことなどを聞こうと思い叔母に取材することにした。

叔母は前文でも書いた通り横浜に住んでいるので、対面することが難しい。

なので、LINEで私から「由良さん こんにちは 毎日暑いですが、お元気ですか？ 夏休みの宿題で『魅力を感じる人』にインタビューをするものがあって、由良さんに取材をしたいのですがいつ頃でしたらお時間取っていただけますか？」と、総合学習の先生からの添え状と一緒に送ったところ、驚いた様子で電話をかけてきた。由良さんは「本当に私でいいの？ 私じゃなくて他にも魅力的な人がいるんじゃない？」など、照れたように笑っていたが「それでも私にインタビューするなら私も協力するよ」と言ってくれた。

取材概要

日時…2024年8月16日 9時53分～11時3分

場所…家の和室（オンライン）

取材した方…小児科のクリニックで働く由良さん

自分との関係…叔母

由良さんと相談した結果、Zoomで取材することに決まった。私はすぐにタブレットでZoomを立ち上げて、総合学習用のノート、筆記用具、ボイスレコーダー、スマートフォンを持って由良さんを待った。その間ずっと緊張していて手汗が出てきていた。

しばらくして由良さんが入ってきて取材が始まった。「よろしくね」と由良さんは明るく挨拶をして、私も「よろしくお願いします」と挨拶をした。緊張で戸惑いながらも、質問を始めた。

看護師になるまで

私「由良さんはなぜ看護師になろうと思ったのですか？」

これに対して由良さんは優しく明るい声で、

叔母「人のお世話をするのが子どもの時から好きだったからかな。私は子どもが好きだったから最初は幼稚園の先生になりたいなと思ってたんだけど、おままちゃん（由良さんのおば）のお世話のためにホーム看護師さんが来てくれたんだけど、それを見て看護師っていう仕事も良いなと思ってたんだよね。いろんな年齢の人の手助けがしたいなと思ってた時に看護師がいらって思ったんだよね。」

由良さんらしいなと思い、相槌を打ちながらメモをとった。

私「では、看護師になって大変なことはなんですか？ 母親としての仕事との両立もあったでしょうし。」

うーんと悩むような声を出しながら由良さんは、

叔母「そうですね、今私はパートで週何回かで、午前だけとか、午後だけとか短い時間で働けるから、今の働き方だと子供達が学校に行ってる時間とかに働けるし、逆に仕事がない時間にご飯とかを作るからあんまり大変さは感じないけど、入院とかする病院は大変だろうなと思うけどね。」

働き方もいろいろあるんだなと私はメモを取った。

すると由良さんが、大変そうだねと画面越しに笑いながら心配してくれた。私は、びっくりしたと同時に、少し気が楽になった気がした。そして、すぐに質問にもどった。

私「ありがとうございます。私は、将来医療系の仕事に就きたいと考えているのですが、由良さん

はどうやって看護師になったのですか？」

叔母「えっとね、私は高校を卒業した後、看護専門学校に3年間行って看護の勉強とか病院実習をして看護師の国家試験を受けて、卒業と同時に、国立の小児専門病院に就職しました。」

これを聞いて私は、看護師には国家資格が必要ということを知ってやはり医療系の仕事は一筋縄ではいかないのかなと思った。

私「ありがとうございます。では、看護師をやっていて感じるやりがいは何ですか？ 心構えとか。」

躓いてしまったと焦っていると、由良さんは話をスムーズに繋げてくださって、

叔母「うーん、やりがいはいっぱい患者さんとかその家族の必要に応えられた時に安心した表情を見せてくれた時に、役に立って良かったなって思うことかな。だから、自分が人の役に立つことができるというのがやりがいかな。」

叔母「でも、人の命を預かってるから緊張感はあるね。」

やっぱり命に関わってるから間違っちゃいけないという緊張はするんだなと思い、由良さんのいつもの柔らかい雰囲気と看護師の由良さんの雰囲気の違いがすごく驚いた。

これからの私

私「では最後に、私が看護師になるために必要なものとか、しておいた方が良いことはなんですか？ 由良さんがしたこととか。」

私はできないことばかりだが、今の私にできることがあればなんでもやっておきたい、少しでも看護師になれる確率を高めたいと思い質問した。

叔母「うーん… そうだな、私は英語をもう少し勉強しといたほうが良かったな、今は外国の患者さんもいるからね。」

私はこの時とても焦った。なぜなら私は英語が少し… いやかなり苦手だったからである。そんな私の気持ちを読み取ったのか由良さんは、

叔母「大丈夫、言葉は話せなくても背中をトントンってやさしく叩いたり、摩ってあげて安心させてあげることもできるから。ただ、英語を喋れた方が相手に寄り添いやすいってことだね。」と言っていてくださった。

叔母「あと、自分のこうだって言う意見に固めるんじゃないなくて、決めつけるんじゃないなくて、もしかしたら患者さんはこう思ってるのかもしれないとか、いろんな考え方や捉え方をする事かな。例えば患者さんとその親が遅れて来た時とか、ただ単になんで遅れたんですかって怒るんじゃないくて、相手の立場になって考えることがすごく大事だなんて思ってます。相手の話を聞くことで、あっそういうふうに思ってたんだってなることも珍しくないからね。」

私「なるほど、ありがとうございます。」

取材を終えてからも、家族同士の様子や最近あったことなど話をして zoom を閉じた。

由良さんの「魅力」は「明るくて行動力があることだと思う。取材相手に選んだ時は、漠然と「看護師になろうとしたから魅力的」という感覚しかなかった。しかし、いざ取材をして由良さんと話していると、私が話に詰まってしまった時に話を少しずらして緊張をほぐしたり、ゆっくりで良いよと

言ってくれたりしました。そういうふうになる、かつ優しく振る舞うことで相手との会話もうまくできると感動した。また、取材をさせて欲しいとお願いした時はすぐ動いてくれた行動力もすごかった。

取材をして私が今行った方が良くも知ることができた。勉強をする上で、目標を立てることはとても大事なことで私の伸び代を知ることができる大切な機会となった。

「最後に写真を撮らせてもらっても良いですか？」と聞くと、

「いいよ、撮ろ」と言ってくれた。





My Mother

聞き手 山本優心

山本親子

僕が魅力を感じる人とは自分が持っていないなにかを持っている人である。「なにか」とは決断力や行動力、考え方などである。尊敬に近いものかもしれない。僕はまだまだ子供で、未熟なところがいっぱいある。だから魅力を感じる人はたくさんいるわけだ。たくさんの、魅力を感じる人から悩みに悩んだ結果、僕は自分のお母さんを取材することにした。

母は三姉妹の次女だ。お母さんのお姉さんや妹さんには何十回と会って思ったことは、母はそれの中でしつかりもので、すこし変わっているということだ。自分の母以外のおうちのお母さんは知らないのだなんとも言うことができないが、僕が母を見る時はだいたい眠っているし、僕からすればどうでもいい信じられないスピリチュアル？と呼ばれる占いのような動画を見ている。僕はその動画を見るとイライラしてしまう。母がそれを信じているかはわからない。僕が大事に使っていたものをなくして探していたときは、母は一発で場所をあててみせた。すごすぎてなぜか悔しくなった。どうしてわかったのだろうか？と今も思っている。そんな母は昔、証券会社で働いていたといつの日か話してくれた。証券会社に入った理由も聞きたい。

・母

三姉妹の次女。愛知県生まれ。病院勤め。いつも寝ているように見えるのに、いつのまにか家事を終わらせて、いつのまにかご飯をつくってくれている。株式投資をしている。しっかりしていると引き抜けているときの差が激しい。子供のころの話などをきいてみたい

取材概要

取材場所…家

日時…8月21日22時

取材相手…山本あけみ

自分との関係…親子

取材開始

自「今日は時間とってくれてありがとう。早速質問するね。なんで証券会社に入ったの？」

母「お母さんは四年制大学じゃなくて短期大学を出てるんだけど、そこでの成績が一番だったから『いいところを推薦します』って言われて証券会社を紹介してもらった。それでも就職できるわけじゃなくて、面接を受けて合格ですって言われてやっと入れたんだけど。何故その証券会社を受けてみようかなって思ったっていうことだね。」

自「推薦されたっていうのはわかった。推薦された上で、その、別に推薦を蹴って別の会社に進むこともできちゃうわけじゃん。」

母「うん。その内定も銀行とか信用金庫とかもらったかな。あんまり覚えてないんだけど当時あのバブルが弾けまして、就職できない人がいっぱいいた。あの卒業間近まで決まらなかったお友達とかもいたし結構厳しかったんだけど。」

自「あんまり大学のシステムは分からないけど。」

母「とりあえず成績よかったら推薦してくれる。一応学校の顔っていう形だから、学校側も成績悪い子とか、素行の悪い子は紹介できないじゃない。入ったけどすぐ辞めちゃうとか。まあそういう人中にはいるから、そういうことも踏まえて推薦してもらえたのかなと思うんだけど。証券会社に決めたのは、安定してる大企業だったからかな。」

自「安定した収入を得るために？」

母「そうだね。そういうのもあったし、中学校の時に興味のある仕事はありますかっていうので、あのいろいろ職業を調べて、証券会社って面白そうだなって思ったことがあったの。それもきつかけの一つかな。お金好きだから笑。話戻るけど、最終的に残ってたのが銀行と証券会社で。」

自「銀行と証券会社の違いが分かんない。」

母「どっちも金融機関なんだけど、証券会社は証券を扱っているところ。例えばオリエンタルランドとかあるじゃん。取引上の管理をしている、管理っていうか。」

自「売買？」

母「そう。就職を決める時いろんな人に相談してどっちが良いのって相談して、最終的に銀行の最終面接の時に、『実はあの〇〇証券に受かってます。』って言ったら面接官の方に『ぜひそっちに行くべきだ。』あなたは正直ですね。」みたいに言われて最終的に決めた。」

自「なるほど！」

母「全然規模が違ったから銀行と証券で。全国にあるような銀行じゃなくて、地方にあるなんか中小銀行？ 愛知だったら愛知銀行とか、その地方にしかない銀行だった。」

自「全国展開しているわけじゃないってことね。なるほど。」

母「そんな感じの銀行だったからどっちかっていったら証券会社かなと。多分お給料もたぶん証券会社の方が良かったし。いろんな人の勧めもあって証券会社に決めたの。」

自「証券会社が大阪にあったから大阪に来たの？」

母「そういうわけじゃない。いやあの就職した時は愛知にいたよ。」

自「転勤？」

母「いやいや結婚を機にやめて大阪に来たから、大阪に来た理由としては違うかな。」

自「じゃあ関係はないと。」

母「関係はないかな。」

母が銀行に就職した理由など、今まで全く知らず、初めて聞いて驚いた。

母と母の姉妹

母には姉と妹がいる。次に、その2人との関係を聞いて見ることにした。

自「H（母の妹）とM（母の姉）とのエピソードとかある？ 話変わっちゃうけど、お母さんって三姉妹の次女じゃん。最初全然違うと思ってたんだよね。Hが一番上でMが真ん中でお母さんが下だと思ってた。」

母「まあ雰囲気的に言ったらそうなのかな。Mの中身は少女だから若い時からそうだった。私とMはね年子なの。」

自「年子？」

母「五年生・六年生って感じ。学年が一個しか変わらなくて。Mが六年生、私が五年生、Hが一年生っていう感じ。Mとは結構なんか毎日喧嘩しちゃってね。」

自「どういうことで喧嘩したの？ 僕とお兄ちゃんみたいな感じ？」

母「もう何喧嘩したか覚えてないけど、そんな感じかな。Hは年が離れていたから介入せずみたいな感じ。エピソードはもう覚えてないかな。まあでも最近は何いかな。」

自「そうね。見ていてそう思う。姉妹がいて良かったと思うことは？」

母「気軽に相談できることかな。姉妹がいてよかったなっと思う。なんかあった時相談できるし、しばらく連絡とってなくても、『やあ』って言えるし。別に気遣わずにいつでも受け入れてもらえる関係。」

母が自分と兄のように喧嘩をしていたなんて全く想像がつかない。
続いてお祖母や祖父との関係について聞くことにした。

母と祖父母

自「続きまして、おじいちゃんおばちゃんと喧嘩はした？」

母「喧嘩かー。そりゃしたよ。」

自「おばあちゃん不思議な感じだからあんまりイメージはできないや。」

母「昔はめっちゃもうよく怒られてたよ。お母さんも勉強しなさいってよく言われていたし。」

自「お母さんが言ってるやつ。」

母「最近言わないでしょ？」

自「うん言わなくなっただね。喧嘩っていうかねお兄ちゃんとお母さんみたいな？」

母「そんな喧嘩じゃないかな、うん。勉強しなさいとは言われた。東大生は勉強しなさいって言われたことないっていう。」

自「東大生は関係ないでしょ 笑。えっと次は、お兄ちゃんと僕の印象は？」

母「うーんとね、足して2で割りたいかな。」

自「えっ、一人ずついうとしたら？」

母「私が産んだ2人とは思えないぐらい対照的っていうか性格が全然違うよね。お兄ちゃんは結構活発というか行動的というか。自分のやりたいことが決まっている。何か決まればやることやる子で、やりたいことはやっちゃう子。周りが何を言おうとやっちゃう頑固さ。頑固さというか、強さを持つてる。お父さん似かな。あなたはあなたで頑固なのよ。」

自「頑固じゃないよ 笑」

母「頑固っていう括りで同じにできるんだけど、頑固さが違うじゃない。お母さんの中ではあなたたち2人ともお父さん似たなあっていうふうには思わない。あなたはおじいちゃんの家系の顔なんだなって思ったけど、性格は全然そんなことなくて、見てたら性格それぞれ良さがある。」

自「まあ2で割りたいと。」

母「片付けとかでも対照的だったのが、小学校の時の図工のバッグがあつたでしょ？ あのバッグお兄ちゃんはクレヨンの油が全部付いて汚れちゃってるんだけど、あなたは綺麗に並べてて、この違いはなんだろうなあと思ったね。最初お兄ちゃんの片付けができないのは私のせいだと思ってたんだけど、あなたは片付けができるからね。だから私のせいではないと思った 笑。それぞれの良さがあるから。お兄ちゃんのものなくして『お母さんあれどこ？』って聞いて『それってどこどこにあるん

じゃないの』って言ったらあったみたいな感じになるから」

自「その特殊能力みたいなやつ勘なの？」

母「勘じゃないかな？」

僕や兄の印象は思っていたものよりもいいもので、嬉しかった。

自「次は、子育てでしんどかったことは？」

母「疲れた時はあったかな。お兄ちゃんが寝ないときはお父さんが夜中ずっと抱っこよ。お母さん
腱鞘炎だったからね。」

自「腱鞘炎？」

母「赤ちゃんをずっと抱っこしてたら手首がブルってなって、筋を痛めて炎症を起こして出産して
2週間ぐらいで。クツションかったりとか。ダイニングテーブルの上に置いておいて授乳したとかそ
ういうことはしてたかな。大変だったね。そんな感じかなー。お兄ちゃん結構大きく生まれたか
ら。」

子育ての大変さはまだまだ僕にはわからないが、簡単なものではないとわかる話だった。育ててく
れてありがとう。

自「次にいくね。お母さんの人生で印象に残っていることは？」

母「いっちゃうとやっぱ就職かな。まあ節目だしね。節目だし結構なんか自分が思ってた以上の所に就職ができたっていうので、結構嬉しかった。それとあとなんかひょんなところからお父さんと知り合って、コロナのときにちよつといういろいろあつてっていう。一番辛かったのはそこかな。そんなもん。」

自「30分ぐらい話してるね。文字がこんなに。」

文字起こしの文字の量を見て、僕は思わず口にして驚いてしまった。

母「こんなのでお母さんが魅力ある人になるのかな。」

自「そうなるように作るね笑。おばあちゃんといつも何話してるの？」

母「ご飯食べてる？とか。」

自「なんか『お母さんちゃんにご飯作ってくれてる？』電話で話したら毎回同じことを聞いてくる。」

母「それがおばあちゃんだから。それもねおばあちゃんのいいところ。常に人の心配してくれてる。そんな感じかな。こんなんで大丈夫？」

自「僕の幼少期のエピソードなんかあるなら！」

母「あ、そうそう。あなたとお兄ちゃんの足して二で割りたい。まあでも私の子にしては素晴らしい子だよっちも。まあそれぞれ素晴らしいところがあるから、そこが重なったら、さらに素晴らしい人間ができるんだろうなと思うけど。それぞれにいいところがあるからね。

優心は人の気持ちを考えながら実際に行動ができるし、こうしてる人の上に立つこともできるし、小学校の時は結構上手だったのに、最近はずっと大人になってから、言葉が少なくなっただのかもしれないけど。ちゃんと考えられることなんだなあと思って。人を説得できるんだなど、伝える力がすごくある子だなと思うてる。」

自「そうだ、一個あれだ言ってるないんだっけ。あれだ。僕がおでこの怪我した時どう思った？ 小学五年生の誕生日に僕が駅で頭打った時。」

自分は小学五年生の時、頭を強く打ち何針か縫う大怪我をした。

母「別にあのお父さんがゆったような原因で怪我をした後は全く思っていないから。」

自「父さんは何て言ってたの？」

母「やさぐれてた。」

自「やさぐれるってどういういみ？」

母「自暴自棄とかふてくされてるとか。そんな自暴自棄で壁にぶつかるほど追い詰められてたわけじゃないでしょ笑。お母さんは子供は怪我するもんだって思ってるから。お兄ちゃん見てたらわかるでしょ？」

自「お兄ちゃんびつくりするぐらい骨折してたよね。全力で鬼ごっこしてて骨折？」

兄は小学校の時よく怪我をしていた。

母「ひび入っただけだよ。」

自「階段から落ちたやつは？」

母「あれも違うかな。」

自「自転車でふっ飛ばされて全身打撲。」

母「折れてないんだよね。」

自「ものすごくじょうぶなんだね。バレーボールしててボールに頭ぶったやつも？」

母「運ばれただけでなにもない。」

自「扉蹴って弁償したやつは？」

母「怪我はしてない。だから頑丈なんだなって思う。いろいろやらせてたけど、ほとんど大きな怪我はない。見た目は衝撃でも、ほぼほぼ無傷なんだっていう。そんなあ強運の持ち主です。兄はすご

いです。」

自「おでこの続き。どう思った？」

母「どう思ったってどういう。」

自「何してんだこいつは！ とかあるじゃん。」

母「何してんだこいつ。笑」

自「いや例えだよ。」

母「あーでもびっくりしたけどね。」

自「もうあの時の記憶があんまりなくて。病院で縫ってもらった後に、ものすごい頭痛がしながら学校に行ったところだけ覚えてるんだよ。頭打って助けられてからの記憶あんまなくて。お母さんに連絡が言ってるのかもわからないし。」

母「生徒手帳とか児童書とかみたいなの。駅員さんから電話かかってきたから。」

自「僕がいったのかな？」

母「言ったんじゃないのかな？ ちゃんと覚えてたんだろうね。素晴らしい。」

電話がかかってきたから迎えに行つて、迎えに行く時にどこの病院に連れて行つたらいいのかをかずきママ(友達のお母様)に聞いて、形成外科に連れて行きなつて言われて。だいぶ傷消えてきたね。

聞いたときはびっくりしたね。」

自「僕もびっくり」

母「怪我したことより、お父さんがあそこまで助けてくれた人にお菓子を渡そうとかしたことにびっくりしたかな。まあ気持ちはわかるよ。優心君を事務室まで連れてってくれたりとかしていただいたから。」

自「優しかったなあのおじさん。」

母「小学五年生のあなたに連絡先聞いとけっていうのはちょっと無理だったから。」

でもやっぱり、なんか躍起になって毎日一緒に1週間行ったのはちょっとびっくりだったかな。怪我をしたその後のお父さんの行動にお母さんびっくりしてしまった。」

自「来てた気がする。」

僕が知らなかった話がたくさん出てきて驚きだ。

自「次はね。スピリチュアルの動画なんで見ろの？」

母「いろんなことが立て続けに起こって、多分タロットとか占いで見て気晴らしとか。そういうのに繋がってたんじゃないかな。でも結局それ見ても別に言ってるだけだから。」

そうなんだって思うけど、言われたから百度参り行こうとかいうふうには全くならないね。まあだから気休めの笑。見なきゃいいって言われちゃうのもまあごもつともなんだけどだけど。別に占いとかがすごい市場だと思うよ。ブームでもあるだろうね。」

自「スピリチュアルの動画僕は嫌いかな。見ててあきらかに胡散臭いって思っちゃう。カードで何がわかるっていうんだって。」

母「第六感的なもの？　なのかな。」

自「そろそろ遅くなってきたし終わりにさせてもらおうかな。」

母「そうだね。こんなので魅力的な取材になるのかな。笑」

自「そう伝わるように頑張ってまとめます！」

母「ほかの宿題も早く終わらせなよ。」

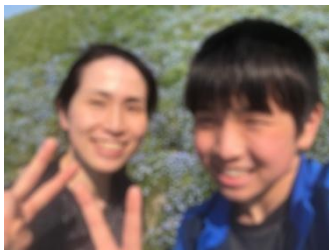
自「はい。じゃあ今日はありがとうね。」

これで1時間にもなった取材は終わりだ。

取材を終えて

僕に知らなかった母の話がたくさん聞いて驚くことがたくさんあった。

普段から接している母への取材ということで緊張もあったが、無事に終わることができてよかった。





自分の意思を持てるかっことよさ

聞き手 山下ここ

今回の取材相手に選んだのは、同じソフトテニス部に所属している、三好まほこさんだ。

私が思うまほこさんの魅力は、「テニスに真剣に取り組んでいるところ」「部活と学業を両立しているところ」「励ましの言葉やアドバイスの仕方が的確なところ」この3点に特に魅力を感じるため、取材しようと思う。

理由の一つ目の「テニスに真剣に取り組んでいる」と感じたのは、日々の部活の中で、自分がコートに入っていない時でも、みんなの後ろでトスや素振りなどを自分のフォームを確認しながら、練習していた。その時私はみんなと話しながらボール拾いをして休憩していた。私はまほこさんがみんなより努力して上手くなろうとしている姿に感動した。

二つ目の「部活と学業を両立しているところ」と感じたのは、二年間Ⅱ類クラスの成績をキープしながら英検2級を持っていて、その上定期テストでは一度も追試を取っていないと聞いた時だ。でも、部活を減多に休むことなく、夏休みもほとんど毎日部活に来ていた。部活中も部活後の勉強も、何事にも真剣に取り組んでいる姿に、私は「かっこいい」と感じた。

三つ目の「励ましの言葉やアドバイスの仕方が的確」と感じたのは、2年になって初めての試合に出るメンバーを決める部活内で試合をした時に、私とまほこのペアが負けてしまい私は悔しくて泣い

てしまった。でも、まほは私に「めっちゃいい試合やった。今回は負けてしまったけど、次の試合までに2年の中で飛び抜けて上手くなる」と、笑顔で私の背中を押してくれた。その後も上手くなるためにどんな練習が必要なのか、どうすれば勝っていけるのかなどたくさん話し合い、次の部内戦では勝つことができた。他にも、いつもの部活の中で私や他の2年にも「こうすれば上手く打てるんじゃない?」と的確なアドバイスをしてくれる。いつも周りのこと見て一人一人に寄り添ってアドバイスできるところがすごいなと感じる。

私は、何事にも真剣に取り組めてみんなに寄り添ってくれ、いつも笑顔でかわいいまほちゃんとペアを組むことができて、とても嬉しい。ペアを組んでいるのだからまほさんの足を引っ張らないように私も頑張ろうと思った。今回はこの3点に重点を置き取材したい。

○取材概要

日時 2024年9月7日土曜日 18時30分～19時

場所 スターバックス

取材相手 三好まほさん

自分との関係 テニスのペア

○インタビューが始まるまで

今日は試合で学校を公欠した。二人で決めた「年内で市民大会ベスト8」という目標を今日達成した。思っていたより早く達成して二人でとても喜んだ。「次こそ優勝！」と新しい目標を立てたあと、取材のため、天王寺へ行った。まだまだ時間があつたので、プリクラを撮って、世間話をしていたらあつという間に時間が経った。そろそろスタバへ移動し、取材をすることにした。

移動している数分の間お互い緊張して無言で歩いていた。スタバに着き飲み物を注文した。そして取材をする時がきた。

○部活に対しての思い

私「めっちゃ突然やけど部活はまほこにとってどういう存在？」

まほこ「えーなんか体育以外でなかなか運動せんから、体育以外の運動っていうのと、小学校低学年ぐらいに一回硬式のテニス習ってたから好きなスポーツって感じかなー」

私「部活に取り組んでいる時の気持ちはどんな気持ち？」

まほこ「だからだやっても意味ないから、毎日目標を作って達成させるぞ!!っていう気持ちで取り組んでるかなー。一球一球自分の苦手なところを意識して打つようにしてる」

私はとりあえず部活に参加して、みんなで楽しめたらいいかなーぐらいでテニスをはじめた。

でも、たった二つの質問でまほこのテニスへの本気さがとても伝わってきた。これからしていく質問の答えを聞くのが楽しみなようになってきた。

私「まほこの最終的な目標は何？」

まほこ「最終的な目標はねーやつぱり、市民大会優勝かなチャペルで表彰されてみたいもん笑」

私「わかるわかる笑 表彰されてみたいよな笑」

まほこ「やんなみんなの前で表彰されて女テニスすごいんやぞって見せつきたいよな笑」

私はまほこのかわいらしい理由に驚いた。ここでもやはり、部活全体のことを考えている。私なら「私とまほこのペアはすごいんやぞって見せつきたい」言ってしまう。些細なことだが、まほこはいつでも部活全体について考えていることにまた感動した。次は動機レポートで挙げた三つのことを聞くことにした。

○真剣に取り組む背景

私「理由の一つ目の、テニスに真剣に取り組んでいるところって感じたのは、みんなが休憩してる時でも、まほはサーブ練習とか自分のフォームを確認しながら素振りしてるところを見て、私はかつ

こいいな、すごいなと思ったねん。みんなが休憩してる時も練習してる時はどんなことを思っ
て練習してるん？」

まほこ「入りたての頃は、その待ってる時間がめっちゃ暇やって、ならその時間みんなより上手
くなってやろう!! って思ったんよ。まずは、自分の悪いところを探そうっていうのから始まって、
今日あんまサーブ入らんとか、今日めっちゃ調子悪いとかいう時は、トスの練習とか素振りとか
をし始めて、そこから先輩みたいに鋭いボールそして早いボールを打てるようになってい
たい!! と思っ
て、先輩の見様見真似で練習してる感じかな」

入部したてから、技術面に対して考え、行動していたのは初めて耳にした。まほこはコーチにも認
められるぐらいの技術を持っている。入部したてからの努力が今につながっているんだなと感じた。

私「入部したての頃と今やったらその気持ちは変わってない？」

少し、間が空いた。

まほこ「え！今考えたらめっちゃ変わってるかも！入部したての頃は、学業優先でゆるくー
やろうと思っ
てし、地区大会ベストエイトとかも全然目指してなかったし、あわよくば勝てたらいい

なーみたいな感じやったねんけど、初めての練習試合の時に勝ち進めたから、（これはもしかしたらいけるんじゃない？）っ思って笑、部活に火がついた感じ。今は、後輩が入ってきてから、自分たちが勝ち進んでる姿を見せていきたいっていう気持ちが強いかな。」

私「まほが思っかつこいい先輩はどういう姿？」

まほこ「んー、ちゃんと自分の意見があるんやけど、他の人の意見とかをしつかり聞いて、みんなの意見を一つにまとめ上げれる人はかつこいいと思う。例えば、練習メニューを計画する時、先輩が全部決めるんじゃないかって後輩にも意見を聞いて、それも含めて時間内に収めれるとか。」

私「まほこはどういう先輩になりたい？」

まほこ「やつぱり、憧れるような先輩になりたい!! だから今日、ベスト8行けたところを1年生に見せれよかつたかな」

自分たちだけがうまくなってベスト〇〇を取れたらいいってゆう考えではなく、後輩に自分たちが勝ち上がってる姿を見せて、「1年生でもこういう風に勝っていけるんやで」という風に、自分たちが後輩のモチベーションを作っていきたいという考えに驚いた。こんなにも部活全体のことを考えているのは本当にまほこだけだと思っ。

○学業との両立について

私「次の、部活と学業を両立しているってゆう質問なんやけど、部活の後疲れてるやん。どうやって気持ちを切り替えて勉強してる？」

まほこ「通常授業で部活ある日は、家帰ったら7時とかやねん。だから、もうそっからはゆつくりして、晩御飯食べて、お風呂とか色々終わらせて、そこからやろう！　っていう気持ちになる。別に気持ちの入れ替えとかは無いかな。満腹になったらめっちゃやる気が出てくる 笑」

私「でも、お腹いっぱいになったら眠くなるくない？ 笑」

まほこ「わかる!! やけど、翌日にまでの課題とかあったら頑張ってる。切り替えとかは特にないけど、『やばい!! 明日提出しないと、居残りになる!! 部活に行けない!!』みたいな感じ。絶対部活だけはいきたいから頑張れる 笑」

私「部活と学業を両立する上でまほこが大切だと思うことある？」

まほこ「清教では、文武両道ってゆうのが方針やん。そういうところが良いなって思ってた学校やから、自分が決めた道なんやから、自分で決めたことぐらいは全力で頑張るってゆうことを大切にしているかな。高校生になったら大学受験もあるわけやから、今のうちからがんばらな、これから内容難しくなったら、追いつけない可能性もあるやろうから、そう考えたら今のうちにがんばって成績上げておこってる。」

私「大学受験って言ってたけど、将来の姿とかは想像してるん？」

まほこ「今はマジで全くない笑 小学三年生ぐらいまでは、デザインすることが好きやったから、デザイナーになりたいなどか思ってたんだけどなんか違うなーって感じて。今はまだ夢ってゆうのは決まってるかなーでも、夢が決まってるからこそ今を自分が出せる全力で頑張らなあかんと思う。」

私「じゃあ、なんでも真剣に取り組んでるのがまほこのいいところやと思うねんな、真剣に取り組むのに一番必要な気持ちやなんやと思う？」

まほこ「勉強やったら、自分がどこらへんの順位を取りたいかによって勉強量変わってくるし、テニスでもどの辺の順位にいたいかによって変わってくるやん。でも、何においても、目標を立てて、自分が決めたことなんやから、自分が決めたことぐらいは全力で頑張ることが大切やし、当たり前やと思う。」

私は「今を一生懸命にがんばる」という、まほこの考えが心に刺さった。私は「将来やりたいこと決まってから行動しよー」という考えだった。でも、まほこは「自分で決めたことぐらいは全力で頑張る」と言っていた。自分の意思をしっかりと持ってそのこと一つ一つに責任感を持っている姿に私は、とても感動した。

○アドバイスの大切さ

私「じゃあ、3つ目の、励ましや言葉のアドバイスが的確いうのを感じたのは、二年になって初めての部内戦に負けてしまって、私が泣いてしまったやん。その時にまほこが励ましてくれたから、負けてずっとクヨクヨしてるんじゃないくて、これから頑張ろうと思えたねん。まほは負けた時、私を励ましている時はどんな気持ちやった？」

私はまほことテニスでペアを組んでいる。私たちは二年になって初めての新人戦に出場するメンバーを決める部内戦で負けてしまい、その新人戦に出ることが出来なかった。そこで私は悔しさのあまり泣いてしまった。

まほこ「なんか自分は、今回の部内戦はトランプのババ抜きとかそういうのをしてる感覚で、ババ抜きって運ゲーって感じやん。もちろん、本番の試合で負けたら悔しいけど、この新人戦に出れなくても次チャンスがあるし、実際試合中にいいボールが打てたら負けでもいい試合やったって思えるし、自分が決めた目標をその日達成できたなら、その結果が負けでも、いい結果やと思えるし、もっと練習して実力を付けたいっていう気持ちも、人一倍芽生えるからあの試合は、自分の中ではほんまにいい経験やなって思える。しかも、この試合に出れなかったとしても、その試合に出る人を支えるっていうほうに回れるから、それもそれで良い社会勉強になるかなって思えた。」

試合の勝ち負けじゃなく試合の内容を大切にしているというのは初めて聞いた。とても尊敬した。私は「勝つ」ということばかり考えてしまっていた。もちろん勝つことは大切だが、試合の内容を大切に出来るのはとてもすばらしいと感じた。

私「じゃあ、アドバイスをする上で大切にしているポイントは何？」

まほこ「自分が試合に出てる側やったらどんなアドバイスをされたら嬉しいかなってゆうことを考えて、アドバイスをするようにしてるかな。あとは、部活中や試合の中で、先輩からアドバイスや励ましの言葉をかけてくれたのが純粹に嬉しかったしめっちゃ参考になった。」

私「じゃあ、一年の頃と二年の頃では部活に対しての思いはどんなふうに変化してると思う？」

まほこ「二年になってからは、自分たちの代が中心になって行くわけやから、責任感とかは強くなったし、後輩にも見られてるから、自分の行動がお手本になろうとは思えるようになったかな。」

私「まほこは実際に先輩方にアドバイスしてもらって、いい試合の結果や練習の結果が残せたエピソードみたいなのある？」

まほこ「今の高一の先輩がめっちゃ的確なアドバイスしてくれて、そのおかげで、できるようになったことがいっぱいあるから自分も先輩のように的確なアドバイスができるようになりたいと思えた。やから、先輩みたいなアドバイスしたいっていう憧れで今、アドバイスしてるって感じかな。」

○今後の部活や勉強の取り組み

私「じゃあ、これでこの三つの質問終わるんやけど最後に、これからどういう風に部活や勉強を頑張っていきたい？」

まほこ「勉強最近成績が下がってるから笑 一年の時みたいになテスト2週間前から、自習室とか積極的に使って勉強して行きたいし、わからんところはもっと積極的に先生に聞きに行きたいなと思う。部活は今日なんかベスト8入れたから今度はベスト4とか優勝目指して全力で頑張りたい。でも、1番は平和で楽しい部活にしたいかな。完璧な人間は存在しないと思ってるから、多少の揉め事？があつたとしても、長い目で見た時に、なんだかんだ楽しかったって思えるような部活にしたい。」

私「オッケーこれで終わります。」

まほこ「オッケーうちを選んでくれてありがとう」

私「こちらこそありがとう。最後に写真撮ろう!!」

まほこ「とろ!! 無加工嫌すぎる 笑」

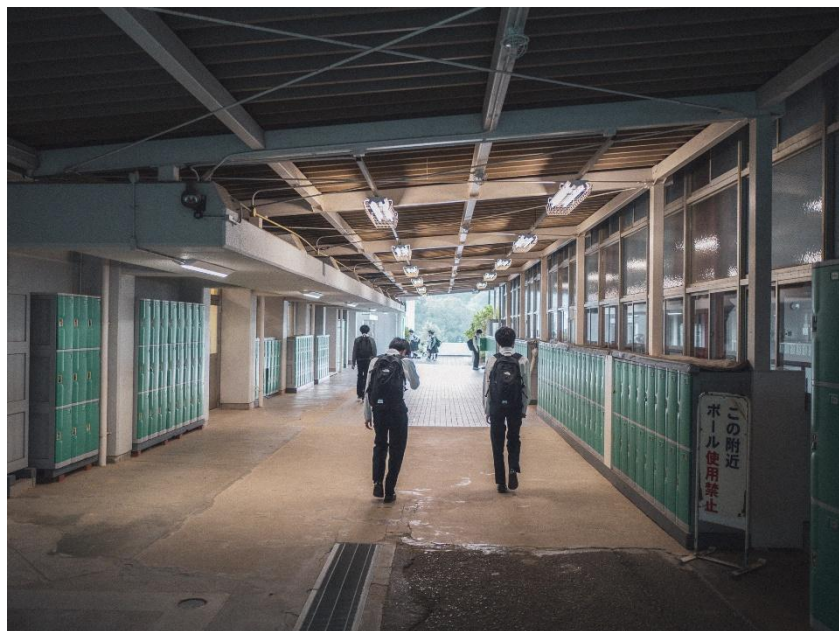
私「マジそんな笑笑」

○取材を終えて

今回この取材で一番感じたことは、「自分の意思、目標を明確に持つことの大切さ」だ。部活にお

いても勉強においても目標を持つことで、今後どうゆう風に行動したらいいのかが見えてくることを知れた。また、自分で目標を立てることで、「自分で決めたんだから頑張ろう」と思えるということも知れた。今まで私は、「なるようになればいいや」という安直な考えしかなかった。これからはまほこさんのように自分の目標をもつてたくさんのことにチャレンジしていきたいです。





憧れの存在

聞き手 田中一二三

取材の動機

僕の祖父（鈴木次郎 70歳ぐらい）は、時々怒るけど普段は優しくて頼りになってくれる人だ。祖父の職業はガス屋と米屋だ。祖父の大学生の時は、薬学部で薬剤師を目指していたけどなぜ米屋とガス屋を始めたのは分からない。どうして、祖父を取材相手にしたかというところ、こんなに年を取っているのになぜ、まだ働くのかなと思います、興味を持ち、気になったからだ。

取材相手の特徴

祖父の長所は、僕が疲れていた時や、悲しんでいる時に気分転換でどこかに連れて行ってくれる。また、テストでしようもないミスをしたときに祖父が「そういうミスをするところがお前の詰めが甘いところだ」と言ってくれる。そして、僕はその言葉に対してちよつとイライラするがその言葉のおかげでもっと賢くなるのだと思ひ、感謝している。そして、そういう祖父が、僕は、面白くて、優しいと思っている。そして、楽しく感じ、心の底から感謝している。

つまり、僕の気持ちや心を支えてくれている大事な存在である。

取材相手とのやり取り

僕「あなたは、なぜ大学生の時に薬剤師を目指していたのですか？」

祖父「その頃はどんな商売をどんな風な職業に就きたいかって考えたこともなく、ただ数学と化学に自信があったから、たまたま薬学部に行っただけのことで絶対に薬を売ろうとしたわけではなかった。」

僕「誰かから薬剤師を勧められて入ったのですか？」

祖父「それはなかった。ただ、あの受験科目と僕が一番得意とする科目が近かったから薬学部に行っただけで、だからどうしても薬屋さんになろうとかそういう気持ちは無かった。ただ、いろんな事情から河内長野に来ることになって、あの薬屋さんに勤めてたんやね。

それで妻と結婚することになって妻の家がたまたま米屋さんをしていたから、僕は米屋さんを継いでいこうかと思って思っただけ。そして、祖母のお父さんがしていた商売をもっともつと伸ばして、大きくしていこうと思った。賃貸業とかリフォームして、世間に合わせていろいろしてきただけで何をしたいということもなかったけどとにかく、お前たちの生活のために頑張ってた。」

祖父「有名なパティシエわかる？」

僕「ケーキの」

祖父「そうそう、パティシエで日本一になった人と話をする機会があって、そこで話している時

に、その人に一つ教わったことがある。それは何かというと、あんた、この大会に出なさいよって言われたときに普通やったらどんなことを考える？」

僕「何をその大会で出そうかを考える。」

祖父「自分もそう思っ、いろいろ考えたんやろうねっていう話をしたら、間違っていた。その人は何を言ったかわかる？」

僕「わからん、気持ちを考える？」

祖父「そう。まず、その時の審査員のことを調べ上げて、この審査員はどんな風なお菓子が好きか、どういうことに点数入れるか今までのいわゆるなんて言うの、あの大会の審査に関わった時にどんな人に点数をあげているかを考えた。」

まず、審査員のことを調べてメニューを考えたら3日、4日、ほとんどはそれに費やした。それを『傾向と対策』という。そこで傾向と対策を調べ上げて一番になった。そして、それを聞いて僕は、これは良いことだなと感じた。」

祖父「50年前の河内長野はすぐ田舎。大阪で言っても一番真ん中じゃなくて、河内長野が一番端っこや。一番端っこだと周りからは人が来ない。この中だけ。その頃はみんな自動車を家に持っていなかったから、その中で生活したら、僕はいろんなことを考えた。対策で一番考えたのは、僕はこの人たちが便利になるようにいろいろ考えて、改善して、祖母と2人であの小さいスーパ―をした。」

でも、それから20年たつてくると、みんな、女の人でも運転するようになって、バイクに乗って買いい物に出かける。そしてあのSタウンからTの方へ買いい物に出るようになって。今まではそれができなかったから便利なものをいろいろ考えてあげたらいいな。でも、その便利なものをお客さんは逆に外へ買いいところに行くようにしたら、これではダメだと思って今度はどうしよう、普通より安くしな、安く売らないといけないでも安く売ったら利益が落ちる。その対策を今度は自分でどうしようといろいろ考えたな。」

僕「何を考えたん？」

祖父「そして安く売る。でも安く売ったら利益は落ちる。今まで100やったやつがずっとやっていたら54になる。こうしたら、どうしたらいい？ その分株を占めたら数のためにどうしていいかをいろいろ考えて、スーパーを出店した。これが30年ほど前になると、安く売るお店がでてる。だから、それでは売り上げが落ちてくる。安く売っているから利益も少ない。そうしたら商売は赤字になってくるな？」

僕「うん」

祖父「そして今度はどうしたらいいかまたあの今度はまた違うことを考えて、一つ一つと特徴を持ったことをしていかないといけない。その頃には日本人全体が贅沢なこともするようになってきて、いろいろネットもできてきたから、お客さんがいろんなことを欲しがる世の中になってきた。そしてネットでいろいろな生活がしたいとか、お客さんがみんないろいろ考えて物を売るよりも

そういう生活を充実させたいお客さんの生活を達成できるようにしてあげようと思う。例えば、リフォームやそういう建築の方にも近いからあの伸ばしていきたい。そして、時代に一二三はこれからどうなっていくと思う？」

僕「企業や技術が発達して、世の中が楽になると思う。」

祖父「そうやな。」

祖父「どういう傾向になる？ 世の中がどう変わっている？ 物価とかが高くなってきている。」

僕「うん」

祖父「その原因で今のものがだんだん売れるようになってきて、それはなんでいいとか環境とかが悪くて、ものが取れなくなっている。でも、一番大事なことがある。少子高齢化でお客さんの数が減ってきているから年寄りが増えてきている。受け継ぐ人は、それに対してこれからはもう自分の時代も終わってきたわけだから、今度は一二三たちがそしていろいろ考えな。」

だからこの傾向と対策は、私が今言ったように50年の間いろいろ考えてきた。けど、ここからが大事だ。ここからが今のそのような発見の中から一二三もそのこれから自分がどう生活していこう。どういう職業についていこう。考える上において、その中で成功するためにはそういう傾向と対策を考えなきゃダメだ。そして一二三は今、少子高齢化やそういう環境の劣化を考えて、その傾向を取り入れてできることを対策して、何が一番いい商売かを考えないといけない。だからこの商売をしなさいなんて、僕はサラリーマンになろうが何屋さんになろうが全然構わないけど、今の傾向をじっくり

考えて、今の傾向にはこういうことがあるからそれでいいと思うだろうと少子高齢化とかいんな問題を考えてどんな商売がいいか決め。」

僕「どんな人でも、便利な物が売っている商売をしたいと思う。」

祖父「どんな生活がいいかな？」

祖父「どんなサラリーマンになるにしても、どういうところに就職しようかなって考えてその対策を考えて、一番いい答えに辿り着けるように今から頑張ろうと思います、って書いたら物語の起承転結あるな。そうやったら物語ができてくる。」

祖父「わかった？」

僕「ありがとう。」



	3	4	5	6
	Li	Be	B	C
	リチウム	ベリリウム	ホウ素	炭素
	11	12	13	14
3	Na	Mg	Al	Si
	ナトリウム	マグネシウム	アルミニウム	ケイ素
	19	20		
4	K	Ca		
	カリウム	カルシウム		
○元素記号1番～20				
	元素名	金		
	元素記号	Au	Ag	Cu

憧れの先生に近づくために

聞き手 桐山結月

取材の動機

私が魅力的に感じる人は、私の小学校6年生の時の担任の先生、渡辺薫先生である。私の中で一番いい意味でとてつもなく印象に残っている先生だから小学校6年生の時の担任の渡辺先生を選んだ。

渡辺先生のどんなところが魅力だと思ったかというと、常に笑顔で、誰かの話を聞くときに、どんなにつまらなくても、頷きながら聞いてくれたところだ。実際、私のしょうもない話を休み時間延々と聞かされていた渡辺先生。給食はあれが好きだ、とか、昨日弟がお母さんに怒られていて私まで巻き添えを食らってしまった、だとか本当にわけのわからないことを先生に話していた私。今思い返せば、先生も仕事あったらどうにな、と申し訳なく思うくらいだ。けれど、先生は、私は昨日の菜の花ふりかけが好きかな、と一緒に話を盛り上げてくれた。途中で他の先生に呼び出されても、戻ってきては、さっきと同じ話を続けてくれた。それも、笑顔で。先生には本当に救われたな、と今になってしみじみ感じる。

初めて私が渡辺先生という人がいるというのを認識したのは、私が小学校5年生の時、隣のクラスを担当していた渡辺先生のことを、背が私よりも小さいから、ということもあってか大人しくて、見た目のわりに怖い先生なのだろうと勝手に思っていた。そのまま6年生の担任として持ち上が

ってきて、怒られないといいな、と思いながら始業式を終えた。最初はびくびくしていたものの、クラスや先生に慣れ始めると、渡辺先生は実はめっちゃ面白くて、たくさん笑わせてくれて、授業中でも家であったことや、家族に起きた出来事を話す、子供みたいに天真爛漫でおてんばな先生だった。年上でしかも先生だが、ふいにも妹みたいで可愛いな、と思うこともたびたびあった。忘れ物だってたくさんするし、高いところにあるものは、クラスの男子にとつてもらって、それをネタにして笑わせてくれたりと、とても最高な先生だった。今思い返してみれば、今まで出会った人の中で一番個性が強い人だったな、と思う。そして、渡辺先生を超えるほどの個性の持ち主が現れるのか、と逆に考えてきているほどだ。

卒業式の後、本当のお別れを渡辺先生としなければならなくなった。けれど私が六年生になってから見てきた笑顔と同じように、ひまわりみたいな暖かい笑顔で私にたった一言、＂あっちでも頑張つてね＂と言ってくれた。どんな時でも笑顔で接してくれる私の元担任の先生は、渡辺先生は、今でも人生の担任の先生なのかもしれない。そして、私の初めてこんな人になりたいと思った、憧れの人である。私も笑顔を絶やさず、人の話を最後まで相手が話しやすいように無意識のうちに頷ける先生になりたいと思っている。

そんな憧れの先生に近づくべく、先生自身、先生が笑顔でいて良かったことはあるのか、なぜ自分の周りのことを話すのか、無自覚に話しているのか、それとも何か意図があつて話しているのかを知ってみたいと思い、インタビューをしようと考えた。また、渡辺先生が笑顔でいっぱいの先生になっ

た成り立ちが知りたく、インタビューをしようと思った。

取材概要

日時…2024年8月11日

場所…福岡県〇駅前のロイヤルホスト

取材した方…渡辺薫さん

自分との関係…小学6年生の時の担任

日程の決定

渡辺先生とは、小学校以来福岡と大阪で離れ離れで、先生と私は手紙でしかやり取りする方法がなく、取材の動機とともに、私のメールアドレスと電話番号を先生宅に送った。

けれど、渡辺先生からは電話が一向になくて、夏休み中の取材が間に合うかな、と心配していた。

しかし、渡辺先生は、私に何度も電話をくれていたのだが、私は先生の電話番号を知らなくて、迷惑電話だと思い無視してしまっていた。先生が清教学園に電話してください、それを聞き、私は急いで折り返しの電話を先生にかけた。「気づかなくてごめんなさい。」という私の謝罪の一言から始まった、渡辺先生とのインタビューの日程決め。大阪から福岡という遠く離れたところする取材なので、ぎりぎりまで日程は確定しなかったけれど、先生は取材を快く引き受けてくれて、私がちょうど帰省

するタイミングでスケジュールをあけてくれた。

取材の実施

家を前日の17時に出発し、26時には福岡に入り、11時にロイヤルホストで待ち合わせだったので、10時50分には駅前で待っていた。しかし、駅前にはガストしかなく、駅から少し歩けば、ロイヤルホストがあり、どっちなんだろうと迷った。普通ならば、ロイヤルホストに向かうが、先生はふわふわとした先生で間違えるだろうな、というような先生だったので、ガストかロイヤルホストか親と迷い、結局先生に電話して、ロイヤルホストで間違っていなかった。親と一緒に笑いながら、親にロイヤルホストに連れて行ってもらった。

取材の前

ちょうどお昼時だったので、一緒にロイヤルホストで、お昼ご飯を食べることにした。ロイヤルホストに来たことがなくて、お金の感覚がわからなくてメニューをみるとびっくり思ったより高くて、先生はお肉でもなんでもおごってくれると言ってくれたけれど、さすがに気が引けて、自分が大嫌いな野菜たっぷりのサンドウィッチをお願いした。そして、ポテトもついてきて、ケチャップをかけようとしたけれど、先生がつけてなかったもので、それを習ってじゃがいもの味を楽しんだ。お昼ご飯を食べている間はずっと先生と雑談をしていて、とても楽しかった。

私「取材の日程もあわせてくださったのに、ご飯まで、すいません、」

渡辺先生「いいとよー。逆におごらんと先生としてあれやけん、笑」

私「笑、ありがとうございます。」

渡辺先生「大阪の方ではどうなん？ ゆづちゃん、進学校に通つとるけん、大変やろ？」

と、渡辺先生は私のことを心配して下さった。私は、確かに勉強が難しいと思っていたので、私はこう答えた。

私「そうですねー。確かに勉強ついてくの大変です、笑」

渡辺先生「そうだよー。でも、六年生の時からゆづちゃん頭良かったけん、進学校行った、って聞いた時には、納得したよー。」

私「ほんとですか。まあ、現在進行形ではついていけないですけど、笑」

渡辺先生「勉強も大変やろうけど、方言とか友達とかは大丈夫と？」

私「そうですね、方言は最近慣れ始めてますけど、博多弁は使い続けてますよ、笑。博多弁が私の盾みたいな感じなので、笑」

渡辺先生「ほんとに。」

私「はい。ただ、友達は合わない人が多くて、ひきこもってる感じはあります、笑」

渡辺先生「ええ、そうと？ ゆづちゃん誰とでも、仲良くしとるイメージしかないっちゃけど、笑」

私「ほんとですか、！」

渡辺先生「そうそう。転校生来た時も真っ先に声掛けとったけんさ。先生的には助かつとったっちゃけどね。」

私「ほんとですか。それはよかったです、笑」

渡辺先生「あれ、何部入つとるんやっただけ？」

私「吹奏楽ですよ。実は今年府大会まで行けて、笑」

渡辺先生「ええ！ そうなん！すごいやんおめでとー！ 先生も吹奏楽やっただちやけどさ、三年間ずつと、ピッコロ吹かされとったわ、笑」

私「ええ、三年間ずつとですか。フルートと掛け持ちとかではなく、？」

渡辺先生「そうそう。ずつと、曲の中の長い休みの間に、なんですつとピッコロなんやろ、って考えとったよ、笑」

私「確かに、ピッコロ休み多めですもんね。」

渡辺先生「そうそう。でも、星条（曲。音楽隊隊長 ジョン・フィリップ・スーザン作『星条旗よ永遠なれ』）ではソロあったから楽しかったけどね。」

と、楽しく雑談した。そして、吹奏楽部に入っていた、という意外な共通点があって、好きな担任の先生と同じで嬉しかった。

先生の憧れの人

まず最初に私が渡辺先生に質問したのは取材したいと思った時から決めていた、どうして小学校の先生になりたいと思ったのか、ということだ。どうして私が小学校の先生になったのかを聞きたかったのかというと、私は確かに先生が子供好きなのを知っていた。けれど、子供が好きだけで、教員免許だったり、授業の準備などのめんどくさいと私は思ってしまうことをするのかと、不思議に思ったからだ。

私「渡辺先生は、どうして教師になろうと思ったのですか？」

渡辺先生「子供が好きなのは、ゆづちゃん知っとーもんね。それ以外ってことよね？」

私「はい。先生が子供のことが大好きなのは元6の1、みんな知ってますよ、笑。」

渡辺先生「笑、それもそやね。そやね、私も憧れやったとよねー。」

私「渡辺先生が小学校の先生になった理由が、ってことですか？」

渡辺先生「そうそう。私の場合は、小学校3年生の時の先生やったっちゃけどね。」

私「その、小学校3年生の時の先生ってどんな人やったんですか？」

渡辺先生「その先生がお母さんみたいな人で、誰にでも声をかけてくれる先生やったんよ。実はその時、先生は、どっちかというと隅で大人しくしとるような子やったけんさ、周りの子とかはめっちゃ先生に話しかけとつても、ひっそりしとつたんよね。」

私「渡辺先生がですか？」

渡辺先生「そうなんよ。意外やろ？」

私「結構意外です、笑。」

渡辺先生「そう。でね、その先生が隅っこにおった私に声をかけてくれたんよね。ゆづちゃんが先生の魅力を一言で表してくれたみたいになったら、その先生は一人一人を受け入れてくれる、包容力が先生には魅力的やったとよね。」

私「なるほど。子供好きになったのも、その先生の影響ですか？」

渡辺先生「うーん。子供が好きやったのは前からなんやけど、その先生みたいに子供に接してたらもっと好きになったとよね。ほら、優しく接しとるけんさ、皆懐いてくれるとよ、笑」

私「先生、影響受けまくりですね、笑」

先生のトレードマーク

先生のトレードマークは、絶対に笑顔だ。いつでもこにこしていて、自然と先生の笑顔がうつつ

てくることが小学校時代たくさんあった。笑顔でいいことは少なからずあると思うが、例えば、というのを聞いてみた。

私「次に、先生のトレードマークは笑顔すぎることだと思うのですが、笑顔でよかったことなどあったりしますか？」

渡辺先生「そやね、やっぱり、こうしてゆづちゃんが私に取材しに来てくれたことやね。」

私「そうなんですか？」

渡辺先生「そうよ。やって、笑顔でおったことが、ゆづちゃんの記憶に残ってインタビューしてくれとよ？ 嬉しいやん！」

私「ええ、笑。ほんとですか。」

渡辺先生「人の記憶に、好印象で残れて嬉しい限りやわ。急にお手紙届いた時は、学校の先生の移動連絡かと思ったよ、笑」

私「笑笑。それはすいません、笑」

渡辺先生「手紙来た時は驚いたけど、取材の動機が書かれた手紙を読んだら、めっちゃ嬉しかったし、なんか恥ずかしかった、笑」

私「まあ、私ちゃんと先生のこと見ていたので、笑」

渡辺先生「そうそう。そんな会話とか覚えとるんやなって思って、これからちゃんとしようって思

つたとよね 笑」

私「覚えてることと覚えてないこととたくさんありますけどね、笑」

渡辺先生「それもそやね、笑。」

私「私的には、渡辺先生は、私の人生の先生ですから。」

渡辺先生「そうなん！」

私「笑顔もちろんそうですけど、頷くこととか、当たり前のことを教えてくださいましたから！社会にも役立つって先生ずっと言っていましたし。」

渡辺先生「そんなこともあったね。笑 よう覚えとるわ。それにさ、教師っていう仕事は、成果が見えんとよね。やけん、教師になって、ゆづちゃんの担任になれて良かったなって思ったよ。」

私「ええ、ほんとですか、笑。私も先生の生徒になれて良かったです。」

私「最後に、先生ってよく授業中に出来事とかよく話してくださいですか。あれはなんなんですか？ 授業って結構きつちりじゃないですか。はっしー先生（5年生の時の先生）なんてきつちり、っていうレベルじゃないくらいきつちり授業してましたもん。」

渡辺先生「笑笑、そうなん。H先生そんなにきつちりやったんや。」

私「本当に授業中は大変でした、笑」

渡辺先生「でもね、授業の進み具合とかちゃんと見てたんよ？ それに高学年やけん話そうと思っ

たんよね。」

私「高学年だからですか？」

渡辺先生「そうそう。高学年ってさ、まだ1年生と比べると大人っぽいとかはあるけど、それ以前にたくさん勉強するやん。やけん、まあそやね、気分転換的な感じよね。まあ、余計なこと話すこともたくさんあったけど、笑」

私「そうですね、笑。いつも脱線しまくって誰かに授業に戻してもらうって感じでしたし。」

渡辺先生「そうそう。それに、なんていうんやろうね。大人と子供、先生と生徒っていう、かつちりした関係はなんか堅苦しいって思っとったけんさ。」

私「距離的なことですか？」

渡辺先生「そうそう。身近に感じてほしいっていう感じよね。でも、べたべたされたり、するのは違うから、程よくね、笑。」

私「それもそうですね、笑。あくまで、教師と生徒ですもんね。」

渡辺先生「そうそう。」

私「まあでも、先生の話って大体みんな笑ってましたよね。なので、その辺でも笑顔っていうのは学びました、笑」

渡辺先生「ほんとに。なら良かった、笑」

怒らなかった先生

笑顔満点の渡辺先生。先生は怒る生き物だと思っていたから、一年間怒ったことがない先生には疑問があった。なので、最後、最後となってしまったが、聞いてみることにした。

私「あ、本当に最後に一つだけ聞いてもいいですか？」

渡辺先生「笑、いいよ。」

私「すいません、笑 渡辺先生は、今もそうですけど、ずっとにこにこしてて、怒ったことがある印象がなくて、怒りたいなと思ったこととかありましたか？」

渡辺先生「ええ！ 怒ったことあるよー。みんなの前で怒ったことあるのは一回くらいかもやね。そんな、6の1のみんなに怒られるようなことなかったし。」

私「ええ、そうなんですか。びっくりです。N(同じクラスだったやんちゃな男の子)とかこつちが見てたら、はらはらどきどきでしたよ、笑」

渡辺先生「あー、笑 でもちよいちよい、おいでっていつて呼んでたよ。」

私「ええ、知らなかったです。先生にとつての怒るってのは、私たち生徒からみた注意ってことですね、笑」

渡辺先生「ええそうなん、笑 怒ってるつもりやったっちゃけど、笑」

取材を終えて

取材を終えて、先生の「魅力」は、「笑顔」や「憧れ」という一言で終わらせるには勿体ないくらいの「人間性」だと思った。取材はちょうどお昼だったので、お昼ご飯と一緒に食べたのだが、奢ってくれたり、車まで駅に送ってくださったり、取材中も優しく笑いながら答えてくれたりと、言葉にすると、長々なってしまうくらい、人間として本当に憧れだった。その「人間性」があつてからの、笑顔いっぱい、天真爛漫の人の憧れになれるような人だと思った。

そして、雑談をたくさん取材中もしたのだが、元吹奏楽部という共通点で盛り上がった。取材の最後にも「大阪でも引き続き頑張つてね」と言ってくれた。卒業式の時に言ってくくださったのと重なって、泣きそうになった。そして、久しぶりの博多弁に囲まれて、とても楽しかった。私も自分らしい「人間性」を作り上げていきたいなと思った。そして、私が渡辺先生みたいになりたいと思ったように、私が渡辺先生を憧れの人として紹介したように、私も紹介されるような、憧れてもらえるような、人間性を磨きたいなと思った。



My teacher

聞き手 渡川歌麿

取材の動機

私は英語が苦手だ。だから、肩に力を入れず、なめらかに英語を話しているのをみると、かつこいと思うし、心から尊敬している。

それに、先生はすごくあったかい人だ。

怒られるかもしれないけど、お母さんのような、おばあちゃんのようなあったかい人だ。

そんな先生にどうやって英語と出会い、なぜ喋れるようになったのかをきいてみたいと思った。そして、今後、私が英語を勉強する上で、参考にしたいと思った。

また、これは私の興味だが、中学にかよっているところからきいた話だと、その校歌の作詞者に先生の名前「ミカンみゆ」と書かれていたそうだ。

取材したいこと

一番最初に英語に触れたのは？

学生時代の英語の成績は？

英語の勉強をしようとしたきっかけは？

英語を話せてよかったなと思うことは？

今まさに英語を学び途中の私に、アドバイスをお願いします。

取材概要

取材場所…ミカン先生のご自宅

日時…8月21日 7時

取材相手…ミカンみゆさん

塾に行くついでに取材をさせてもらおうと、ママに車でミカン先生のご自宅に送ってもらった。車を降りて、椅子に座って待っていると、ミカン先生が来た。「こんばんは」と言ったら「こんばんは」と返してもらった。早速取材を始めることにした。

英語に触れたキツカケ

私「まず一番最初に英語に触れたきっかけはなんですか？」

ミカン先生「でも本当にちっちゃい時は別にあんまり。お父さんが、父が英語の勉強しててお風呂でよく123とか教えてもらったけど、でも、それぐらいであとは、そんなに特に何をしてたってわ

けではないんだけど、中学校に行つてあの英語が一番好きだったかなやつぱり。

でも私が生まれた時にすぐ未熟児でちっちゃい赤ちゃんでね、何回も死にかけたのよ。ですごく親に苦労をかけて育ててもらったんです。あのまあそういうこともあつてちよつとなんやろう……ちよつと普通の子と違ふところがあつて、例えば、これはずつと言われるんやけどあの幼稚園で真つ赤なリンゴの絵を先生が書きなさいつて言つて真つ赤なリンゴを教卓の上に置いて白い画用紙にみんなすごい赤いおいしそうなりんごを書いてたのに、私は三つの青いりんごをオフセンターに書いたんです。」

私「ええ！？　なんで？　？　！」

ミカン先生「それはたぶん、私がリンゴが嫌いだったからそうなたんだとおもう。なんで嫌いになつたかというと、うちの母が一生懸命私を育ててくれたんだけど、わたしはお弁当を、あんまりご飯を食べない子だったので、お弁当の半分がりんごのウサギさんがやつて、でそれは初めのうちは良かったんだけど、冬になるとそのお弁当を温めるつていう幼稚園のやつがあつて。

するとすぐおいしくなくなつて。生ぬるりんごがもう、ご飯にもそれがなんか染み付いて。うんだから端つこにそう、だからその時からあまりリンゴが好きじゃなかつたんだなと思われるんだけど。でも、うちの両親はびっくりして、でちよつともうこの子は日本の教育には向かないかもしれないなあつていうのはちっちゃい時から思つてたみたい。それで英語とか留学を考えたい。

それで、その私たちの時代つていうのはまあ清教の皆さんもすぐ勉強が大変そうなんです、

『受験戦争』って言われて、すごくこう受験に対する戦争って言われるぐらい激しい競争になった時代で。それだったらうちの母親は『戦争なんだったら疎開をさせる』と言って。で中学校の二年生のときにあの本気で日本から私を放り出す計画を立てて、でその当時まだその留学なんてしてる子あんまりなくて、だけどもあ、英語が好きみたいだし英語圏のところだったらいけるんじゃないかと思って、一生懸命調べてくれて。で中学校の三年生になる時に結局イギリスに行くってことで日本の教育は受けていないです、ほぼほぼね、だから、その受験になる前に逃がそうってなったからもう三年生の時から日本にいなかった。」

留学しようと思ったキツカケ

私「留学しようと思ったキツカケはなんですか？」

ミカン先生「なんだったけねえ…だからまあ極論言えば、あの私が日本の教育に合わなくて両親が甘やかしてもいけないし、『日本の教育に合わないんだったら外に放り出そう』って思ってくれたことかな。」

私「今、私は留学することはできないけど、他にできることはESSで英語を話したりすることですかね？」

ミカン先生「そうだね。うんだから、なんかえっと、日本のまあ、特にあの高校の英語とかはすごく面白くないんだよ。あ、そんなことを先生に言ったら怒られるかもしれん。うん。だけど何ていう

か、英語ってほかの教科と違って本当に役に立つもので、でいつも言うんだけど人間だから言葉があるわけで、なんかすごいそれってともスペシャルなものだから。あの、何ていうのかな。こうテストだからとかさ、なんかこれ明日までに覚えなとかいうので、こう一生懸命勉強してるんだけどそれが目的ではなくて、本当に人間がコミュニケーションするための心を通わせるための道具だから、なんかもう少しこう温かい目で扱って上げていただければありがたいと思います。だから本当はねもうちょよっと楽しくいろんなことをしながら英語がマスターしていければね。」

作詞について

私「あと気になったのが、そのー、いとこのあんなが通っているR中学校の作詞をしたことについておしえてください！」

ミカン先生 「作詞ね、はいしました！」

私「オフアーが来たみたいなの？」

ミカン先生 「そうそう。うちの娘が学校にお世話になったときに、新しく小学校ができた年で。

それから中学校も新しく名前が変わるということになって。あのたまたま音楽の先生がうちの娘がお世話になっていたミュージカルの先生で、作曲をされる方だったので、作ってくださいみたいな話になって作りました。けどどさ作詞もたぶん一緒なのよ。だから私は言葉に対する想いが結構強い。強い方かなと思います。」

学生時代の英語の成績

私「学生時代の先生の英語の成績は？」

ミカン先生「英語が好きだったから、結構良かったと思う。中学校ってことやんね。イギリスではあの英語とか歴史とかダメだったけど」

英語ができてよかったこと

私「英語の勉強しようとしたきっかけと、英語話してよかったな、と思う時はどんな時ですか？」

ミカン先生「あー、つい先日もある長女がイギリス人と結婚してイギリスで結婚式を挙げただけど、200人ぐらいのお客さんが来て、2人ともなんかいろんな世界のいろんな国に友達がいるので、結構なんか十カ国ぐらいの人がまあ言ってきたんだけどでもすごくいろんな話ができたことはめちゃくちゃ楽しかった。だから、やっぱりまあ、しゃべれるっていうか英語でコミュニケーションできるのはすごく楽しいなって。」

今日もなんか美術館に行ったんだけど、外国人の人がなんか困ってて、でスタッフの人がちょっと対応できなくて、まあそんな時に助けてあげることができたり、そういうことがあるとずっと英語が大好きになるかな」

今の私にアドバイス

私「最後に今英語を勉強中の私にアドバイスをください！」

ミカン先生「もう本当にさっきも言ったように、本当に、英語ってその言葉だから。勉強では本当はなくて。あの必要なルールとかそういうの、まあ今学んでいるっていう感じだから。料理するのにさポテトの皮のむき方とかさ、なんかそういう感じだけど、あのぜひ嫌いにならないで続けてほしいなって。そしたら最後に素敵ないろんなお料理が作れるようになるよっていう思ってるし。」

あの苦手やって言う人もいるんだけど、でもあの日本語ってすごい難しい言葉を私たちは使いこなすことができるってことは相当高度な語学能力を持っていると思うので。それを信じて嫌にならないでやってほしいし、あの嫌にならないような教育を学校はして欲しいなってます。」

私「今日は貴重な時間をありがとうございました。驚く話が多くて、とても楽しかったです！」

まとめ

ミカン先生が出来上がっていくルーツを初めて知って、びっくりした。でも、1番は先生のご両親の思い、時代を先取る先見の目が先生の人生を切り開いたんだなと思った！

私は留学とかしてないし、英語の成績も良くないので、今は全く喋れないが、いつか先生のように英語を話すことが自然になるようにしたい！



変わった魅力を持つている人

聞き手 松田杏

私が魅力を感じる人は祖父だ。祖父は、私以外の他の家族からは少し変わった人だという印象を持たれている。だが、私はそんな祖父の変わっているところに魅力を感じているのだ。私は祖父の、「自分のやりたいことを自由にやっているところ」「私が知らない深く不思議な話をしてくれるところ」「自分がわからないことはわかるまで追究するところ」が魅力だと感じるのだ。

祖父を魅力的に感じる一つ目の理由は「自分のやりたいことを自由にやっていること」だ。私がまだ小さい頃には祖父とたまに習字をしていた。最初私は、祖父は昔から習字をやっていたとばかり思っていた。だけど、祖父は「最近やりたいと思いはじめたからだよ」と話してくれて、驚いた。自分がやりたいことをすぐに行動にうつせるなんてすごいなと。

他にも、祖父はいつも住んでいる家のほかにもう一つ、山にも家をもっている。少し山奥にあり、畑や川などがあってとても自然豊かな場所だ。祖父は山に行く頻度が減っていないので、よほど自然や山が好きなのだろうと思った。このようなことから自分のやりたいことを自由にやっている祖父を見ると輝いてとてもいいなと、いつも憧れている。

二つ目の理由は「私が知らない深く不思議な話をしてくれるところ」だ。例えば、魚はどう餌を動かしたらとれやすいとか、野菜の肥料の話とか、将来のためにしておいたほうがいいことや、薬の

ことなどの私が知らない深くて不思議な話をしてくれるのだ。去年の夏休み課題の弁論テーマも、祖父が睡眠について話してくれたからということもあったから決まった。

三つ目の理由は「自分がわからないことはわかるまで追究するところ」だ。この前、山のほうの家へ行くと部屋の隅には本が山積みになっていた。少し気になったので、どんな本を読んでいるのかと確認してみると、私が知らないような未知のことが書かれていた。昔の外国の絵や歴史が書かれている本や、薬のことなどが書かれている本が沢山あった。祖父はこれで沢山のことを知り、学び、活用しているのだと知った。

この三つの理由から私が魅力に感じる人は祖父だ。そんな祖父に、なぜ山に家を建てたのか聞いてみたい。あと、なぜ私が知らない深くて不思議な話を知っているのか。三つ目の理由のように本を沢山読んで知ったのか、それとも祖父の体験談を話してくれているのか聞いてみたいと思った。そして、祖父の人と違う考え方を知ってみたいと思った。

取材概要

日時… 8月7日 14時～15時

場所… 私の家

取材した人… 大久保雪皓さん

自分との関係… 私の祖父

取材する前

祖父と祖母が来るのを私は、30分くらい前からそわそわしながら待っていた。そうして待っていると、祖父と祖母が母の車に乗って私の家に来た。最初は私の母、妹も一緒に5人でいつも通りに会話をしていた。そうしているうちに私が祖父に取材をする時がきた。久しぶりに会った祖父に私は少し緊張していた。けれど祖父は、「焦らなくていいよ。あんが間違えたとしても何回も取材すればいい。」と言ってくれた。その言葉を聞いて緊張が和らぎ、落ち着いて取材することができた。

山に家を建てた理由

私はまず、聞きたいと思っていた山に家を建てた理由について聞いてみた。

私は「ではまず、魅力に感じる一つ目の理由が自分のやりたいことを自由にできることです。そのことについて質問します。山にもう一つ家があるじゃないですか。あの家を建てた理由やきつかけがありますか？」

祖父「なんで買ったんか… そうやなあ。おじいちゃん本来は、高知県生まれの高知の仁淀川っていう日本で一番きれいな川のほとりで育ってるんよ。だから自然環境が大好きで、魚をとるのが大好きな少年でした。だけど、そういった環境が大阪に来てからは無くなって、やっぱり自然環境がある、

『なんかどっかいいところはないかな』と思って探しとつたら、あの山を見つけました。それで横に小川が流れて、誰もいない、静かな空間を見つけて買ったんやけど、まあそれはちょっと正直じゃないかな。44歳ぐらいの時に体調を崩してしまって、山のような空気のいいところに入って、自分をもう一回立て直そうと思って、その場所を自分の病院のように考えて買ったの。それが本音かな。」

私「なるほど。わかりました。」

私はもつと単純な答えが返ってくると思っていた。「やりたいから行動にうつしたのだ！」みたいな。けれど話を聞いていると、祖父なりにいろいろ考えて山の家を買ったのだらうと気づいた。祖父は何も考えずにやりたいことを自由にしているのではなく、色々考えて、やりたいことをしているのだと知った。

昔、私は祖父のやりたいことを自由にしていることを真似て、一度何も後先考えずに自分の思うままに行動したことがあった。その後は自分の立場が苦しくなったり、誰かを傷つけてしまったということもあった。そのことから後先のことばかり考えて、思い切って自分のやりたいことをやっていなかった。でも祖父の今の話を聞いて、後先のこともちゃんと考えつつ、できる範囲でやりたいことをした方が人生をもっと楽しめるということを気づくことができた。そして、新しい考え方も知ることができた。やはり祖父は私に新しい考え方をくれる。

自分の哲学

私「では、次の質問に移ります。魅力に感じる2つ目の理由は私が知らない深くて不思議な話をできることです。なぜ、そのような話を知っているのですか？ 山の家に部屋の端とかに結構本が置いてありますよね。そのような沢山の本から知識を得ましたか？ それとも、誰かから聞いて知っているのですか？」

祖父「ほとんどはね、自分で考えました。自分で考えて、自分で哲学をしました。だから、私というのは何かとか。人間が平気で『わたしわたし』って言うけど、『私という存在は我思うゆえに我あり』とかっていうね。デカルトだったかな。その哲学者の言葉もあるけど、自分が思うから自分があるとか。人間は私っていうその私ってどこから生まれてきたんやろうということを考えてたかな。」

私はいつも本で新しい考えを知って、その理由もあって本が好きだった。だけど、祖父は自分で哲学をして、自分の考え方を見つけている。そのようなことをする人がいるのか。しかも身近に。と、私は驚いた。なら、私もほかの人の考え方を聞いても納得しなかったら、自分の哲学を考えて、自分でそのことを納得できるようにしようと思った。

挑戦を続けることができる言葉

私「では次の質問です。魅力に感じる三つ目の理由は、自分がわからないことはわかるまで追究す

るところです。私は、追究することはそのことに挑戦することだと思いました。そして、私の中では何にでも挑戦することができるとおじいちゃんに見えます。でも私は先のことばかりを考えて挑戦することができません。どうすれば、挑戦することができるようになりますか？」

祖父「おじいちゃんも何にでも挑戦できるってわけじゃない。おじいちゃんだって挑戦できないことだってたくさんあった。でも、その時に一人先輩がおって、その先輩が『青年はね、激流のときや』ってね、ヘミングウェイの言葉だったかな。もししたら先輩が自分で作った言葉かもしれんだけど、『お前な、川が流れてる前に行って、よう飛び越さんからと言って、ひき返すっていうのと同じ事やってるんやで』って。『ここまで来たら若い青年はな、激流の時やから激流の前に立ってひき返すつちゅうのはあかん』っていうことを先輩が教えてくれて、飛び込ませてその川を。で、ジャボンと落ちたらまた泳いでからね、もう一回やったらいいって言うねことをその先輩に教わりました。尊敬する先輩だったから『そうかそういうことなんや』と思って。『失敗しても諦めずに何回も何回もチャレンジしてやるのが大事だな』と思いました。」

祖父の好きなもの

私「ではちよつと話変わりますけど、おじいちゃんって石とか集めることが好きじゃないですか。他にも好きなことあると思いますけど、そういう好きなことをつくるきっかけと違ってどういう感じでつくったりしますか？」

祖父「まず石っていうのは、仁淀川の石っていうね、非常に宝物のような魅力的な石。その沢山の石の中からそういうね、山の上からずっと石が下りてくるわけやから。川に流れていくうちに石がいろんな変形をしたり、形を作っていく。磨かれもする。そういうところの川がおじいちゃんの住んでおった仁淀川という川の田舎の町なんですね。だから、その中で普通はゴロゴロした石で大抵の人は誰も興味を持たないの。魚に網を張って、魚を追い込むための石をほるだけで、大抵の人は石なんか集めない。

けどね、その川の石が非常に綺麗やっていうことを教えてくれたのは、おじいちゃんのお母さん。お母さんは絵を書くことがとても上手い人でした。だからそういうことに対して、非常にこうサツとわかる人であって。そのお母さんが『ゆきちゃん。この仁淀川の石ってね、こんなにきれいやで』っていうことをね、特に水につけたら色がパーツと出てくるわけね。それをね、お母さんが教えてくれた。教えてくれたから、仁淀川を歩いているうちに魚をとるだけじゃなくて、石も見るようになって。そこから始まってね、石を拾うようになってあんだけ沢山の山のような石を拾ったけど。それがね、おじいちゃんの唯一の趣味です。」

祖父の考え方

私「では今からおじいちゃんの考えかたを知りたいので、もしもの話をしてもいいですか？」
祖父「どうぞ。いっぱい質問して。」

私「ではもしもの話ですけど、明日死んでしまうなら何をしたいですか？」

祖父「すごい質問を考えてくるな。そうやなあ。明日死ぬと思ったら何をするか… まあけど

ね、おじいちゃんはもう山で一人で生活することが多いから。いつ消えておらなくなってもいいという覚悟でね、いつも生きてるの。自然の中で、小川があつて、田んぼが15個あつて、田んぼには全然お米作らずに雑草が生えてるだけけど笑

その山の静かな横に小川が流れる空間。しかも湧き水。そんな環境の中におるとね、もう自然の中にね、自分が埋没してしまいうような感じになる。で、ここで倒れて死んだら『まあ別に上等やなあ』っていう感じで。まあ宇宙の中に帰っていくっていう感じかな。あんまり悲壮感がない。だからおじいちゃんね、宇宙の旅人であるという感覚を若い時から持っている。だからいつ、星に変わるんか。それとも魂でうろろするか。魂も星もないのかもわからん、消えるっていうね、ゼロになっちゃうのかも。それはわからんけど、なんかそれがね、自分が消えていくことに対しては、あんまり恐怖感がない。それでまあ、殺されるとなったら、その恐怖感を感じてね、抵抗すると思うけど。

けどね、死つていうような言葉で言われると、自分にとつてね、生きてるといふことと死ぬという事の世界にそんなに大きな差は感じないかな。『ちよつと行つてくるわ』っていう感じかな。だからそんなにね、まあ死ぬ間際になつてみるとわからんけど、うろたえるかわからんけど。今の感覚で聞かれると、死もまた生と同じになつて。そういう風に思つてゐるかな。死もまた生きるということと変わらないと。連続しているっていう感じかなあ。だからもしかしたら、おじいちゃんの感覚からした

ら、自分が死んだらその辺のところからパッと呼ぶぐらいのことができそうに思ってるから。まあそんな感覚かな。」

私「そういう考え方もあるんですね。初めて知りました。」

やはり祖父は変わった人だ。生と死をこのように考えている人なんて滅多にいない。だけど、これもまた祖父の魅力の一つだと思う。

考え方を変える

私「では最後の質問です。おじいちゃんは、悩むことがあった時どのようにして自分を立て直しますか？」

祖父「うーん。でもね、悩めるってことは生活が充実しているんだと思うの。だって、もっと酷くて最悪な状況があったら、悩むことなんてないし。もし悩むことがあったなら、『自分は他で充実しているからこのことについて悩むことができるんだ』とプラスに考えたらいいと思います。」

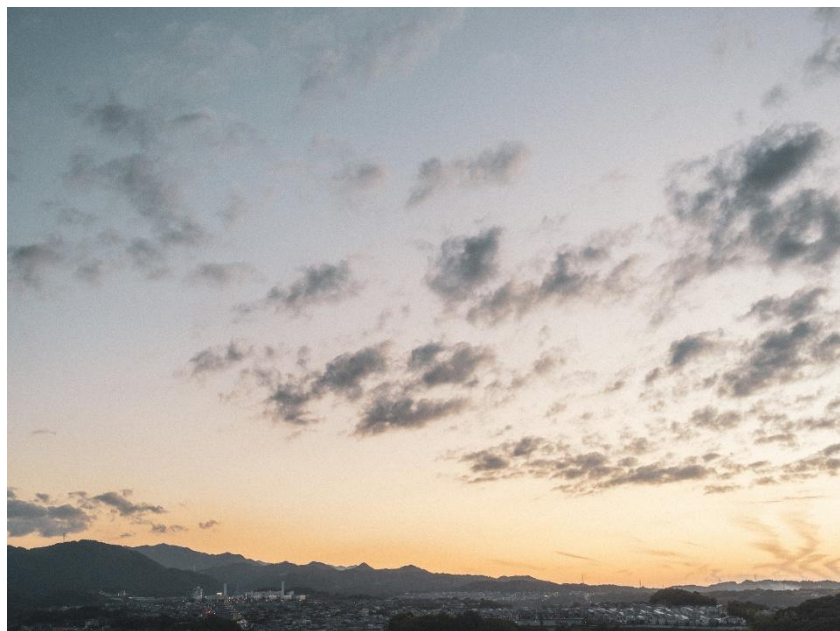
私「確かに。私も次からプラスに考えていきます。ではこれで取材を終わります。時間を取っていただき、本当にありがとうございます。」

祖父「こちらこそ、色々取材してもらって楽しかったです。ありがとうございます。」

取材をして

最後に祖父に「写真一緒に撮ってもらってもいいですか？」と聞くと、こころよくひき受け入れてくれた。私はこの取材を試みて、祖父の魅力は、ほかの人とは一味違う考え方を持っていることだと思う。それは、祖父の生まれ持った考え方でもあるだろう。だが、その最初の考え方が沢山の人を惹きつけて、そして祖父は沢山の人に出会い、様々な経験をしていたからこそ生まれたのが、今の考え方なのだと思う。私も、祖父には及ばないが沢山の人に出会い、様々な経験をしてきた。だから私も自分の軸がちゃんとある祖父みたいな大人になりたいと思った。





あとがき 語りが生まれるとき

授業担当 山崎勇氣

高校生の頃、ある冬の日の夕食後だったと思う。自宅のコタツでミカンを食べていたときに、なぜだか母の高校時代の恋愛話になった。

別に大それたドラマがあったわけではないし、とくべつ面白い話だったわけでもない。ただ母は、自分がフォークソング部に所属してギターを弾いていたことと、「そんなときな、付き合ってた人がおっくん」とだけ語った。私はといえば、「ふうん」と適当な相槌を打ったりして、それ以上は追及しなかった。

BGM代わりにつけたテレビのバラエティ番組では、タレントが下らないことを喋って大げさに笑っていた。その後、今日にいたるまで、母の恋愛話が話題になったことは一度もない。

地元の茨木市に、長く続く模型店があった。好々爺然とした店主の親父が、いつもカウンターの座っていた。私は何か買いに行くというよりも、その親父と喋りたくて、学校をサボっては店に通った。

彼はあまり自分の過去を話さず、もっぱら模型製作技術の話題が多かったのだが、ある時、戦中・戦後の思い出を語ってくれたことがあった。近所の茨木高校が、外壁を真っ黒なペンキで塗りつぶし、屋上に高射砲陣地を築いていたのを見たこと。戦後何もモノがない中、有り合わせの木材を使い、飛行機や艦船の模型を作ったこと。スポーツカー好きの客が親の介護のために愛車を売却し、それに泣かされたこと。

その話をして以降、彼が自分の過去を語る機会はなかった。私も進学や就職で忙しくなり、住む場所も変わって、もうあまり、模型店に顔を出すこともなくなった。

何年か経ったあと、彼が店を畳んだことを風のうわさで知った。

あの時の感覚を、いまでもたまに思い出す。

長崎県の離島で生まれ、十八歳までを島で暮らし、大阪の看護学校に進学した母。見知らぬ街で、新たな人々と出会い、子を生み育てた母。彼女にも、私と同じく高校時代があり、付き合う相手があった。

戦後に小さな模型店を開業し、地元の模型愛好家の人生を見届けてきた、店主の親父。創業六十年の節目で、高齢を理由に店を閉じた店主の親父。彼は長い年月をひとところ働いて、街の人々と関わりながら、最後は仕事人生に幕を下ろした。

なにも特別なドラマなどなく、偉業もなさず、ただ自分の人生を送る人々。誰もが、どこまでも普通で、ありふれた人生を送っている。

たったそれだけのことに気が付いた時、目の前にいる人々がまるで違う人物のように見えはじめた。

たまに挨拶する近所のおばちゃんにも。苦手だった数学科の教員にも。散歩中に会う、丸い眉毛をした、よその家の柴犬にも。どのような相手であっても、いまこの瞬間、私という存在の目前に立ち現れるまでに、その人にしか語り得ない、ありふれた人生があった。

彼らが自分のことを語る。私はその語りを聞き、彼らが生きた年月に思いを馳せる。たったそれだけのことで、自分の中で何かが変わった気がした。何もない自分にも、何かを語ることができそうな気がした。

何が変わったのかはわからない。あの頃の私に、何が語れたのかもわからない。ただそれは、「何者かでありたい」「何者かにならなければ」と必死になり、やりたいことを探し、難しい本を読んでもがいていた当時の私を、少しだけ救ったような気がするのだ。

ときに、この作品集がどのような経緯で発行されたのかを記しておく。

本稿は、清教学園中学校75期 2024年度 中学2年「総合的な学習の時間」における成果物をまとめた作品集である。授業の名称は「身近にいる魅力的な人に取材する…お互いがはみだしていく経験」。その名称の通り、「魅力的な人」を生徒自身が検討し、その人物の魅力に迫る取材を実施し、記録に書き起す、という趣旨だ。授業を始めて2024年度で2年目となった。

授業は次の三つの局面に分けることができる。最初に、取材相手を決め、動機を検討する1学期（8回）。次に、実際に取材し文字に起こす夏休み期間。そして最後に、推敲しながら原稿を完成させていく2学期（5回）。いずれの局面でも、黙して執筆する時間と、生徒どうしが互いの原稿について議論する時間を交互に取り入れた。

指導に関して、担当教員である山崎・南との間で、事前に取り決めたことがあった。それは、我々教員が作品の「よさ」を方向づけないことだった。たとえば今回、取材相手の選定や、取材内容の検討について、教員による助言は極力避けた。また、生徒が書いた原稿については、草稿・完成稿のいずれにも、添削指導を行っていない。その理由は、生徒が「じぶん自身の言葉で語る」ことを重視したからだ。

文章を書けない。作文が苦手である。こういった生徒が多く存在する状況は、中学3年で自らテーマを決め、卒業論文を執筆する清教学園中学校において、長年の指導上の課題だった。だが、生徒の苦手意識の根底にあるのは、単に作文のスキルや能力の問題ではなくむしろ、自由に書いて表現できない、じぶん自身の言葉で語ることができない、学校の作文授業の設計に課題があると感じていた。

この実感が、「教員による指導を極力避け、テーマも自由に書かせて、生徒どうしの相互評価に任せる」ことを是とした、本実践の在り方を方向づけた。論理的な文章を書く前に、まずは作文に書き慣れ、じぶん自身の言葉で語るトレーニングの一環である。

作品集完成は、ひとえに生徒が「魅力的であるとはどういうことか」というたいへんな問いに、果敢に挑んだ結果だ。生徒どうしの議論では、相手の原稿に対して、次のようなツツコミが常に飛び交った。

「あなたはなぜ、その取材相手を選んだのか」

「あなたにとって、その取材相手は一体何なのか」

「あなたが語るその人の魅力は、本当にその人自身の人格に迫るものなのか」

社会ではともすれば、役に立つか立たないか、優秀かそうでないかで人が評価される。学力競争の荒波に揉まれる本校においても、その傾向は同様にある。しかし1学期の授業を通じて、「魅力」という言葉を基準に取材相手を検討した生徒は、役立つか、優秀か、という評価基準を次第に捨て去っていった。そして学期の最後には、「よくわからないけど、魅力的としか言いようがなく、自分にとって大切な存在なのだ」という、元も子もない結論に至った。

夏休みの取材では、その「よくわからない魅力」に迫るわけだが、それが成功しているか否かは、それぞれの生徒作品を読んで判断して頂きたい。

本実践で参考にした先達の授業実践を挙げる。深谷による実践「カキナーレ」(注1)は、本校の一連の作文カリキュラム構築において、重要な先行実践例となった。テーマ、文体、分量、虚実を問わず、ペンネームによる生徒どうしの相互評価を重視するユニークな取り組みは、現在の中学生にも十分通用している。また、細川が実践し、牲川がまとめた、早稲田本庄高等学院『日本語表現総合』(二〇〇〇年度)での授業(注2)は、今回の取り組みで直接参考にした。魅力的に感じる人物の検討と取材、生徒どうしの議論を通じて、「わたしが語る言葉」を獲得していく当時の高校生たちの様子は、暗闇の中で新たな授業実践に取り組もうとする我々の希望だった。先立つ二つの授業実践者に感謝申し上げたい。

加えて、本実践に影響を与えた書籍も紹介する。松村が『はみだしの人類学』（注3）で論じた「はみだす」という自己・他者観は、授業のサブテーマに据えた。

同著は「わたし」と他者との間にある差異を受け入れ、互いに「わたし」の輪郭からはみだしあい、つながり、変容しながらともに生きる方法を示した。生徒にとっては、取材相手はもちろん、互いの原稿に意見し合うクラスメイトもまた、「わたし」とは異なる他者であったはずだ。授業を通じて、彼らは「はみだしあう」経験ができたのだろうか。

また、岸による『大阪の生活史』（注4）との出会いは、生徒の原稿を作品集にまとめる大きな動機となった。同じくインタビュー集という点で、本稿編集作業の多くの部分でも参考にした。

同著は意図して、インタビューの語りのみを記録しているため、生徒自身の語りも重視する本校の授業実践とは趣旨が異なる。しかし、市井の人々が、市井の人々を相手にインタビューするという点では似てゐる。大阪の生活史プロジェクトが「150人が語り、150人が聞いた大阪の人生」である一方で、この授業は「149人が語り、149人の生徒が聞いたその人の魅力」だった。

私は同著を読んだ時に「これは面白い。すごい生活史だ」と思った。いま、生徒の作品集の編集を終えて、やはり似たことを思う。ここには、149人の生徒と、その先にある149人の魅力がある。

授業実践の詳細は別途資料にまとめた。また、本書に収録されなかった全ての生徒作品は、クラス別に製本、清教学園図書館に収蔵されてある。合わせて参照頂きたい。

（注1）深谷純一（2021）『カキナーレ…若者の本音ノートを読む』東方出版 ほか

（注2）性川波都季・細川英雄（2004）『わたしを語る言葉求めて…表現することへの希望』三省堂

（注3）松村圭一郎（2020）『はみだしの人類学…ともに生きる方法』NHK出版

（注4）岸政彦 編（2023）『大阪の生活史』筑摩書房

あとがき はみだす・はみだされる経験

授業担当 南百合絵

あらためて彼らの作品を読んで、なんとも言えない気持ちになった。みんな本当によくやってくれたと、しみじみ思う。

山崎先生がこの授業をやってみたいと言い出して、本格的に考え出したのがちょうど2年前のいまごろ。勧められた『わたしを語ることを求めて―表現することへの希望』を、線を引きながら夢中で読んだ。こんな授業ができるといいなと胸が熱くなったと同時に、こんなことできるかな、と不安にもなった。が、山崎先生の「やってみよう」という想いが私にも伝染し、1年生のころからよく書いてくれる、清教学園の生徒たちとならできるかも、という後押しもあり、この「身近にいる“魅力的な人”に取材する」という授業をはじめてみた。

教員間で議論を重ね、準備して臨んだつもりだったが、実際やってみると反省と振り返りの繰り返しで、でもそこには大きなよろこびがあった。彼らがいろんな表情を見せてくれたからだ。作品であったり、議論の場での発言であったり、個人宛のコメントのなかだったり、様々な場面で彼らはこちらが言ったことをよく考えて、受け止めて、やってみようとしてくれていた。授業後には、教員同士でも互いの見聞きしたことを報告しあい、熱く語り合った。

そうして出来上がったこの作品たち。キラッと光る文章や表現がたくさんあって、そこにはそれを書いた彼ら自身の輪郭と、インタビュを受けてくれた相手の輪郭が見える。お互いが本音をさらけ出して、それを素直に記録しているから。

こちらは場を設定しただけで、「はみだす」という経験を、彼らは自身の力で経験してくれたのではないかと思う。取材報告がうまく書けなかった生徒もいるけれども、この授業に参加したこと、クラスメイトと同じ場を共有し、自身で「あーでもない」「こーでもない」と考えた経験も、「はみだした」ひとつの

経験である。いまは、それがなにか、どういった経験かなんてわからないかもしれないし、もしかすると、ずっとわからないかもしれない。でも、中2のこのときに、クラスメイトと、インタビュール相手と、教員と、文章越しにでもこうやって誰かと熱く語り合ったという経験は、あなたを形作るなにかになってくれるのではないかと思っている。

生徒作品集 2024

清教学園中学校 75 期 中学 2 年「総合的な学習の時間」生徒作品

語りが生まれるとき

・ 清教学園中学校 75 期 中学 2 年「魅力的な人に取材する」作品集 ・



2025 年 4 月 1 日 発行

著 者：清教学園中学校 75 期中学 2 年

発行者：山崎勇氣・南百合絵

発行所：清教学園中・高等学校

〒586-8585 大阪府河内長野市末広町 623

TEL 0721-62-6828

<http://www.seikyo.ed.jp/>

印刷・製本：株式会社シンカ・コミュニケーションズ

写真：清教学園中学校75期中学2年有志



本書はクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを採用しています。原作者のクレジット（著者、発行者）を表示し、かつ作品を改変しないことを条件に、非営利目的での利用（転載、コピー、共有）が行えます。ご不明な点は清教学園までお問い合わせ下さい。